

---

# 虹と翼と

零式章

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

虹と翼と

### 【Nコード】

N1910P

### 【作者名】

零式章

### 【あらすじ】

これは『変色する瞳』を持つ少年とドラゴンの青年の物語。

第一幕：人間界では忌み子と呼ばれる少年達を狙いジャイアントが村々を襲っていた。人々がジャイアントの襲撃を恐れ、忌み子を殺すのが世界の常識となっていく。兵士に追われ、足を滑らせた虹の忌み子が落ちた谷底にはドラゴンが封印されていた。少年と青年の出会いには必然だったのだらう。ここに彼等の物語が始まる。

第二幕：この魔界から無駄な争いをなくしたいと思う魔王、そんな彼がであったのは魔界に落ちてきた少年と青年だった。二人は魔界に何をもたらすのか？

（ドラゴン追加でお送りする予定です。チートの追加にご注意ください。）

## プロローグ（前書き）

最終話付近に残酷と思われる描写が入りますので一応の警告とさせていただきます

拙い文章ですが一時のお供になれば幸いです。

## プロローグ

村を追い出され、崖っぷちに追い詰められた少年。

武器を持った兵士に追われる彼に誰一人味方しようとする者はおらず  
その身に迫り来る矛先への恐怖から後退った。

その拍子に足を滑らせ、少年は谷底へと転げ落ちる。

落ちた先……谷底で少年はまだ生きていた。

辛うじて死んでいなかったというべきか？

そして彼はこの日、世界の嫌われ者と出会う。

世界からみたら、とてもちっぽけな出会いだけれど  
私にとってこの出会いこそが大きな始まりだった。

## 出会い 怪我と少年と青年

……頬を打つ水滴に目を覚ます。その水滴はやけに暖かった。確か自分は谷底に落ちたはず、で……死んだのかな？

いや、全身が痛い。そしてどこか遠くから呼ぶような声が聞こえる。これは生きてる。というか死んでも痛みが残るなんて僕は認めない。自分の怪我を確認しようと目を開く。

目が合った。

眼前にある人の顔、頬の辺りに虹色の光を放つ鱗がある青年。思考が停止して何秒経っただろうか、ソレが話し掛けてきた。

「ふう……生きてたか、怪我は無いから少し休んでから出て行くといい。」

「もしかして……ドラ、ゴン……？」

「ああ、人間が嫌うドラゴン様だ。なんだ、人間に助けられた方がよかったか？」

「ううん、相手が人間じゃなくて……よかった。助けてくれてありがとう」

気を失う寸前まで追い回されていたのだ。あいつ等に見つかってたらと思うとぞつとする。

自嘲気味に笑うドラゴンの青年へ、震えながら返す。

青年は怪訝そうに口を歪めて笑った。

「変わった奴だな。ドラゴンより人間の方が怖いなんて」

「だってキミは助けてくれたし、それに……僕の為に泣いてくれたから。目が赤いよ」

「べ、別にいいだろうが！それともドラゴンが泣いたら悪いか！いや、悪くない！

……まあ借りを作ったまま死なれると気分悪いしな。お前、名前は？」

「え？」

「少しお前に興味が湧いた。少しだけな？」

だから、名前。俺は虹の龍って事でコウって呼ばれてる」

「僕は…ツバサ。種族は」

「種族はいい。俺はお前自身に興味が湧いたんだ。

それにお前が俺を怖がらなかったんだ、俺もお前が何であっても気にしない」

コウがにかつと笑って手を差し出す。つられてツバサも笑い、二人は硬く握手をかわした。

## 状況整理 家と忌み子とドラゴン

コウの小屋に移動し改めて状況を整理する事になった。

「いつてもツバサが知ってる事など微々たる物でほとんどコウの話  
を聞く側なのだが」

「まずなんでドラゴンが嫌われてるか知ってるか？」

「確か、悪戯好きでじゃれただけのつもりでもとんでもない被害が  
出るからって聞いたけど…」

「正解だ。俺が封印された時、確かにそういう噂が流れてた。

でもな真っ赤な嘘さ。人間は人に似て人じゃないものを怖がるから  
俺はこんなとこに封印されたんだ」

苦笑してコーヒークップを回し、話を続ける

「で、ツバサが落ちてくるときに掴んだのがこの封印の核になる  
札だった

この小屋は封印が解けても俺が上に出なくていいように  
いや、出てくる必要をなくして出させない為につて用意されたもん  
だ」

「あ、だからさっき借りっていったんだ？ 僕が封印をといちゃっ  
たから自由に歩き回ってるんだね」

「そういうことだ、これが俺がここにいる理由。ツバサはなんで落  
ちてきた？」

上に兵士も一杯いたみたいだが」

ツバサはその質問に俯き、迷うように口を開けては閉じを繰り返して  
いた。



「……別に話したく無いならいいぞ？無理してまで知りたいわけじゃない」

「実は、ただ忌み子ってことしか分かってないんだ。」

こちらをまっすぐに見つめるツバサの瞳。……その瞳の色がゆっくりとかわっていく。

それを見たコウはクスリと笑ってツバサを撫でた。

「虹目か。俺とお揃いじゃないか」

「そう、だね。コウと御揃い」

自分の頬を指差して笑うコウにきょとんとしていたツバサも、頷いて嬉しそうに笑った

## 谷底での一夜目 歌と話と満月

夕食を済ませ、転寝していたコウの耳に届いた歌声  
何処かで聞いたことがあるような、懐かしい曲  
導かれるように声の元を探すとそこにツバサがいた

「なんだ、まだ寝てなかったのか？」

「うん、まだ少し上が恋しくてね」

「兵士とかに追われたっつーのに上が恋しいのか…まあ気持ちは解  
らんでもないが」

「やっぱりコウも封印された時は外が恋しかったの？」

「そりゃもちろん。喻えるなら大草原を駆け回る馬がいきなり4畳  
半の部屋に閉じ込められた感じた。

せつかくだし月でも見ながらお前が見た上のこと聞かせてくれない  
か？」

「……うん、多分コウが上にいた時と大分かわってるんじゃないか  
な。」

温かい飲み物を魔法瓶に入れて、ベランダから満月を見上げる。  
背中合わせに座ってぼつぼつと思い出を話す。

僕は唐突に世界が狭くなつてとても寂しかった。

でもコウの声が僕の心を軽くしてくれた、ただあいづちを打ってく  
れるだけなのに

楽しそうに笑って聞いているからかな？もっと、聞いて欲しくなる

急に静かになったと思ったらツバサが泣いていた。

胸が締め付けられるように痛んで俺も泣きそうになった。  
だけどそれをこらえて笑い掛ける。

「急に泣く奴があるか……たくしような奴だなあ」

「でも……だつて……っ」

「元気出せ。もう少し体力付けてから上まで連れてつてやるからよ」

「……ほんとに？コウはここから出る必要が無いのに」

「嘘ついてどうなる、ま、飯食って体力回復しないと行けねえし」  
週間は待たせちまうけどな？

理由なんてのはお前が上に行きたいってだけで十分だ

お前が笑うならそれで俺は満足する」

「ん、約束だよ？」

「ああ、約束だ。……冷えてきたしそろそろ中に戻ろう」

二人が小屋の中に戻ると、辺りを静寂が包み、月は優しく世界を照らし続けた。

## 町へ行こう 食べ歩きと説明と人攫い

約束から一週間後、二人は街にいた。

もちろんコウは肌を隠すように厚着をし、ツバサは帽子を目深に被ってと怪しい格好だ。

多少面倒だが無用の問題が起きるよりは何倍もマシだろう。

「ずいぶん変わったな。俺が上にいた時はもっと人は少なかったが」  
「暴君がいるから人間が増えてるらしいよ」

「……いや、暴君がいたら増えるのはおかしくねえか？普通重い税とかで死んでいくだろ」

「野党達も今の暴君が怖くて手を出してこないし」

毎年街の娘を何人が差し出せば他は特に要求して無いんだってさ」

「そりや増えるわな。……ちなみに娘の命惜しさに逆らうと？」

「そのまま町ごと滅ぼされる。で、結局連れて行かれるから無意味らしいよ」

「ドラゴンよりひでえな」

「それもそうだね、逆らう手段が無いからもつとたちが悪いし」

露天で買ったリングを齧りながら食べ歩きを続ける二人。

今の『上』のことがわからないコウにツバサの楽しそうな説明の声が続く。

なんでも、暴君は人ではなくジャイアントと呼ばれる巨人でドラゴン状態のコウの2倍ほどもあり

時に「忌み子」を狙って罪も無い村を滅ぼすことがあるとか。

ついでに言うならどんな忌み子を狙ってるかは生き残りがいないかわかっていないらしい。

無用に忌み子を増やす原因だろうな、と思考の海に漕ぎ出した所でツバサの声が途絶えた事に気づいて後ろを振り返る。

「……何処に行った？」

そこには街の喧騒しかなかった。

その頃、ツバサの周囲は真っ暗だった。聞こえてくるのは薄気味悪い男達の声だけ。

露天商にあったネックレスがコウに似合うと思い近寄った途端、皮袋に詰め込まれて連れ去られたのだ。

「まさかこんなところで忌み子に出会えるとはな」

「忌み子の肉は寿命を伸ばす薬になるらしいから、高値で売れるぞ」

「しかも親だつて捜そうともしないから、安全にボロ儲けた」

「暴君に売りつけてもいいかも知れんぞ」

周囲が見えず、抵抗が出来るほどの身体の内自由も無い。

おかしくてたまらないと言う男達の笑い声がただただ怖かった。

ツバサに出来る事は、一刻も早くコウが見つ付けてくれるように祈る事だけだった

人攫いの一人が肩を叩かれる。警官でさえ恐れて彼らには関わらない。

男は振り払うように肩を揺らす、また肩を叩かれる。

男は苛立ちながら振り返らずにあっちいけと手で示す、しつこく叩き続けてくる。

他の仲間が肩を叩いてくる奴を睨みつけ、硬直した。……そいつはまだ肩を叩いてくる。

いい加減に鬱陶しくなったのか、怒鳴りつけながら振り返り、硬直する。

「なんだ！ーいまいいとこなんだ…よ…っ」

「俺はその袋に入った奴に用があるんだがね？」

振り返り、目に入るのは虹色の壁、否、虹色の鱗を持った龍。

「は、はははい、お、お返ししますから命だけはわわわわ！？」

「さつさと失せる。俺は今虫の居所が悪い」

「お、おたすけええええええ！！」

人攫いが逃げ去るのを見届け、ふん、と鼻を鳴らして人間に変化するコウ。

がたがたと震える皮袋を引っ張りだすと、その結び目を解いて中を確認した。

「おい、ツバサ。無事か？」

「…助かった…？」

「唐突にいなくなったら心配するだろ、まったく」

「ごめん」

「あやまん、お前以外の人間はあんまり信用して無いから予測できた事ではある」

「じゃあ、ありがとう」

「…おう。ま、今日のところはここらで帰るぞ」

「晩御飯はなに？」

「んーまだ考えてない。帰り道に考えよう」

「はいー」

世界は大多数を誇るものと同義である。

ならば、大地の上で大多数を誇る人間に嫌われる俺達は世界に嫌われてると言えるのだろうか？  
ツバサの手を引いて歩く道すがら、そんな考えが頭から離れなかった。

## ドラゴン殺し 討伐隊と概念武装と修行の成果

ツバサが崖から落ちた日から何年かたったある日。  
今日も日課となった鍛錬を済ませ、二人が散歩をしていると  
遠くから馬に乗った集団が駆けて来るのが見えた。

「あれ、なにかな？」

「んー……？」

二人して目を凝らす。……唐突にコウがツバサを掴んで走り出す。

「ヤバいあいつ等に追いつかれたら殺される」

「えっただの武装した人達じゃないの？」

「たぶんあれはドラゴン殺しの呪いがかかった武器だ。」

第六感とでも言うべきもんがさっきからガンガン警鐘鳴らしやがてる  
死にたくなきゃ逃げろって!!」

「僕達を狙ってるとは限らないと思うけど……」

「ここらには俺しかいないんだよ、皆とつくの昔にいらなくなっただけ」

「……そっか、じゃあ僕が説得してくる」

「危険じゃないか？」

心配性なコウにツバサは苦笑し、話が出るんだから何とかなるよ、  
と笑って兵士達の方へと走り出した。

コウも迷いながら離れた所で見守ることに決め、後を追いかけるの  
だった。

「すいませーん、そのドラゴン退治な方々お願いがあるんですが」



「なんだ？早くドラゴンを退治して欲しいのか？　なに、すぐにお望み通り退治にいくさ」

その声は無視して、ツバサは無邪気に笑って告げる。

「いえいえ、正当な理由がなく噂だけでここに来たなら引き返してもらえませんか？

コウはもう、人を殺さないって決めてるんです。

それに、ただのドラゴンスレイヤーじゃコウは殺せません。」

ツバサは更に膝を着いて頭を下げる。

しかし、兵士達の返答は軽蔑し、怒りに満ちたものだった。

「オレ達が……、貴様のような腑抜けの言葉だけではるばる追ってきたドラゴンを見逃せと……？」

貴様のような臆病者が俺達に忠告……？許せぬ……、絶対に許せぬ。

じわじわと炙り焼いてやる。生まれたことを後悔するぐらい時間を掛けて指先からローストしてやる」

怒り心頭で火球を生み出す兵士達に対し、それでもしつこくツバサは嘆願する。

「これだけお願いしてもダメ？」

「しつこい奴だな！！構わん、殺して先を急ぐぞ！！」

「駄目か……なら、殺して止めるね？」

背筋が凍るほど冷めた声に硬直した兵士長が、最後に見たのは

不用意にツバサに近寄って投げ飛ばされた兵士の姿だった。

これはまた手にやってるなあ……俺が直々に鍛えてたって言っても化けすぎだろアレは

あ、また一人大空にダイブした。今度は投げつけて人間ボーリングとかしてる。

そういえばドラゴン殺しの武器ってドラゴンを殺す『だけ』の為に概念を特化させるから

ドラゴン以外には効かなくなるんだっけ？

あの兵士さん達は逃げ帰ってどう言い訳するんだろうな……  
っと、ツバサが戻ってきた。

「おかえり、豪快だったな」

「あ、見てたんだ？ 離れてなきゃ危ないんじゃないかなかったの？」

「お前だけほって逃げるのも後味悪いじゃないか」

「ま、無事に終わったからよしとしよ。殺してはないけど怯えて二度と来ないでしょ」

「だな。あ、武器は押し折つといてくれたか？ あれ気色悪いんだよ」

「粉微塵にしといた」

「……ほんとに強くなったな、人間やめるくらい」

「先生がいいからね」

後日、谷底には新しい怪物がいるという噂が出来たのだが、それを二人が知ることはない。

## ドラゴンだって怪我します 少女と治療と成り立ちと

更に何年たっただろうか。二人は親友であり続けた。

世界は彼等を嫌い、排除する為にあの手この手で二人を傷つけたが二人が死ぬことはなかった。

そんなある日、人間の姿のまま、降り来る矢からツバサを庇ったコウが大怪我をした。

谷にある小屋に戻ろうにもコウを背負って安全に降りれる保証はない。

大丈夫だ、とコウがツバサに笑いかけるがコウの意識はどんどんと遠のき

彼が気を失う寸前に見たのはツバサの背後に現れた見知らぬ少女だった。

「その人はどうしたの？」

「……矢に撃たれて怪我をしたんだよ。毒も塗ってみたいでっ」

「それは大変ね、手当てはしないの？」

「出来たらとづくにしてるよ！！家に戻るにもここからじゃ遠すぎるんだ……」

「そう、じゃあ私のうちに来るといいわ。応急処置と軽い食事くらいならあげる」

なんでもないことのように二人に告げて歩き去ろうとする少女。

「ちょっとまった。僕達が人じゃないってわかってる？」

「解ってるわ、それがどうかしたの？貴方のお友達が怪我をして死にかけてる。私はそれを見つけた

私にはそれだけで助けるのに十分よ」

「……礼は言わないよ」

「ええ、自己満足なもの。貴方はもう少し友達を救う為に周りを利用してもいいと思うのだけど」

「元々人間に追い回され続けたからね。信用するのが恐いんだよ」

「気にしないわ。それも当然でしょうし。せいぜい応急処置が終わるくらいまでは利用しなさいな」

これ以上言う事は無い、とさっさと歩いていってしまう。

ツバサも慌ててコウを背負って少女について行った。

村はずれの一軒家、少女（ナツというらしい）が一人で暮らすには少しばかり大きな家。

応急処置も終わり、コウをベッドに寝かし付けてようやく一息つく。なんでも、強烈な毒薬が塗ってあったらしく解毒薬の副作用でしばらくは起きないらしい。

一度乗りかかった船だからと、ナツは二人に客室を借し、しばらく滞在する事になった。

数日経つとコウも目を覚まし、ナツに礼を述べた。

ナツはさっさと治して出て行ってくれ、と言ったが耳まで赤かったから照れ隠しだったのかもしれない。

ツバサは何処かで聞いたやり取りだと、笑っていた。

「リハビリが終わるまではここでのんびりするしかないな…」

「やっぱり毒がまだ残ってるの？」

「解毒剤で問題は無いレベルまで減ってるけど多少痺れが残ってるからな。」

出るなら万全まで待った方がいい」

「そっか、了解」

更に数日後、コウの傷も全快しようやく家に帰ろうと準備をしていた時の事だ。

ナツがツバサと同じ歌を歌っていた。

コウとツバサには馴染み深く、この村には馴染みの無いはずの歌を。ツバサが教えたわけでもないらしく、聞いてみても「物心ついたときには知っていた」としか解らない。

「一体何の歌なんだろうね？」

「何かの呪歌でも無さそうだしなあ」

「村人には歌うなってよく言われるわ。綺麗な旋律だと思うのに」

「…自然と覚えてるのが忌み子だけならジャイアントはこの歌を歌える奴を探してるって事かもな」

「っ！！」

「ああ、大丈夫だよ。僕も同じだから」

「い、いつから気づいてたの……？」

「この家が一人には大きすぎるのと、この間礼を言った時に目の色が青から赤に変わった時だ」

「コウの前だと忌み子は目の色隠せないみたいでねえ」

ツバサもナツに自分の虹目を見せると、ようやく警戒を解いて座りなおした

「僕達は相手がどんな種族でも気にしないし、恩を仇で返したりしないよ」

「人間にされるだけでお腹一杯だもんなあ」

「そう、わかったわ。所で……忌み子が生まれつき知ってるって言うなら」

「なんでドラゴン族のコウも懐かしい気がしたの？」

「あ、ソレは僕もきになる」

「……ドラゴン族の生まれははなしてなかったっけか？推測も交えていいなら話すが長くなるぞ。」

「かまわない」

「何処から話すか……まずドラゴン族ってのが何かから話すが」

コウの話は深夜にまで及んだ。

この時、僕達がコウから話を聞かなければ、また違った結末があったのかもしれない。

それが世界にとって、僕達にとっていい結末かは置いておいて、なんて、そう思ったときには既に手遅れだったのだけれど。

## 襲撃 巨人と守護と戦闘

またしばらくして、二人がナツの村に遊びに来た時。村は壊滅的な状態になっていた。

突然地響きが聞こえてきたと思えば、ジャイアントが村で暴れ、この惨状を作り出したらしい。

忌み子の所為だ、と呟いた村人を叩きつつナツを探す二人。

ジャイアントが暴れ狂う中、無事を祈って駆け抜けた。

「まさかの襲撃だな」

「ドラゴンと忌み子が揃ってる僕達の方に先に来ると思ったのにな」

「潰しやすいところから回ってるのかもしれない……とにかく、急ごう」

「いざとなったら、戦うしかないね……」

「そんなことはないのが望ましいけどな。最近仲良かったみたいだし?」

「っ……コウ、今は真面目に……」

「暗くなったらたま探すよりはいいだろ……いたぞ！」

二人が見つけたのは、倒壊した家屋に足を挟まれ身動きの取れなくなったナツだった。

迫りくるジャイアントに絶望し、泣き叫ぶ姿は目を背けたくなる。

それでも全速力で向かわねば二人は全力を振り絞って駆ける。

「まに……あええええええ！」

叫ぶ二人、ジャイアントの平手が風を切り、ナツの倒れていた場所に叩きつけられた。

目の前にせまる壁のような手、振り下ろされた時に発生した風が頬を叩き、ナツはもう駄目だと目を閉じる。

ズシンと音がして、ああ自分は死んだんだ、と思った。

……まだ足が痛む、ずきりとした痛みには少女が目を開くと、愛する少年が頭上の壁を支えていた。

「なん、で……？」

「君が僕の目の前で危ない目にあってる。それだけで十分でしょ？」

「そんなことしてたら、すぐに潰されちゃうわ！早く逃げて……！」

逃げられないのに、こちらの方を心配するナツを見てツバサは苦笑した。

心配ないというように目線だけをナツの後ろにやり、壁を押し返す。

「僕はヴァンパイアとスプリガンの血が流れてる忌み子だから、こちらの人間よりも頑丈なんだ、それに」

小さく大地が揺れたと思うと、唐突に吹き飛ばされるジャイアント。代わりに現れたのは虹色の龍。二人を守るように全身でジャイアントの行く先をふさぐ。

その隙にツバサが瓦礫を退け、ナツを抱えてその場を離れた。

「僕達は一人じゃないから」

「コウ……ツバサ……」

「さ、離れてて。ここは僕らがどうにかするから」

少女を避難していた村人達の所に降ろし、コウの下へと駆け戻る。行かないでと叫ぶ愛する少女の声を背に、少しだけ目じりを熱くし



ながら。

## 敗北 死と精神と解放（前書き）

「一応今回残酷」（と思われる描写）が含まれます。  
苦手な方は下をみずにスキップで。

## 敗北 死と精神と解放

結論から言うならば、二人はかなり善戦したといえよう。

ジャイアントを相手に怯みもせず、コウが喉笛に喰らいついて息の根を止めたのだから。

はじめの一人までは。

何処から湧いたのか、何処かに隠れていたのか、一人、二人、と参戦してきたのだ。

ツバサがジャイアントの身体に登って渾身の一撃を与え、コウが出来た隙を突いて確実にダメージを与えていく。

だが、大きな差は覆しがたく、2対1の形となったコウは取り押さえられてしまう。

必死にもがいてもびくともせず、振りかぶられたジャイアントの鉈が、ギロチンのようにドラゴンの首を刎ねた。村人の悲鳴が聞こえる。

振り向いたツバサも動きを止めてしまい、ジャイアントに払い落とされる。

ツバサを叩き潰すかのようにジャイアントの平手が振り下ろされた。地面に叩き付けられた衝撃に震える腕を伸ばし、落ちていたマントを拾い上げて、小さく呟いた

「……僕は、負けない。コウと一緒になら!!」

直後、平手を叩きつけられた大地が悲鳴を上げるように振動した。

何処が上で何処が下か、そんなこともわからないところ。

これはきつと精神の世界。今度こそ僕は死んだのだろうか。

もっと、力が欲しかった……誰にも負けない力が  
コウに守られてばかりの不甲斐ない自分が、コウを守れるだけの力  
が。  
歯を食いしばって頭を振ると、何処から声が響いてくる事に気づく。

「選ばれたものよ」

選ばれた者、つまり、人に忌み子と呼ばれ疎まれた者達。

『古代の神々の持つ武具が精霊化した者』……『ドラゴン』の  
鱗と同じ色の瞳を持った者。

自分が持つべき武具ドラゴンと心を通わせた者だけがその武器ドラゴンを振るう事が  
出来る

ナツが、僕が、コウが懐かしいと言った曲は武具ドラゴンを使うための歌唱  
詠唱。

少しでも表に出始めた力が忌み子に教える、ドラゴンが武具として  
の時代を懐かしむ契約の歌。

何度も僕はコウに歌って聞かせていた。無意識のうちの契約。

コウが首を捻った僕の「人間にしては異常な怪力」は、契約が進んだことによる力の解放。  
言うなれば僕とコウは

「君は君の鍵を手に入れた。君を解放し敵を滅ぼす強大な力を授けよう」

「……滅ぼす力なんていない」

「力はいらないんだ？力が欲しかったんじゃないの？なら何を望むのさ」

「滅ぼす『だけ』の力なら最初から僕達は持っていた。

それを使わなかったのは、いつだって守る為に力を使ってきたからだ。」

だから、守りたいものも壊し、滅ぼす力なんていない。欲しいのは守る為の力だ」

「ふふっ、ツバサならそういうと思ったぜ。」

「強き力は時に己をも滅ぼす、君らはちゃんとそれを理解しているんだね」

「当たり前だろ？さあ、行こうぜツバサ。」

「いこう、やられっぱなしじゃ終われない」

「虹は見えども捕らえられぬ、無敵の守護。インビシブルガードここからが俺達の舞台だ！」

そして視界が、光に包まれた。

## コウとツバサ 罵声と逆襲と自爆

ナツは絶望していた。ジャイアントへの恐怖や、すぐにやられてしまった二人への失望からではない。

この世界で唯一心を許せた最愛の二人を失ったこと、ソレが何よりもナツを絶望させた。

ツバサが人として規格外の怪力を誇ろうとも、人間なのだ、叩き潰されては生きていけない。

「颯爽と出てきて死んだだけか」、「龍と言っても情けないな」と村人達が失望して、死んだ友に浴びせる心無い罵声に胸が痛む。

さらに「はやく忌み子をさしだして帰らせる!!!」「忌み子一人で村が助かるなら安いもんだ!!!」と騒ぎ出した。

二人の死を、ただの犬死にさせる醜い言葉。少女はそれ以上みると、聞くことを拒んで俯き、涙を隠した。私なんて生を諦めて最後ぐらい村の役に立てばいいのか？私の命が失われることがこの世界の望みなのか？隠そうとしても、次々溢れる涙は零れ落ちていく。

だから突然竜巻が起こり、二体のジャイアントを吹き飛ばす光景を見逃した。

「「寝ぼけたこと言っ てんじゃねえ!!!」」

竜巻の中心地から聞こえた声に、涙の事も忘れて顔をあげる少女が見たのは

目を虹色に輝かせ、赤いマントを羽織ったツバサの姿だった。

「っ……ツバサあ!!!」

「「ごめん、少し復活が遅れた。」」

いつものように困った笑みを浮かべてナツに話しかけるツバサ、直後、ジャイアントですら一步下がるであろうほどの殺気を村人に叩きつける。

「死龍にも口なしとは言うが大人しく聞いてれば随分な物言いじゃねーか。

自分達は立ち向かいもせずに少女を生贄にしてる臆病者が……

俺はそいつを護る為に来たんだ。そいつに手を出すならジャイアントより先に俺が食い殺してやる！！」

「コ、コウ……？」

「見ての通り、コウは元の姿に戻っちゃったみたい」

少し寂しげに微笑んでから少女を撫でる。僕達に後悔は無いからきにしないで、そう言っただけでようやく落ちてきたジャイアントを見やる。一人はぴくりとも動かない所からすると打ち所が悪かったのだろう。残った一人が冬眠中の熊すら飛び起きて逃げそうな唸り声をあげ、大地を震わせる。対抗するようにツバサの纏った雷が大気を振わせた。

「この、世界の敵めが！！」

「なんとでも言え、お前が仲間を亡くし怒るように俺達にも心はある！！」

お前は、俺（僕）が護りたいものを危険に晒した。殺す理由はそれだけで十分だ……こいつ雷龍！！」

ツバサが両手を突き出し、生み出された2体の龍はジャイアントを拘束しにかかり

しかしジャイアントの怒りに任せた一撃で叩き伏せられてしまう。その勢いのまま棍棒を振り上げ

「「ばーか、電気が叩き付けられただけで死ぬわけねえだろ」」

いつの間にか復活した、否、最初から倒されてなかった雷龍がジャイアントへ絡みつき、その巨体を軋ませる。

「それがあの方に反逆するための力か。この悪魔め……芽吹かぬうちに摘み取るつもりが、期を早めたか……だがまだ遅くは無い、根ごと刈り取ってくれる、共に地獄まで行こうぞ!!」

「「まずい!!」」

「コウ、ツバサ、どうしたの!？」

「「あいつ自爆する気だ。しかも僕達が逃げられないように一帯を巻き込んで!!」」

「「時限爆弾と地雷を混ぜたかんじか……時間がきても起爆するし、殺した瞬間にも起爆するぞ」」

「ツバサ……まさかとは思うけど死ににいたり、しないよね?」

焦っている間にもジャイアントが自爆の為に集める魔力は更に増え続けた。

この爆発範囲なら全力で行けば……

震えるナツの声に思考が中断される。

一目でコウとツバサを人間じゃないと見抜いたこの子は、やっぱり鋭いんだと思う。

コレが最期になるなら、とコウが一時的に同調を切ってくれた。

「大丈夫。僕はナツを護るから。絶対に帰ってくる」  
「約束だからね!？」

頷いてもう一度少女、ナツの頭を撫でた。

最初で最期の嘘、全力でいっても僕が逃げ切れる可能性はないだろうから。



神様は、世界は本当に僕達が嫌いなのかもね。お互いが好きだから、別れ別れにならないといけないなんて

「時間が無い、急ぐぞ。」

「俺とツバサは会わなかったほうがよかったのかもしれないな。余計な哀しみを与える手助けをした。」

「僕はコウとあったことは喜ばしいことでしかないよ。コウと会わなかったら、きっと世界を怨んだまま死んでたから」

「そういつてくれるなら嬉しいがね。俺も最期に使ってくれるのがお前でよかったぜ。」

「さあ、世界なんてただのついで」

「好きな子護って胸張って死のうぜ、『相棒』」

「もちろん、僕達は地獄まで道連れだよ、『相棒』」

「また二人で探索しような」

「何処までも共に行こうね」

精神世界でのコウとの話も終わった。

覚悟は決まった、あとは実行するだけだ。

「じゃ、いつてきます」

「……いつてらしゃい!!」

ナツが頬にキスして手を振った。

「おーおー大胆だねえ。真っ赤になっちゃって」

「コウ、からかわないでよ!!」

もう一体呼び出した雷龍に乗り、残りのコントロールを失わない位置へ飛ぶ。

あくまで魔術で形にただけだから早々距離は取れない。

コレが僕が逃げられない原因であり、僕ならジャイアントをはこべる要因。

3体の龍は空を駆け、ジャイアントの巨体を海へと運んだ。

雷龍達に指示を出し、陸から十分離れた所でジャイアントを海に向けて落下させる。

それを追うようにツバサもジャイアント目掛けて飛び降りた。

「コウ、世界は僕のこと嫌いだろうけどさ。僕はそれでも世界が大好きだったよ」

「ああ、兵士に追い回された日に上が恋しいとか言ってたときから知ってるさ」

「もつとコウと、ナツと、3人でいろんなところ行ってみたかったね」

「それは言わないお約束だ。俺と二人の地獄旅行で我慢しな」

「楽しい旅なら我慢するよ」

軽口を叩き合ってジャイアントに着地寸前、ツバサが右腕を振りかぶる。

周りを巻き込む心配が無いなら、少しでも魔力を溜めないうちに起爆させた方が海への影響が少ない。

マントから溢れ出る炎が右腕をすっぽりと包み込み

「火の粛清!!」

持てる力全てを込めて敵を砕かんと、拳を打ち下ろす。

少年と、ジャイアントと、空の一部を巻き込んで……あたり一面を爆風が飲み込んだ。

## 終章 その後と約束と……

空を巨大な爆発が飲み込んだあの日以降、少女が愛した少年の行方は依然としてわからなかった。

少女は、ただ信じて待ちつづける。必ず帰ってくると約束したのだ、まだ数年果たされてないだけのこと。

あの少年のことだから、また二人で言い合いながらどこかで旅をしているのだろう。

今日も、少年が守った村には平和な時が流れている……。

これは人に疎まれ化物に蔑まれ世界に嫌われた、人を嫌えず化物を蔑まず世界を愛した二人の物語。

世界にとってはとてもちっぽけな出来事、彼等にとっては流れ星のように駆け抜けた人生

最後に小さな幸福を望んだのは私のわがままでしょうか？

## 挿話 狂った王 忌み子と魔王とシロガネ

おつす、俺はアリア・クロス。ほとんどの奴は俺をアリアと呼ぶ、個人的にはクロスの方が好きなんだけどな

身長は高いがひょろいとよく言われる、人間の年月で言うなら20歳ほどの若造だ。

銀髪に黒、時々銀の瞳をもつ「忌み子」でもある。

そんな俺だが今、人生初の大舞台に立っていた。

それは……

「さて、昨日先代魔王を撃ち破り、本日から魔王となったアリアだ！！

今日は諸君に魔王としての提案がある！」

そう、魔王の即位式、しかも主役は俺なのだ。

マイクに向けてはなった一言で一斉に静まり返る魔物の軍勢。

即位し立てとはいえここは実力主義の魔界であり、強さこそ全て先代の魔王を撃ち破った俺には最大限の敬意が払われている。

「突然だが争うだけの魔界に飽きたから今度は平和な魔界を作ろう  
と思っている。」

魔物達が今度は一斉にこけ、皆が皆魂を抜かれたような鳩が豆鉄砲を食らって呆けてるような顔をした。

仲良いなお前等。そんなにおかしいこと言ったか？

「魔王様、魔族が争いもせず平和に暮らすなどそんな無茶な！」

「もちろん完全実力主義は変えない。必要な戦いは禁じない、それでも文句がある暴れたい奴は消し炭にしてやるから掛かって来い。」

因みに俺一人の時ならいつ来てもいいぞ。ただし、俺以外を巻き込む奴は容赦なく一族郎党皆殺しにするから覚えとけ」

皆の衆渋々といった感じで頷いて再び静まる、ように見えたのだが

「納得できるかぁ！！この場で貴様を討って魔王交代だ！！」

そう怒鳴り声を上げたのは怒り心頭で馬を駆り、自慢の刃を振りかざすデュラハンのリーダーらしき男。たしか前の魔王の腹心だったか？即位式の最中の為演説台まで信じられないほどのスピードで駆け上がってくる

早速くるとはいいい度胸だ。怒りからとはいえ魔王を討とうというのだから剣速もなかなか素早く、太刀筋も悪くない。

誰かが悲惨な未来を思い浮かべ、また誰かがふざけた魔王に鉄槌が降りたと嘲笑し、デュラハンを称えただろう。

『俺に刃が届いていれば』だが。

「シロガネ、そのくらい防がなくても自分で何とかできたんだが？」  
「アリア 守る 私の仕事。アリア 演説 続ける」

デュラハンの刃はどこから飛び出してきた銀髪のショートカットの娘に受け止められていた。

デュラハンに表情なんてもんはないが明らかに動揺している。

彼女は幼馴染兼俺のパートナーのシロガネ、こいつがいなかったら俺が魔王になるなんてのは夢のまた夢だっただろう。

小柄なことと人形を彷彿とさせる整った見た目の所為で舐められがちだがタイマン戦なら俺とタメをはれる影の実力者だ。こいつは権力とか魔界に興味がないから俺に協力してくれているが、もしこいつが戦闘狂だったらと考えるとぞっとする。

……と、そろそろ放置していたデュラハンを片付けるか。

「こいつは俺の腹心だから例外だ。一族皆殺しは勘弁してやる。ただし」

お前に二度目はない」

少しだけ魔力を開放し狙いを定めた。

溢れ出た魔力の濃さに魔物達が息を飲むがそれら一切を意識の外に追いやる。

魔力を練り上げ、術式に変換し、ただ一言発動の命令を下す。

「鳴り響け、神の笛」

金属を引っかくような、耳を劈く轟音がデュラハンを襲う。

轟音<sup>ゴウオン</sup>ごときがこの鎧野郎を倒せるわけない？ ああ、ただの轟音<sup>ゴウオン</sup>だったらな。

「このような、音程度ではわしは倒せんぞつ、魔王アリアあああああ！！」

「お前 頭 悪いな。音 ただの副次効果」

「お、おい、デュラハン様の鎧が砕けていつてるぞ！？」

「いやー俺調節が下手でな？ 振動でお前を砕くはずだったんだが！」

「空気<sup>イオ</sup>まで揺らしちまったみたいだ。まあ修正<sup>アデ</sup>するから、永遠にさよならだ」

指をぱちんとならすと同時、塵も残さずにデュラハンが消滅する。

誰も酷いとか残酷だとは言わない。強さこそ全て、それが今の魔界である。

最近でこそ人間界から招いた客人たちの手によって、少しずつ平和は作られているが未だほぼ無法地帯といっていい。RPGで魔物に襲われる村を想像してもらうと早いだろっか？

人間界ではジャイアントが猛威を振るっているが、それ以外の魔物（争いが嫌で人間界に移ったもの達）はひっそりと暮らしている。そういえばジャイアントが討伐されたという噂を聞いたがほんとだろうか、退治した奴には感謝せねば。などと考えていると唐突に袖を引かれた

「アリア 皆 続き待ってる」

「あ、わりい。とりあえず言いたい事は他にない、死ぬ覚悟がある奴だけかかって来な？」

こうして、無事ではないが怪我もなく魔王の即位式は終了した。



## 二人旅始めました 生存とチートとドラゴン

強い光を感じて眼をあけると俺は浜辺に打ち上げられていた。

「知らない天井だー……天井じゃねえけど。」

よく分からない所で目が覚めたら一度は言ってみるもんだ。とふざけてないで、ツバサを捜さないと

お互いに人じゃないとはいえ、いつまでも塩水に浸かっているのは身体に悪い。

幸いにもツバサは少し離れたところに打ち上げられていた。

息はある……外傷も特に……ない。軽く揺るとすぐに目を覚ました。

「知らない天井だ……って地獄にも青空があるんだね」

「まだいきてるつつの」

「じゃあ生き地獄か」

「地獄で確定するな!？」

まだボーっとしてるツバサにでこピン。

「あいたつつてならなんでコウは人間の姿のさ」

「ああ、別にドラゴン状態で殺されても核が壊れな<sup>マント</sup>きや復活するんだよ」

「……一瞬でも焦った僕の立場は？」

「はっはっは気にするな。しかしあの爆発でも壊れ<sup>しな</sup>なかったとは改めて人間やめてるな俺達」

「コウは元々無機物じゃない。僕は何も出来なかったからコウがなにかしたんじゃないの？」

「そんな能力持ってたっけなあ？」

ポケットから薄っぺらい本を取り出してページを捲る。  
表紙には「取扱説明書」と古めかしい字で書かれていた

「ちよつとまでコウーーーーー！！そんなのがあるなら最初から出しとけっ！？」

「唐突に叫んでどうしたツバサ、俺達だドラゴンって結局は道具なんだ。使い方が分からないと意味無いだろう？」

「それはそうだけど……まあいいや、で何かそれらしいものはあったの？」

「コレかな、プルーフ系列の魔法でヒート、ウインドのプルーフ  
「ぶるーふ？系列？」

ツバサが小首を傾げて悩みだしたので追加で説明を加える。

「『龍の涙、天使の涙、空の涙』っていうのが回復、の涙ってところから涙系列とか言われてるんだ。

そういう攻撃、回復、特殊を細かく分けてから同じ様な魔法を纏めたものを系列っていつてる。

で、プルーフは特殊で『味方に与えられる』属性の攻撃を一回防ぐ』って魔法。

だから、ヒートとウインドのプルーフで爆風を防いでたんじゃないか、と俺は思うのだよワ ソン君。」

「誰がワト ン君！？確かに竜巻の魔法と、とどめの時の火の魔法は使えたからあってもおかしくは無いけど…チート性能過ぎない？」

「ジャイアントって生物自体、人間にとってはチートだろ。それに俺様神様の武器だからちよつとくらいチートしても許されるって」

「なんだろう、何年も一緒にいて初めてコウが嫌な奴に見えたよ」

てへって感じに笑いかけてみた。ツバサが絶対零度の視線を向けてきたから咳払いして仕切り直す。

「まあ実際生半可な頑丈さじゃ神様同士の戦いでは役立たずだからな。多分他のドラゴンも天災級のチートがついてるはずだぜ？」

俺はコレでも防御主体のチートだからな」

「そりゃこんなのがごろごろしてたら封印もされるよね……。」

「まあ、それはおいといて。ちよつとばかしやばいかもしれんぞ？」

さつきからコウの頭のネジが外れててヤバいんじゃないか、と思っただが口にしないツバサだった。

頭を振って気を取り直し、何がまずいのか尋ねる。

「ここ、魔界っぽい」

「……………はあ？」

「はあ、じゃなくて、魔界だって」

「何をどうしたら人間界から魔界になてくるのさ、入り口なんて限られた所にしかないはずじゃない」

「多分アイツの自爆の影響だろうなあ。俺がプルーフで変に曲げちゃったから異界との壁を砕いて魔界に落ちちゃったみたいだな」

さつきから懐かしい匂いがする。ずっと前に魔界に行くって言うていなくなった仲間<sup>ドラゴン</sup>の匂い。

あいつが早々人間界に帰ってくるわけないから俺達が爆発の所為で魔界に落ちたと考えた方が自然だ。

「……………案外そこら辺にいたりしてな。」

「う」名答じゃ、コウ」

## 旅の準備は大事です 魔界と情報と祭馬鹿

「こ名答じゃ、コウ」

がさりと近くの茂みから姿を現したのは黒目、黒髪、黒い着物の女。纏う空気に敵意は無いが……なんというか眠そうな眼と地面に引きずりそうな長髪が印象的だ

「うわっ、びつくりしたあ！コウの知り合い？……もしかして知り合いがいたからテンション上がった？」

「ああ、安心していい。久しぶりだな、クロガネ」

「ほんに久しいな。こんな魔界の辺境まで来るとは、わしに告白でもしにきたのかえ？」

「それでもいいが、俺達は人間界に帰るから今は無理だ」

軽く手を振ってツバサを見やる。クロガネも視線を移したのを確認してツバサを紹介する

「俺の今の使い手、親友のツバサだ。」

「よ、よろしく願います、お姉さんは……」

「わしはクロガネじゃ、その赤いのと同族……といえは解るかの？」

「つまり、黒龍？」

「そうじゃ、そして近接戦闘に特化したちーと武具でもある！」

拳をぐつと握って自信満々にいうのとケラケラと笑うのがコウによく似てた、とはツバサの感想である。

「さ、いつまでも濡れネズミのままでもいい仕方あるまい？」

手招きして歩き出すクロガネ。多分すぐそこにある小屋が彼女の今の住居なのだろう。

「だな、風呂貸してくれ。ついでに服。」

「コウ、図々し過ぎ」

「ツバサ、きにしないでない。わしとコウはそういう仲じゃ」

クロガネが微笑んで二人の手を取るとコウが笑って続ける。

「お互いの家にお互いの服がある不思議」

「そもそもドラゴン是人になる時、服も魔法で作るからいらなはずじゃ……」

「「食わなくても死なないからって飯を食わない悪魔はいないぞ」」

「嗜好品は嗜好品ってことね。僕は悪魔見たこと無いから喻えた方が解りにくいよ」

こうして、魔界の旅一日目は魔界の情報収集と旧友との思い出話に費やされていた。

#### ・獲得した情報

- 1、前の魔王が人間達を客人として招待し、人間の村々が点在している事。
- 2、魔物による被害があつた時は魔王が軍を派遣する事。
- 3、魔王の軍が来るにはタイムロスがある為、人間達の間でギルドが作られている事。
- 4、魔王が最近代替わりした事。（前の魔王以上に平和主義との噂）
- 5、現魔王は忌み子である。

「こいつは、面白いことが起きるかもな？」

「コウってお祭好きだよね……」

「魔王相手に腕試しも悪くないと思うがのう？」

「アンタも同類かあああああああああ！！！」

## ギルド登録

## カードとランクとクエスト

旧友との話で盛り上がった夜も明けて次の日の朝。

「早速じゃがコウ、ツバサ。お主等には身分証明の為にギルドに入ってもらふ必要がある。」

「入らないと魔物に間違われそうだしな。俺は構わない」

「……人間は老若男女全員ギルドに入ってるの？」

「戦える者だけじゃの。但し元より魔界における客人たちは皆顔見知りの者ばかりじゃから問題ないんじやろう」

「外から来た得体の知れない俺達はギルドに登録して怪しいものじゃないですよーって装うわけだ」

「ギルドの仕事は人間界と同じと思っていいよね？」

「そうじゃ、但し上に出て行った争いの嫌いな悪戯つこともと同じように考えておるなら痛い目を見るぞ。ジャイアントレベルがうじやうじやおるから心してかかるがよい」

「俺とクロガネがいる時点でその心配はほとんど無いと思うんだが」

コウが苦笑しながら言った言葉に硬直するツバサ。ドラゴン二人が疑問に思って軽く肩を揺するとギ、ギ、ギという音がしそうなほどゆゆっくりとクロガネの方へ向むき

「どうした、ツバサ？」

「窓の外に何かおおったかえ？」

「クロガネもついてくるの？ パートナーいないのに大丈夫？」

「いや、いるじゃん。……俺と、お前が」

「……え？」

「いったじゃろ？ わしは近接攻撃に特化した武器ウェポンじゃと。防御に特化したコウと組んで使うのが普通なのじゃ」

「いやいやいや、忌み子の瞳とドラゴンの鱗の色が揃った武具しか使えないんでしょ?!」

クロガネとコウが二人揃って首を傾げ、「そんなルールあったっけ?」ってそこまでハモるな。

再びコウが取扱説明書を取り出してページをまくる。

「あーこれだな。ドラゴンと心を通わせた者だけが使い手になるんだが」

「お互いが気に入って心を通わせやすいのが同じ色をした者らしいのじゃな。まあわしと主なら大丈夫じゃろう、昨日の夜だけでもわかる。コウでさえすぐに打ち解けたんじゃないかな」

「普通は気が合わないから使えないだけで明確に一人一個ってルールは無いわけね……」

このまま行ったら僕は何処までチートと化すんだろう。  
切実にそう思ったツバサであつた

最寄の村、ギルド登録所にて

「まずこちらの書類に必要事項をお書き下さい。」

……はい、まず、名前はコウ様、ツバサ様、クロガネ様で?」

「はい」

「コウ様が性別は男性、年齢は20、出身は人間界、住所は無し  
ツバサ様が性別は男性、年齢は17、出身は人間界、住所は無し  
クロガネ様が性別は女性、年齢は19、出身は人間界、住所は黒月  
海岸の小屋、で間違いはないでしょうか」

「はい」



「はい、……分かりました。登録完了です」

職員の手元にあった機器から、シュツと音を立てて板のような者が出てくる。

「では、こちらのカードがギルドカードとなります」

受付嬢が3人に薄い金属性のカードを渡してきた。

「ギルドカードですが、発行は無料です。まああまりにもよく無くと材料を取りにいらつてもらうことになりますので注意してくださいね？」

では当ギルドの説明をいたします。当ギルドは傭兵ギルドです。ランクはSSからFまでの八段階、登録したては実力に関係なく一番最初のFランクになります」

ギルドカードに大きくアルファベットでFと描いてあった。なるほど、解りやすい。

このパーティなら割りと早くランクアップしそうな気もするが、今はこんなもんだろう。

「ランクアップはクエストを受け、ギルドポイントを一定以上まで貯めていただければあがります。」

逆にクエストを失敗するとポイントが減り、ランクが下がることもあります。

クエストの受注については、あちらの掲示板にランクごとに分けて張り出されているので、それをご覧になった後、ここの受付にて受注の旨を伝えてください」

「受けられるクエストの制限は？」

「ありません、昔はご自分のランクより一つ上のランクまでの制限

でしたが最近では手が足りないので制限がなくなりました。

ランク分けして張り出されているのはその方が仕事を選びやすいから、というだけです。

クエスト終了後は、このカウンターに申し出て頂ければカードにギルドポイントの追加と報酬をお支払い致します。討伐クエストに関しては、モンスターや悪魔を倒すとその旨が自動でカードに記されますので、カウンターでカードを提示していただければ大丈夫です」「意外と便利なんだねこのカード……」

「最後ですが、ギルドカードはご自分の身分証明書になります。国や都市、町などで住居を購入したり、身分証明書の提示を求められたときはギルドカードを提示することができます。魔界では強さこそ全て、とも言われますのでランクが高いに越した事は無いと付け加えておきますね」

「了解、それじゃ早速……」

「コレなんかどうじやろう?」

コウが掲示板に向かおうとすると、既にクロガネが一枚の紙切れを持って戻ってくるところだった。眠そうな眼をしてるのに活発な人だ。

持ってきたクエストの内容をみた受付嬢が固まった。

「な、ななな、いくらなんでも初クエストでコレは止めておいた方が……死んでも骨は拾えませんか?」

「一体何もつてきたんだよクロガネ」

「どれどれ、えーと……」

呆然としてる受付嬢の手からクエストの紙を抜き取ったツバサが読み上げる。

ランクSS

報償：200000G

詳細：最近魔界の村々を騒がしている盗賊団の壊滅。生きたまま捕獲した盗賊団員一人につき5000G。

この依頼は盗賊団の全滅、捕獲とその他の全滅、全員の捕獲のみを成功とする。

「……ただの盗賊ならSSなわけないよね」

「現魔王も手を焼く程の盗賊らしいのじゃ、最近暴れたりんからこのくらいは行きたいのじゃが」

「現魔王の基準がわからん。とりあえず今わかつてるこの盗賊の特徴は？」

「人と魔物が手を組んだ盗賊団だと言われてます。詳しい内訳はわかりませんが彼等が荒らした後には何一つ残されないとか

裏の商人等との繋がりもあつて若い娘や人間のパーツを……。大抵S以上のギルドメンバーがいる村はほとんど襲わないようです。」

「……裏の商人と繋がりがあるのか、クロガネ、ツバサ。このクエスト受けるぞ」

「はいはい、嫌って言うても聞いてくれないんでしょう？」

「わしが持つてきたんじゃからわしは文句無いぞ」

最後にもう一度だけやめる気は無いか、と受付嬢が念を押したがコウにやめる気は微塵もなかった。

ただ、さっきから全力で威圧感を放ってるからそろそろ止めさせないと受付嬢が倒れそうだ

「コウ、行くよ。皆怯えちゃってる」

「あ、ああ、すまん」

「それじゃ、報酬をちゃんと用意しとくのじゃぞー？」

初クエスト：盗賊団の壊滅受注

**盗賊討伐（前編） 惨状と命令と偽善（前書き）**

討伐編では残酷な表現がありますので苦手な方は飛ばすことをおすすめします。

盗賊討伐（前編） 惨状と命令と偽善

懐かしい匂いがする

突き刺される男の匂い

斬り倒される女の匂い

焼き殺される赤児の匂い

撃ち殺される老人の匂い

全部纏めた……死の匂い

「こいつはひでえ……」

「流石にこのレベルは久々にみたねえ」

「むしろお主等が見たことあるのにびつくりじゃの」

木製の家々が半壊し火を噴き、街道には絵の具をぶちまけたように人の血液がしぶいている。

粘性の高い燃料を家々に振りまき、込められた魔力が尽きぬ限り消えない火炎の魔法。

無残に焼けていく村。その中には村人の死体が焼ける臭いも交ざる。悲鳴すら上げられず魔物にさらわれる者。

魔物に喰われたのか、売られる為なのか。身体のパーツを奪われた男性の死体。

逃げる者は遊びの的に魔法で刻まれ、中身を引きずり出され、臓物がまだどくどくと息づいたまま魔物に貪り喰われていた。

傭兵らしき集団の死体は集められ、壁に立てかけられている。首から上を失った身体が家屋を舐める火に炙られ、異臭を放っていた。

「僕の生まれた村がこうなったからね。忌み子一人を殺すのに村一つ滅ぼしても構わなかったんだ」

「俺達は戦で使われるんだからこのくらいは慣れっこだしな」

物音が聞こえ、3人別方向に散って隠れる。そつと音源を覗き込んだ。

「いや、いやいや、いやああああああああああ」

男が少女を組み伏せていた。か弱い抵抗に男は薄ら笑い、少女の服を剥ごうと手を伸ばし

「流石に同じ女としては見逃せんのう」

鈍い音を響かせ、いつの間にか飛び出していたクロガネに蹴り上げられた。

男は綺麗に放物線を描き大地に打ち付けられる。

「大丈夫かえ？」

ジーンズについた埃を払い、クロガネは優しく少女に手を伸ばす。だが少女は錯乱したようにその手を払いのけた。

「こ、来ないで！！こっちに来ないで、いや、いやああ！！」

「……コウ。すまんがこの娘を頼むのじゃ」

「あいよ」

そつと近寄ったコウが少女を気絶させて抱えあげ自分達が乗ってき  
た馬車に積み込む。

そこでようやく盗賊団の男が立ち上がり、一番無防備に見えるツバ  
サを捕まえようと襲い掛かった。

「てめえら……俺達を誰だと思つてやがる。魔王ですら恐れ戦く盗  
賊団だと知つての」

「……黙れ、お前こそ僕達を誰だと思つてる」

ズドン、と音がした。ツバサが無造作に男の頭を掴み、叩きつけた  
結果だ。

男の頭が半ば以上地面にめり込んでいる。

ツバサは見掛けよりもずっと力がある。単純なパワーだけなら3人  
の内では一番といえる程に。

そして、普段なら人間相手には容赦する彼も、そんな余裕が無いほ  
どに憤っていた。

たしかにこんな光景には慣れている。だが、動揺しないだけであつ  
て何も感じない訳ではないのだ。

「……運の悪い奴だな、怒ったツバサを人質にとろうなんて」

「コウ、クロガネ。……お願いしてもいいかな？そんなに乗り気じ  
やなかったけど、僕もこいつ等を潰す事に決めたよ。手を貸して」

「命令はもつとシンプルに行こうぜ、『マスター』」

「わしらは主の道具じゃ。望みを言え、我らが叶えよう」

「不倶戴天だ。これ以上あの盗賊団に僕達と同じ空を見させるな！  
」

二人の返事は、目に付いた盗賊団員への突進で代えられた。  
ここから、3人の盗賊団殲滅が始まる。

赤い道を駆け抜け、コウとクロガネが気配を頼りに生存者と盗賊団を探す。

下卑た笑いでクロガネに寄ってくる男がいた。

汚され生気を失った眼で狂ったように叫ぶ少女がいた。

死にたくないと言塗れの体を引きずって逃げようとする者がいた。

助けられる者は助けて馬車に乗せていく。盗賊団は虫の息でも縛り上げて別の馬車に投げ込む。

時折魔物に食い散らかされた人のパーツを踏みつけるが意にも解さずスピードを上げた。

助けられなかった者はいくら嘆いても戻ってくることは無いのだ、ならば今は助けられる者を助ける為に行動するのみ。

「とんだ偽善者だね、僕は」

「元々助ける義理がねえんだから気にすんな。俺達の仕事は本来盗賊を片付ける事だけだ」

「どうせ偽善だからと見殺しにする主等ではあるまい。一人でも多く助けて自己満足すればよいのじゃ！」

そして、3人の疾走と共に村の魔物と盗賊はあらかた片付いた。

「頭つぱいのがいなかったな」

「アジトに残ってるのか先に引き上げたのか……くそっ！」

「簡単な事、娘や盗品を乗せた馬車がまだ近くにおるじゃろ。それを追えばいいのじゃ」

「クロガネ、ツバサを頼む。俺はここに残って生存者のお守でもするわ」

「主は守り主体じゃからの、任せよ」



「急ごう、追いつけなくなったら大変だ！」

休む間もなく駆け出したツバサに慌ててクロガネがついて行く。  
コウは二人を見送って生存者を乗せた馬車の護衛に戻った。

## 盗賊討伐（中編） 潜入とボスと風水盤

若い娘を乗せた馬車、それを尾行する二人は少し離れた物陰から様子を伺っていた。

ただの雇われなのだろう、御者は警戒することなく馬車を操っている。

襲撃されるなど微塵にも思っていないのだろうか。もしくは、されても雇い主（盗賊団）がなんとかしてくれる、か。

ならば既に後続の盗賊団が殲滅されている事は夢にも思っていない。

休憩というように馬車がとまり、御者が降りてきた所をクロガネが取り押える。

逃げ出そうと必死に暴れる御者を見てツバサがめんどくさそうに近寄り御者の耳元に囁きかけた。

「抵抗すれば殺す。質問に黙秘しても殺す。……OK？」

「……ッッ！！」

御者は恐怖からか取り押さえられたまま、自分は悪くないただ雇われただけだと繰り返す、だからこんな仕事いやだったんだと喚きだす。

「………そう」

微笑んだまま軽く足を上げて御者の頭に狙いをつけるツバサ。

「ツバサ、よすのじゃー！！」

耳に掠るように足をおろしたただけに見えた。動作は軽く、そこまで力を込めてるようには見えなかったのに 地面が陥没した。

喚いていた御者も、クロガネも真っ青になってツバサを見上げる。

「もう一回言うよ？抵抗すれば殺す。質問に黙秘しても殺す。無駄口叩いても殺す。……OK？」

もう一回といいながら増えているのはご愛嬌。御者はただ震えて頷くだけだった

御者は何度も雇われていたらしくアジトの裏口からボスの部屋までの道は詳細に覚えていた。

何度もツバサが脅しをかけ、「嘘だったら帰ってきたときに紅葉おろし」の呟きに必死で嘘を訂正していたから信憑性は高いだろう。

御者は縛って荷台に放り込んでおいた。荷台にいた娘に村に向かうよう言い聞かせたから心配も無いだろう。

裏口から侵入し最短距離でボスの部屋を目指す、盗賊団の気配がほとんどと言って良いほど無い。

「やけに警備が薄いのか？簡単にアジトを空にするような愚はおかさんと思うのじゃが」

「結構な数あの村で倒したとはいえ現魔王を梃子搦らせるような数じゃなかったしね」

「……嫌な予感がするのう。ツバサ、今のうちに契約じゃ。必要ないというのは油断じゃぞ」

「わかった。……これでまた僕は人間から離れていくんだね」

「諦めよ。力を得るには人間をやめるのが一番速いのじゃ。」

それに先の脅しでも有効活用しておったのに今更じゃろ」

がつくりと肩を落としてツバサが歌い始める。あくまで盗賊達には

れないように小さな声で、だが。

クロガネは「久方ぶりじゃのう……」とうつとりと聞き、ツバサはまた自分の怪力が増した事に気づく。

コウの説明によると「俺の契約は持っていた力を解放しただけ、クロガネの契約はクロガネの力が追加される形になる」らしい。

怪力に無敵防御に近接格闘術、つくづく人間止めていく自分に溜息を隠せないツバサであった。

「ツバサ!!」

クロガネがツバサを引いて後ろに飛んだ次の瞬間、熱線が天井を撃ち破り、数秒前まで二人が立っていた場所を突き抜けた。

絨毯や木材が焦げる匂い。あまりの高温で燃えるより先に溶けている。

こんなものを使える魔術師なんて下っ端じゃない……。『コウですら防げるかわからない』熱線なんて　ボス以外にありえない

「いやはや、まさか今のを避けるとは思わなかったよ」

「お前が…盗賊団の、ボス……!?!」

手を打ち鳴らしながら現れたのはシンプルな服装の男。

雰囲気だけを見るなら人畜無害そうな優男だが、二人が注目したのはその瞳と右腕。

男の瞳は黒から緑に変色した。

右腕には異様な気配を放つ風水盤。

「始めまして、お察しの通り当盗賊団のボスを勤めております、カルトとお呼びください」

「カルト、お前忌み子だな、しかもパートナー付き」

「風水盤なら、リヨクじゃな?お主何故こんな輩に手をかしてある」

『リヨク、手を貸さないと、お姉ちゃん、見つからない』

「シロガネを探す代わりに手を貸しておると？そんな事くらいで心が通っておると？馬鹿にするのも程々にせい！！」

「私が無理矢理使っているとしても？失礼な方ですねえ」

『邪魔するなら、クロガネでも許さない』

「クロガネ！話はカルトを倒してからだ！！」

距離をとろうとした途端、風水盤が輝き……辺りを爆風が包んだ。

胸騒ぎが止まらなかった。ツバサがおいできて大丈夫だったか、なんて不安にならないようにお守りをかけてたがとても嫌な予感がしていてもたってもいられない。

こうなれば結界でも作って俺も追いかけようか、アジトの場所ならわからなくてもツバサの場所ならわかるし、ああでも勝手にいったらクロガネも怒るだろうなあ。

とコウが悩みながら結界を作っていると村の入り口に馬車がやってきた。

新手の盗賊か、と始めは警戒したが乗っていたのは攫われた娘ばかり。ついでのようにがたがた震えた男が一人……御者をやってた男らしい。

この男、目を覚ました直後にコウに脅されて再びアジトの詳細を話すことになるのだが、なんとも厄日である。

「シロガネんとこの馬鹿弟がいるのか……」

俺の意志に関係なく行かないとやばいな。近接打撃特化と範囲爆撃魔法特化では相性が悪すぎる。

アジトの方角を見ると、一筋の閃光が夜の闇を切り裂いていた。

## 盗賊討伐（後編） 失敗と援軍と制裁

「つぐ……なんて威力」

「範囲爆撃魔法特化は伊達じゃないのう、コウを生存者の守りにつけたのは失敗じゃったか」

がむしやらに避ける事だけを考えて飛んだ二人は、それでも余波の熱に焼かれ苦悶する。

リヨクから放たれた破壊光線はアジトの上部を半壊させ、一直線に貫かれた天井から夜空の星が見えていた。

「威勢がよかったのはちよつと小突かれるまでですか？なら、とつとと退場してもらいますよ」

『お姉ちゃん、もうすぐ、会える……』

再びカルトが風水盤に魔力を込める。すると中心にはめ込まれた水晶が光を放ち、周囲の魔力が徐々にカルトの周囲を渦巻くように流れ始めた。

込められた少量の魔力で周囲の流れを変化させ、広範囲の魔法を放つ。それがリヨクの『魔法の範囲と威力を強化する』チート能力。次の魔法が放たれる前にケリをつけようとクロガネが殴りかかるが

「残念、私は防御魔法が得意でね。表立って危険に晒されるのは部下だけで十分ですよ」

「っ、シヨックプルーフじゃと」

「ええ、正解です。賞品はおかわりといきましょうか」

『レイ・ブレイド』

物理攻撃を全てシャットアウトするプルーフ、その障壁にクロガネ

の拳は阻まれる。

歯噛みして距離をとろうとした途端、再び風水盤から巻き起こった閃光がクロガネを襲った。

閃光が通り抜けた後にクロガネの姿はなく少し大きめの籠手だけが残された。

「クロガネ!!」

「おやおや、ドラゴンといえど至近距離からの熱波を受けては死んでしまいますか。武具に戻ってしまわれたようで」

『カルト、約束は守る』

「ええええ、解ってますよ。お姉さんの行方を探すんですよね。ですが、まだもう一人残ってます」

『ツバサ、だっけ？逃げるなら、今のうち。カルト、深追いしないから』

「……あの光景を見て、元凶を前にして、それでも僕に帰れと？」

『蛮勇は、賢くない。時には退くことも、勇気。武具の無い一忌み子（君）、武具持った忌み子に勝てるわけない』

「君の心遣いは嬉しいけど……それ以上言つと砕くぞ、板切れ」

『そう、残念。カルト』

「また来世にでも会いましょう、今度は商品として、ね」

視界が滲む、またあの時みたいな事が起きた。人間やめるような怪力があつたって、魔法には無力だ。

カルトが風水盤に魔力を注ぐ。圧倒的優位に立った者が見せる嫌らしい笑みを浮かべていた。

だからクロガネが、自分だけ狙うように仕向けて僕を逃がそうとしたんだ。

先ほどの一撃がこの部屋の魔力全ての流れを変えたとすれば、この一撃はフロア全ての魔力の流れを操っている。

力があつたのに、力だけしかなかったから、また僕は守られた。

カルトが周囲に、自分が巻き込まれないよう障壁が形成する。

核になる武具が壊されない限り死なないからって、痛みも恐れずクロガネは僕を守った。

カルトがニヤリと笑って風水盤が淡い光を纏う。

クロガネの気持ちが無駄にすることになっても、ここで一人だけ逃げ出したら僕は僕でいられなくなる。

立ち上がり、籠手に向けて駆け出す。カルトが嘲笑うように風水盤を構え炎の津波を生み出した。

「さ よ う な ら」『フレイムウォール』

ツバサがクロガネだった籠手を拾い上げ、逃げ出そうと顔をあげた瞬間には、そこに炎の壁があった。

避けきれない、喻えコレで死なずとも次が来るまでに動けるようになるかも分からない。万事、休すか。

悔しさに顔を伏せると共にフロア全てを赤津波が襲った。

「下っ端が片付けられたと聞いて警戒していたんですがねえ？」

『ツバサ、虹目。クロガネ、黒龍。多分まだ、パートナーいる』

「じゃああの二人を捕まえておけばドラゴンが自分から飛び込んでくると」

カルトが笑って障壁を解く。プルーフは障壁としては有能だが防いでいる間は光を放ち周囲が見えなくなるのが欠点だ。

先ほどツバサのいた方に目をやると煙にまぎれてよく見えないが人影があった。

「立ったまま焼け死にましたか。立ち往生とは面白い」



『カルト、伏せて！』  
「！！！」

リヨクの叫びに瞬時に従うカルト、しゃがむ時に鋼鉄の剣が頭上を通り抜けて肝を冷やす。

一陣の風が煙を吹き払い、投擲者の姿を露にした。

赤いマントを羽織り、足元まである赤い髪を揺らす20歳ぐらいの男。

『……ドラゴン』

「久しぶりだなリヨク。覚えてるか？で？てめーが親玉か、案外みっちり攻撃だな、おい」

「み、みみちい、ですと？！」

「ドラゴンに戻る必要も無かったし、息吹すら使っていないのに防げる攻撃なんてみみちいだろ？」

「ええいさつきから失礼な。貴様、名乗りなさい！」

「貴様らに名乗る名など無い！！……って言いたいところなんだが、そこの馬鹿に思い出してもらおう為だ」

男はニヤリと笑ってマントに変化し、背後にいたガントレットを嵌めた少年に羽織られる。

「虹の龍、コウだ」

火に焼かれて死ぬと思った。でも、いつまで待っても伝わってくるのは暖かい程度の熱。恐る恐る目を開けたら、コウが目の前にいた。片手を前に差し出し、赤い障壁が二人を包むように展開されている。

「間に合ったな。クロガネはまだ壊されてないな？」

「コ、コウ……！！大丈夫、ガントレットに戻っただけ」

「よし、じゃあこの赤津波が終わるまでにそのガントレットつけとけ。クロガネも結構心配性だから契約すんでんだろ？」

「え、あ、うん」

言われたとおりにガントレットを装着すると使い方、能力が直接頭に流れ込んでくる。

「……なにこのチート」

「いつものことだ。ある意味最強の矛と盾とでもいうべきかね。俺とクロガネは」

「アイツとは相性が悪いよ。……今度はこっちが有利だけどね」

そして、コウが開いた手でマントから剣を取り出し、赤津波が止まった所で先ほどのシーンに繋がる。

「防御重視のドラゴンですか、ちょっと焦りましたがソレがわかれば焦る事はありませんね」

『確かに俺だけなら勝てないだろう。お前の攻撃なんてなんともないが、逆に俺からの決定打も無い。』

クロガネだけでも同じだ。決定打はあるが、お前の攻撃を防ぐ術が無い。

だから、俺達三人ならお前を倒せるんだよ

「そう都合よくかみ合うとも思ってるんですか？デュアル多重契約は忌み子の負担が大きすぎて使えないから『一人につき一個』の暗黙のルールがあるというのに」

「ただの人間、ならね。僕は魔物の血が混じってるから、そこらの

人間よりも頑丈なんだよ」

唐突にカルトに向けて突進する、馬鹿の一つ覚えだといったげにカルトは嘲笑し障壁を作った。

勢いを殺さずに障壁へ蹴りかかるも障壁を撃ち破れずに跳ね返される。

「さて、お尋ねしますがまさか今のが決定打なんて笑わせることはないですよねえ？」

『ふん、よく見ておるがよいわ。行くのじゃ、コウ、ツバサ』

「『言われずとも！！』」

クロガネもようやく気がついたようだ。ガントレットに先ほど以上の力が宿ったのがわかる。

「遊んでるならさっさと帰宅してください、コレでも忙しい身でね」

『お姉ちゃん探す、忙しい。レイ・ブレイド』

風水盤が光を放つ。馬鹿の一つ覚えはお互い様、光った直後に広範囲魔法が飛んでくるんだからわかりやすい。普通の人間なら防ぐ術は無いので気にする事は無いが、防御特化のコウがいる以上それは自分からタイミングを教えているという致命的なものだった。リョクの閃光が放たれる時には既にコウの準備は万端だった。

『防いで消すだけが盾の仕事じゃないんでな、『反射の盾』』

コウの声が響きツバサの周囲に円錐型の障壁が現れる。閃光が直撃し障壁を揺らす、閃光は魔力を吸収されていき障壁を砕く未来をまったく想像させない。寧ろ……、

ツバサは障壁で閃光へ切るように満身の力を込めて目の前の壁を押す、動いた。ならばと、更に押し出しカルトとの距離を詰めていった。

閃光の中をズンズンと突き進んでくるツバサを見て慌てたのはカルトだ。慌てて魔力の放出を止め、ツバサの攻撃に備えて障壁を作る。

「そんなちやちな盾で大丈夫？ コウの盾は……吸収した魔法を撃ち返すんだよ」

ツバサの障壁が炸裂し噴出した光の奔流がカルトを捉えた。だがカルトも障壁を何重にも張って光を弾く。

「私が出した魔法で私が倒れるわけないでしょう。こんな子供だまして私を倒そうなどと……！！」

光の奔流が止み、真正面に立つ人影に魔法を放とうと風水盤に手をかざす。そこにいたのは赤い青年だけだった。

小僧の方は何処に行った、カルトが周囲を見渡しても影すら見つからない。

天井がミシリと音を立てる。

『カルト、上！』

今度の指示は間に合わなかった。一歩ずればよかったものを先ほどの光の奔流のように魔法が来ると警戒して、障壁を張りなおしてしまった。

カルトの視界が光で潰されている間にツバサはコウをフェイクに残し天井に着地。

更に天井を蹴って加速したツバサの拳が、ガントレットが障壁をすり抜けてカルトを殴り飛ばす。

「『残念じゃったの、わしは障壁キャンセルが得意でな。後ろでコソコソしておる馬鹿を殴るのが好きなんじゃ。…黒の鉄拳制裁、無敵ビシブルストライクの一撃忘れるでないぞ』」

ツバサが、いや、ツバサの体を通してクロガネがカルトに先ほどの言葉を返す。さっき負けたのがよほど悔しかったらしい。

「惜しかったね、コウが来るタイミングがもう少し遅かったら僕達の負けだったよ」

「ま、間に合ったんだからいいじゃねーか。はあ、とりあえずコイツは没収させてもらうぜ」

いつの間に奪ったのかコウが風水盤をヒラヒラと振っていた。

「な、き、貴様、返しなさい！！」

「あ、おい！今ツバサから目を離したら……」

「よそ見るなんて良い度胸だね、齒あ食いしばれ！！」

拳が風を斬る音と共にカルトの体が再び宙を舞った。

「殴られるぞって遅かったか。ツバサは私刑の時は容赦ないからな  
　　南無南無アーメン」

『コウ、それじゃと混じっておるのじゃが』

「別に神様信じてないから問題ない。クロガネ、死なない程度でやめさせといて」

『了解じゃ、まだ牢に入っておる生存者がのこつとるから主に任せ  
　　たのじゃ』

- 1、牢から囚われた人々を救い出した。
- 2、英雄だ何だと感謝されて拝まれた。必死で否定したが聞く耳持たってくれなかった。
- 3、全員馬車に乗せて待機の指示。

……以上のことを全て終らせて戻ってきたコウなのだが。

「右腕右足左腕左足、全部折ってあげる。大丈夫、お兄さん若いからすぐに繋がるって」

バキゴキと指を鳴らしながらまだまだ殴る気満々のツバサと、部屋の隅でがたがた震えて抱き合ってるクロガネとリョクの姿があった。

「……まだやってたのかツバサ」

「あ、お帰り、コウ。少し待って、コイツ折ったらはこぶから」

「いい加減にしろツバサ!!」

「っ!!」

一喝するとようやくツバサが拳を下ろした。おどおどと見上げてくるツバサを嫌いになつてねーよと苦笑しながら撫で優しく言い聞かすコウ。

「お前がああの村の光景を見て憤ってるのは解る。クロガネがやられて悔しかったのもわかる」

「……うん」

「だから、『いつまでも翳ってないで一思いに』やってやれ」

「主止めんのか!？」

「クロガネ、俺だって結構ビキビキきてるんだぜー?お前を殺した事とか」

「なっ」

「クロガネ、真っ赤」

「うっさい、リヨクの癖に生意気じゃ!!」

「それじゃまあ、今までのつけを払ってもらって事で」

「次は来世で会おうね。出来るなら友達として」

クロガネが照れ隠しにリヨクをぽかぽか叩いているのを背にツバサが深呼吸して拳を打ち鳴らす。

カルトの声なき悲鳴は誰にも聞かれることはなかった。

盗賊討伐（後編） 失敗と援軍と制裁（後書き）

自己満足の作品にお付き合い頂き、真に感謝しております。  
これからもドラゴンが増える『予定』です。少しでもお楽しみいただければ幸いです。



## メモ帳 能力と纏めと見直し（前書き）

今回は今のところの主要人物などを纏めただけの物です、飛ばしても支障はありません。

## メモ帳 能力と纏めと見直し

神（ドラゴンの元々の使い手）

神とは信仰対象の神等ではなく、現代では作れないようなオーバーツを作り、それを振るった種族のこと。

現代でこの種族の血が色濃く出た者を神人、または忌み子という。

### ドラゴン

神が使っていた武具。長年存在を続けた事で精霊（九十九神）化。人型、龍型、武具の3形態をとる。

人型時はまったく普通の人間とかわりが無い。第一部で鱗が見えたのはコウが封印をとかれたばかりで本調子ではなかったからである。龍型時はそれぞれに対応した色の鱗を持つドラゴンになる。多少融通がきくようで龍人型から蛇型まで変化。

### 忌み子

現代においてドラゴンを振える者。魔界の一般的な認識は『瞳の色が変わる者』であり

人間界では『災厄を運んでくる』とも言われており赤子ですら容赦なく殺すことも。

神人とも言われる。

### 世界

人間界・天界・魔界の三界あり、第一部では人間界、第二部では魔界を舞台にしている。

人間界はジャイアントがいる以外は平和なものであり、ジャイアントがいなければ人間界の忌み子への迫害はなかったと思われる。

魔界での忌み子は人間界ではそう呼んでいるので揃えて呼んでいる

だけで迫害は無い。寧ろ強い者への尊敬すらある。

ツバサ（僕／君）

種族：魔物と人の混血児。忌み子

能力：怪力、混血による見た目よりも頑強な身体

17歳ほどの黒髪の少年。瞳の色は黒　虹。見かけによらない怪力が特徴。

人間界で殺されかけた所を谷底に落下し、コウと出会った。愛する少女を守る為にジャイアントに立ち向かいコウを使う事に。

魔界編では日々増えているドラゴンに頭を抱えている。だがそれなりに楽しそうなので問題は無いだろう。

怪力はドラゴンと契約するたびに強化されていくので将来的には家屋くらいなら片手で持ち上げられるのではないだろうか？

事件の元凶などには容赦が無いので、コウには『私刑執行人』と言われる事も。

コウ（俺／お前）

種族：ドラゴン（虹龍）

形状：マント

能力：魔法無効

20歳ほどの青年。足元まである赤い髪といつも付けているマントが特徴。

自称防御特化のチート。魔法攻撃なら対抗呪文で完全無効化。物理攻撃にはショックプルーフ以外対抗手段を持たない。

谷底に封印されていたがツバサが落下した際に封印の札をはがした事により復活。

比較的温和だがツバサや他のドラゴンに関わる事だと容赦が無い。契約効果は『筋力の強化』。相手の決め手は潰すからこちらの決め手は自力でなんとかしろ、とのこと。

クロガネ（わし／主）

種族：ドラゴン（黒龍）

形状：ガントレット

能力：障壁キャンセル（条件付）

19歳ほどの少女。瞳、足元までの長髪、服装を全て黒で揃えているのと、いつも眠そうな目が特徴。

自称近接打撃特化のチート。相手よりも『パワーが強い場合のみ』相手の障壁をキャンセルする。その為カルト戦では防がれてしまった。怪力を持つツバサとの相性が良い。語尾は『〜じゃ』。ちょっとした戦闘狂でたまに体を動かさないと禁断症状が出る。

魔界に落ちたツバサとコウと合流した一人目のドラゴン。コウが好きで昔はよく一緒に旅をしていた。

契約効果は『クロガネが会得した体術を全て会得』。同じ技が使える方が戦闘法も教えやすいのじゃ、とのこと。

リヨク（僕／呼び捨て）

種族：ドラゴン（緑龍）

形状：風水盤

能力：魔法の広範囲化

12歳ほどの小動物的少年。姉に絡む事なら障害を排除しようと奮闘する。

髪、瞳、服は全て緑系統で統一している。言葉をすぐに切って話すのが特徴。『、』が多い。

自称範囲爆撃魔法特化のチート。少量の魔力を込める事で周囲の魔力の流れを操作し消費した魔力以上の魔法を放つ。弱点は魔法が広範囲化することで自分も巻き込まれるのと、発動時に光るのでコウのような防御特化タイプには分が悪い事。

姉を探す為にカルトに協力していたが、姉を探すのに必死で騙され

ていると気づいてなかった模様。  
契約効果は『防御魔法の強化』。自分の、魔法、自分、巻き込まれる、凄い間抜け、との事。

アリア（俺／お前）

種族：人間／忌み子／魔王

能力：微調整がきかない高威力の魔術  
コレといった特徴はなし。

現魔界最強であり、平和な魔界を作ろうとしている。前魔王も平和な魔界を作る気はあったが魔物としての本能には勝てず、魔物としての本能が微塵も無いアリアと決闘して魔王の座を譲る。但し八百長はまったく無いので実力は本物である。

シロガネ（私／あなた）

種族：ドラゴン（銀龍）

形状：????

能力：????

契約効果：???

影ながらアリアの護衛を勤める少女。カタコト喋りと銀髪が特徴。  
今のところ活躍の場も無いのでほぼ謎に包まれている。アリアとは幼馴染でアリアが魔王になるきっかけとなった、らしい。

## 挿話 魔王と報酬とカオス

盗賊団が壊滅した。いや、何を言ってるのかわからないと思うが報告を受けた俺自身わかってねえ。シロガネから報告を受けて開いた口が塞がらないんだ。

周りの魔物もこの光景にびっくりしていた、この魔王も驚くことがあったのかって。

数日前、Fランク3人のパーティが俺が依頼したSSランクのクエストに挑戦した！……という報告を聞いたときは「どこの馬鹿だ」とおもっていたのだが、蓋を開けてみれば見事に壊滅させている。こんな実力者がまだ人間にいたなんて信じられないな。

周囲に控えていた魔物を下がらせ、シロガネに尋ねた。以下はその時のやり取りである。

「このクエスト受けたやつ……何者だともう」

「登録したて アリアのSSランク受けた 常識知らず」

「だが実際に壊滅してる。タイミングとしてはそいつらがやったと思うのが普通だろう。俺達でも梃子搦つてたやつをあっさりと。こいつはとんだ化けものかもしれないな」

「コウ クロガネ 知り合い （友人） この二人ならできる」

「ドラゴンか。……じゃあ最後の一人が忌み子かな。今回戦闘があったと思われるところで死体は？」

「報告書 魔物 盗賊だけ 人間 村の人だけ」

「魔物はタフだから捕獲しても生存者が殺されると考えてとどめを刺したんだな、盗賊団の人間は結構捕まえてそうだが……」

「ギルド金庫 報酬 絶対足りない とりに越させる？」

「そいつらに会ってみたいな。馬車をよこすからギルドで待機とでもいっておけ」

「わかった ギルドで足止め アリア登場 ドッキリ」

「……たまにお前がわからなくなる。だが面白い、それいただきだ」

そんな魔王の気晴らし兼顔見せが決定した数日後、アリアの元に報酬の追加の通信が届く。

待つてましたとシロガネを呼び出し、世話係に「少し出かけてくるいつものように頼むな」とだけいつて魔王城を出てきた。小遣いもそれなりに持ったしこれから会いに行く4人を誘ってどこかの祭りに行くのもいいかもしれない、確か西の村が祭を開いてたはずだ。上機嫌にギルドまでの「転移門」の魔術式をくみ上げる。

「いくぞ、シロガネ。もう一人客人が増えてるらしい」

「誰？」

「会つてのお楽しみだ」

こいつがどんな反応をするのか楽しみだ、行方不明になってた弟が見つかった、なんて言ったら。

首を傾げるシロガネを背に転移門をくぐり、目の前にあるギルドの扉を開く。

「コウ、クロガネ、ツバサはいるか、っていうかどいつだ！」

ギルド内の全員が一斉にこちらを向く。少年二人を囲む筋骨隆々のゴリラみたいな傭兵達、少し離れたところで何か祈ってるような赤い男と呆れているような黒い女、その二人に紛れ込んでるギルドの受付嬢。

……なんだこのカオス。

## 報酬お預け中 移住と護衛とランクアップ

ギルドへの帰り道、ツバサ達は生存者達の馬車を護衛していた。とは言っても道すがら野党どもを薙ぎ倒しながらやってきたツバサ達なので先導ぐらいしかやる事が無いのだが。

4人は見張りを兼ねて縛り上げた盗賊を積んだ馬車に（御者席にクログネとツバサ、幌の上にリヨクを抱えたコウが）のっている。

先ほどまでリヨクが騙されていた事にようやく気づいて必死にツバサ達に謝っていたのだが、その目に怯えがあつたのは気のせいだと思いたい。

「主等、次はどうするのじゃ？」

「僕は、一人でもお姉ちゃん、探す」

「僕達と一緒に来ない？コウがアジトで裏の商人捕まえて他のドラゴンの情報が手に入ったんだってさ」

「銀髪で銀の瞳、更に人形のように小柄、更に銀龍……シログネ以外にいないだろ」

「僕には、手がかりない、たとえそれがガセでも、お言葉に甘える」

「じゃあそれで決まりかの」

「なんにしてもまずはギルドでクエスト終了させなきゃね」

そんな話をした日から馬車を進ませること数日、生存者の移住も無事に済んだ。

そして傭兵ギルドにて盗賊団の生き残りを引き渡し、Aランクにランクアップした3人。

リヨクはギルドカードを持っていなかったが今回の協力者という事でAランクのギルドカードを作成してもらった。

のだが……問題はその後やってきて



「もう一回確認させてもらうな……『報酬が多過ぎて払えないから直接魔王に貰いにいけ』……と？」

「は、はははい！さ、さすがに、こ、ここまで生け捕りにするとは思って、な、なかったようで……！」

「コウ、怯えとるのじゃ。わしと代われ。主、すまぬな、やつめ少し気が立っておるようじゃ」

「い、いえいえ……報酬が用意できなかったこちらのミスですので」

「コウ、いこ。魔王のところ、お姉ちゃん、いるんでしょ？」

「どうせ行く事になるんだし良いじゃない、ね、リヨク」

「ね、ツバサ」

すこしくらい休みたかったコウとしてはまた長旅になる事にイライラしていたのだが、ツバサがいく以上身内に対して心配性な彼がここに残る事はいえなかったのであった。

溜息をついて眺めたツバサと、彼に抱きついて撫でられるリヨクは、コウの目には本当の兄弟のように映った。と、背後からの衝撃によろめく。

「つと。いきなりなんだクロガネ」

「そう不貞腐れるでない。魔王が多少豪華な馬車を寄越すそうじゃ。今日はここでゆっくりできるじゃろ」

「たまには二人で何処かに出かけたかったんだがなあ」

「魔王の都で行けばよい。ツバサとリヨクもシロガネに預けてゆつくり、の？」

「……あーはいはい、わかったわかった」

「分かればよいのじゃ」

クロガネがコウの頬に口付けて優しく微笑む。コウが真っ赤になって口を開こうとしたが突然の怒声に遮られた。

「なんだこのガキどもは、ここはガキの場所じゃねえんだよ！目障りだ、さっさと帰れ！！」

## 魔王参上 諍いと紹介とブラコン

「なんだこのガキどもは、ここはガキの場所じゃねえんだよ！目障りだ、さっさと帰れ！！」

「ん…どこの馬鹿だ？」

怒声の方に振り向くとゴリラのような風貌の傭兵がいた。この間はいなかった輩か、前回は比較的好感の持てる傭兵がいたのだが……。

「ここは、遊び場じゃねえ、俺達が命を懸ける場所だ。ガキがそんな場所で遊んでやがるたあ、馬鹿にしてんのか！？」

「……」

「おい！なんか言ったらどうだ！このガキ！」

傭兵がぐつとツバサの襟首を掴みあげる。一瞬ツバサと目が合ったコウは背中に氷を詰め込まれたような感覚に震え上がった。

コウが捉えたのはああ、僕達に言ってたのか、とツバサの唇が動いたこととその冷めた目。

まわりの傭兵たちも概ねゴリラに賛成みたいだが、ツバサの氷のような目に気づいた奴はいない。

中には「そうだ、帰れ」と野次を飛ばしてる馬鹿もいる。……ああ、ツバサが完全にキレませんように、祈るだけで止めようとは思わないコウであった。

「受付のぬし、あやつらのランクは？」

「Bランクですね。貴方達ならギルドカードを見せるだけで黙らせる事が出来ると思いますよ」

「ツバサがそれで納得するわけねーよなあ……」

「大きい声ではいえませんが魔界では今回のように上位に喧嘩を売

った場合、切り捨て御免となりますのでご注意くださいね」

「……南無」

といったやり取りがなされてる間にも傭兵達は『かーえーれ！！かーえーれ！！』と子供のように声を合わせてツバサとリヨクを取り囲んでいた。

リヨクが震えて泣き出した辺りでクロガネが「あ、死んだのじゃ」と呟く。

直後、傭兵の壁の一部が吹き飛んだ。隙間から見たのは腕を伸ばしたツバサと傭兵達の驚愕した顔。

「黙ってればピーチクパーチクと煩わしい。命を賭ける？ならくならない事しないで腕を磨け」

「こんのガキつなめやがつてええ！！」

「大口なんて彼我の実力差ぐらい見抜けるようになってからにしろよ、くだらない」

「Bランク舐めんなよこの野郎！ガキだからって容赦しねえぞ！！」

宣言どおり微塵も容赦なくハンマーをツバサに振り下ろすゴリラ。激昂した傭兵達以外は次の光景から顔を背ける……がその予想は裏切られた、ツバサは溜息をつきハンマーを指一本で押し止めていた。あっけに取られる傭兵達をよそにいきなりギルドの扉が開かれる。

「コウ、クロガネ、ツバサはいるか、っていうかどいつだ！」

入ってきたのは何の特徴も無い男、その後ろに控えるは銀髪ショートの小柄な少女。

お嬢様と執事のような二人だが、ギルド内にいた全員が一斉に男の顔を認識すると、いきなり表情が凍りついた。

「ま、魔王っ!？」

「よくわからんが喧嘩は相手を選ばないと死ぬぞ?おっさん」

ツバサ達の騒ぎを見て、苦笑しながらいうアリアをよそに、ツバサが呆然としていたゴリラの脚を払い、軽く足を下ろした。

床板が嫌な音を立ててへし折れる。足をあげたツバサが『加減しすぎたか、もう一発』と呟いたのをその場の全員が聞き逃さなかった。リョクが慌てて止めに入り、傭兵達を『急いで逃げろ』と散らせる。

「加減、正解。あいつ等、殺す、ギルド、使えなくなる!」

「そうそう意味のない人殺しは使用権剥奪だからな。」

その怪力……お前がツバサか。俺は魔王、魔王アリア。他の二人は?」

「受付嬢と一緒にいる二人組だよ。報酬なら僕だけでも問題ないと思うんだけど」

「何、お祭の誘いだ。せつかくあの陰気臭い城から出かけてきたんだからパーっと遊びたくてな」

「それでちょうどいいから僕達を連れて行こうと?」

魔王が忌み子だという情報は知っていたからこちらが言い当てられても何も驚く事は無い。

なんか気さくな魔王だ、と考えつつ後方にいた二人を呼んでアリアを紹介する。

「虹龍のコウだ、ツバサが虹の忌み子」

「黒龍のクロガネじゃ、ぬしは銀の忌み子じゃの?」

「コレは丁寧にどうも。俺は魔王アリア、銀の忌み子でパートナーはこっちの…あれ?」

アリアも自分のパートナーを紹介しようとしたがシロガネがない。

コウ達もリヨクがいなくなってることに気づく。

「…リヨクー？」

「シロガネー！」

「あ、あのー……」

4人がキヨロキヨロといなくなった二人を探していると受付嬢から声をかけられた。

何かと思つて聞いてみると、先ほどツバサがコウとクロガネを呼んでいた辺りで銀髪シロガネの少女が緑リヨクの少年の手を引いて外にでていったらしい。

一方その頃街道にて

「リヨク 久しぶり お姉ちゃん、嬉しい」

「僕も、嬉しい、でも待つて、コウ達、パートナー、おいてきた」

「お祭 先にいくだけ 姉弟 水入らず お姉ちゃん 奢る」

「皆、心配性。後で、怒られる」

「大丈夫 アリア 私より弱い」

普段の人形のような印象からは打って変わって楽しそうに弟の手を引くシロガネと

『問題なのはコウのパートナーだけど…』と思いつつ引きずられていくリヨクの姿があった。

## 祭会場への道のり お仕置きと姉無双と最悪の予想

「まあ先にいったものは仕方ない、西の村だったのは伝えてるし小遣いも持たせてるから大丈夫だろ」

アリアは苦笑し、大きめの馬車を借りにいった。コウとクロガネは笑いつつツバサは溜息をついて続く。

「パートナーも無しで大丈夫かなあ」

「大丈夫、シロガネはドラゴン仲間でも有名なほどブラコンだしリョクも姉が好きだ。ドラゴン同士だからお互いの契約効果はないが、お互いを使つて戦うことは出来る。というかまずシロガネ自身も強いはずだ」

「……驚かせようと思って黙ってたら弟拉致つていくとはな、こっちが驚かされたぜ」

「黙ってたのは賢明な判断じゃの、あのブラコンじゃと言った途端に龍に戻つてこの村を襲撃しておったかも知れん」

ドラゴン二人は笑い続けるが幼馴染のアリアにとっては開いた口が塞がらないレベルの驚きだった。

あの人形みたいに静かで冷静なパートナーが実は弟に関してはそこまで変わるのか、と。

そんな呆けたアリアの隣ではツバサが指を鳴らして呟いた。

「とりあえず追いついたら二人ともお仕置き。リョクはともかく、シロガネはパートナーを一人にしちゃだめじゃない」

「ッ！？」

突然走る悪寒に二人揃って肩を抱き、震え上がるリヨクとシロガネ。

「ア、アリア 本気 怒ったかな！？」

「違う、今の多分、コウのパートナー。ツバサ、だともう」

「ツバサ 何者！？」

「子化けの巨人と吸血鬼、人間の混血。ツバサ、コウとクロガネ、同時に使える」

「……人間じゃない あの二人強力 負担 私達の比じゃない」

「でも、悪い人じゃない。さっきも、自分じゃなくて、僕の為に怒った。きっと、アリアおいてきたこと、怒ってる」

だが今更戻っても怒られる事にかわりは無い、よって祭りを楽しんでから合流する事にした二人なのであった。

再び歩き出して、二人は周囲の気配が異様に少ないに気づく。人払いでもされたかもしれない。

引き返そうとすると、すつと優男と冒険になれた傭兵のような男が現れて行く手を塞ぐ。

「おっと、坊ちゃん嬢ちゃん、こんな時間に二人でどうしたのかな？」

「迷子になったのかな？俺達がパパとママの所まで送ってあげようか？」

「お構いなく、この先、連れが待ってる」

「護衛も 必要ない 私達 おじさん達より強い」

「はははっ、コイツは度胸のある嬢ちゃんだ。俺達よりも強いときたか」

そっけなく言っすれ違おうとしたシロガネの肩を傭兵のような男



が掴んだ。

リヨクがその手を払おうとするも優男に羽交い絞めにされる。

「まあそう暴れるなつて……暴れたらもう一人を殺すぜ？」

傭兵が顎をしゃくると優男がナイフをリヨクの喉元に当てててにやつく。

ソレを見たシロガネは、両手を二人の男に向けて俯いてしまった。大人しくするから止めてくれ、と男達は解釈する。俯いたシロガネの瞳が銀色に輝き唇が小さく動いている事に気がつきもせず。

もし気づいていたらこう動いたのが解つただろう。「C・大地の欠片。マジックバレットMB・ゴレムの嘆き……シヨット」と。

びくん、と震えたかと思うと二人の男は途端に動きを止め、何か重いものが倒れるような音が続く。

石化した男の腕から抜け出したリヨクは振り返って冷や汗を流す。

「お姉ちゃん、やりすぎ……」

「リヨク 危ない目 あわせた 理由 十分。寧ろ お姉ちゃんまだ足りない」

「まわりにいる奴、ボコボコにして。お姉ちゃんが誰か殺す、僕悲しい」

「……リヨクが言うなら しかたない。殺さずに倒す お姉ちゃん不可能は無い」

自信満々で薄い胸を叩く姉を前に、リヨクは不安が拭いきれなかった。

ドラゴン姉弟が無双している間にカメラは戻って馬車の中。カルト

戦以降、ツバサはずっと疑問に思っていたことがある。

コウとクロガネは『心を通わせた者だけがドラゴンを振るえる』と  
いった、事実コウの契約の時もそうだったはずだ。

なんでカルトはリヨクを使えたのか？初めてあった敵意の無い、こ  
の忌み子<sup>アリア</sup>なら何か知っているだろうか？

「アリア、どう見ても心が通ってないパートナーがドラゴンを使え  
るなんて事があるの？」

「はあ？藪から棒にどうした」

カクカクシカジカでカルトとリヨクについて説明し、意見を求める。  
アリアも首を傾げる。ただし、カルトではなくツバサ達の方を疑問  
に感じて。

「ドラゴンが気を許した相手なら誰でも使えるだろ？シロガネは元  
々俺の師匠、青の忌み子が使ってたし」

「待て、そんなことわしもコウも無理じゃぞ、前に試したがだめじ  
やった」

「ああー……なら二人がプロトタイプか、シロガネはプロトタイプ  
では無いって言うってたし。何かないか、試作型ほど威力と何か不便  
な点がアルはずだ」

そう言うって魔法の発展を例に仮説を話してくれるアリア。

自分でも制御が聞かないほどの魔法で魔王になっただけあってその  
手の話には詳しかった。

「つまり強さを求めて使いやすさを無視した設計になってるって事  
？」

「確かに俺とクロガネは他の奴らに比べると柔軟性が無い代わりに  
強力だ。防ぐ、突き破る、それだけだからな」

「リヨク達は『誰にでも使えるように』条件を緩くした設計なんじゃない。それならばカルトの時の謎がとけるのじゃ」

「ああ、リヨクとシロガネは本人が気を許せば問題ないんだろう。多分味方なら誰でもつかえるって言う武具もあるはずだ、忌み子っていう縛りはあるだろうが」

「……誰にでも使えない様な武器は戦力に値しない、故に誰にでも使えるように……っなら、もしかして!!」

急に立ち上がるツバサ、その顔は真っ青で恐怖にがたがたと震えていた。

コウはツバサを座らせ、軽く頭を撫でて問いかけた。

「どうした、ツバサ？」

「顔色が悪いのじゃ、横になるかえ？」

「ツバサも同じ結論についたか」

「この想像が間違っていないなら、リヨク達以降に作られたのは……」

「武器は戦う為にある、だが、誰に向けるか決めるのは結局、肉体を持つ者だ」

「……だからこそ神種族は……」

忌み子二人が声を揃えて気づきたくなかった結論をだす。

「「戦力増加の為に、持ち主の体を支配する武器を生み出した可能性がある」」

## 到着 新クエストと合流と鉄拳制裁

「まあ、あくまで可能性だな？」

「僕達がこんなすぐに考えつく事なんだから絶対あるよ、どんな形かはわからないけども」

「クロガネみたいにドラゴンが覚えた事を人間にも覚えさせる強制同調の機能もあるだろう」

ボーッと外を見ていたコウが口を挟む。心当たりでもあったのだろうか。

クロガネを交えて話を聞くと、元々神に使われていた時代、いきなり性格が変わる使い手が何人かいたらしい。それはまさに二重人格かのように急激に切り替わり、動きがより鋭くなっていたと。

四人で頭を捻ってみたが結局対抗策も浮かばずに思考を断念。

「……推測だけで語ってもどうもならないし、この話はここで終わりにしよう？」

「そうだな、ところでお三方。コレから行く先でもう一つクエストやってみないか？」

「『お祭中にクエスト（じゃと）？』」

三人揃って首を傾げるリアクションに、満足気な顔で一枚の紙を差し出すアリア。

ツバサが受け取って内容を読み上げる。

町食いハンニバル

ランクS

報償：50000G

詳細：魔界の町を襲い全てを飲み込んでいくといわれる巨大な何か。

正体を突き止めた方に報酬。

「正体がわかれば良いのじゃな？」

「ああ、依頼者はそれで問題ないらしい。その少年が突き止めただけで止まるかはともかく、な」

軽く笑ってアリアはツバサを指さした。ツバサも自分の性格が分かっているのか苦笑を返す。

「突き止めたら倒すしかないよねえ」

「コイツは普段空飛んでるらしい。急に降りてきて町を襲うらしいから、こういう祭を警備するのが一番なんだとさ」

「わしらは空にいる標的には無力な接近戦型じゃぞ？役に立てるとは思えんのじゃが」

そこは大丈夫だ、と手をヒラヒラさせて続ける。

「俺とシロガネで片がつくさ。倒すだけなら」

「シロガネは銃器型じゃしの、強力な魔法を使う主とも相性がよからう。で、倒すだけとはなんじゃ」

「そんな巨大なものを落としたら町が大変なことになるから僕達に残骸を防いって事でしょ」

「そういうことだ、撃ち漏らしが出るだろうからその残骸から町を守って欲しい」

「撃ち漏らしなら良いが、丸ごと撃ち落したら流石に知らんぞ？俺の障壁は物理方面特化じゃないし」

「その時は諦めて逃げるぞ、正体は突き止めてるから問題ないし」

にやっと笑ってサムズアップするアリア。ツバサが頭を抱えてしまいがドラゴン二人も賛成だった。

無理な時は潔く諦めるのも生きるコツである。……ツバサが諦めなければ手伝ってしまうのが自分達だろうけれど。話が一段落した所で馬車が動きを止める、どうやらついたようだ。さて、迷子のドラゴンを捜さないと。

「ちよろい」

「もう一度言う、けど、やりすぎ」

「しんでない 病院送り とめた。約束 守ったよ？」

死屍累々の中心に立ってリヨクを抱きしめるシロガネ、撫でれといわんばかりの笑顔はどちらが上かわからないものだった。

きつと尻尾が出てれば千切れないか心配なほど振っていたに違いない、諦めたようにリヨクは姉の頭を撫でる。

ご機嫌で抱きついてくる姉をよそに改めて周囲を見渡し、足の踏み場が無さそうだと溜息をついた。

この姉は気絶した男達を平気で踏んでいきそうだから頭が痛い。

「さっそく問題起こしてるし……コウ、大当たり」

「な、いったら？あのブラコンならリヨクが絡まれたら騒ぎを起こすって」

「隠密に長けてたはずなんだがなあ、弟一つでこつも変わるのか」「仲がよすぎるのも問題じゃのう」

あ、助け舟（or 執行人）が来た。4人は平気で倒れてる人間を踏んづけ……てない。

ドーム状に障壁をはってその上を歩いているようだ。

リヨクが事情を説明し、周囲の男達を牢屋に連行して今度こそ祭会場へ行く事になった。

もちろん勝手に先に行った二人がツバサに拳骨をもらったのは言うまでも無い。

## 挿話 覚悟と羨望と守りたい者

「本当はこんな事はしたくないっすけど……やらないとあの子が危険な目にあうっす。怨むなどとは言わないっすよ、あっしはあの子を守るためなら魔王にでも勝つって決めたんっすから」

ハンニバルに乗って上空から西の村を見下ろす、紫色の髪を揺らす少女。

大きな者を盾に取られ、その才能を利用される彼女は今日も大空を飛ぶ。

「あの村が今回のターゲットっすね、祭の準備も終わって後は開催の合図を待つばかりってとこっすか？なんとも賑やかっす、これからあっしがぶち壊すと思うと罪悪感があるっすね……」

いや、迷ってちゃダメっす、ここで迷えば足元をすくわれるっす！」

雲に身を隠したハンニバルの上から一步踏み出し、空中にその身を投じる。

落下すると思われた体はすぐに降下を止め、雲の隙間を見えない手に引かれるように滑っていった。

町の様子を更に細かく観察しようとして少し高度を下げると、銀の少女と緑の少年（兄妹っすかね？）が大勢の男に囲まれているのが見えた。助けようかと片手をあげかけ、そこで手を止める。

「ここで助けても後で襲うんっすよね、じゃあ今助けても意味は……」

躊躇するうちに兄妹を囲む男達の包囲は小さくなっていく。兄妹はお互いに逃げろというように言い合ってるように見えた、といって



も上空からなのでただの推測に過ぎないが。そのうち、数人の男達が二人に飛び掛る。反射的に手を翳して飛び掛った男達を地面に打ちつけた……そしてはっと我にかえって頭を抱える。

「ついやっちゃったす。この距離だと加減が難しいっすから上手く手加減できてたらいいっすけど」

あわわわ、と真っ青になりながら自分の力の犠牲者を見やる少女、そこに広がっていたのは地獄絵図だった。たった数秒目を離れただけ、なのにもう周囲の男達が全滅していた。

「な、何が起きたっすか？魔法にしたってたった数秒……人間技じゃないっすよ?!」

少女が混乱してる間に妹が兄に抱きついて頭を撫でられていた。妹の甘えた表情と兄の少し困ったような表情が少女の胸を痛ませる、あの子が人質にされてなければ今頃自分もあぁしていただろうという羨望。

兄が周囲を見回して途方にくれていると二人の連れらしき4人組（赤髪に赤マントの青年、黒髪に黒いガントレットの少女、特に特徴も無い20くらいの若者、何処か怒ったような顔で拳を固める少年）が現れた。なぜだろう、赤と黒のペアには見覚えがある気がする、主に嫌な方面で。

なんにせよ今回はいつも以上に警戒が必要かもしれない、得体の知れない兄妹やなぜか見覚えのあるその連れ、イレギュラーが多すぎる。自分が負けてそのまま処刑されるのは別に構わない、しかし、大事なあの子が酷い目にあわされることだけは阻止しなければならぬのだ。

「誰が相手でも守りたいものはあっしの力で守って見せるっす……」

喩え悪魔と呼ばれようともっす」

……その決意が完膚なきまでに打ち壊される事を、この時の彼女が知る由もなかった。

## 町食いハンニバル 思い出とドラゴンと巨大なゴーレム

何年ぶりかのコウとお祭、そして始めてのクロガネやリヨク、アリア達とお祭。

カルト達を倒した噂が広まっているのか、アリアと一緒にいるからなのか

夜店に僕が顔を出しても嫌な顔をされることもなく、皆が笑顔で祭を楽しんでいる。

人間界では忌み子とばれただけで追い返された、ここではそれがどうしたと笑われた。

おもわず泣きそうになったがコウにからかわれるのは目に見えてるので我慢する。

シロガネに甘えられて困ってるリヨクとか、持っていたリンゴ飴おとつとをコウに齧られて真っ赤になってるクロガネとか、なぜか解らないけどアリアとタコヤキの早食い勝負とか、何の変哲も無い、だからこそ、楽しいお祭だと思えた。

日付が移り変わろうかという頃、宿の一室で疲れきった一行は眠っていた。

ふと、アリアとシロガネが目を覚まし、クロガネ達を起こさないよう静かに部屋を出る。

宿屋の入り口を出て目的地に向かおうとすると

「こんな時間に散歩なんて、僕達も付き合おうか？」

いつの間にか起きていたのやら、路地裏からコウ・ツバサ・リヨクが姿を現した。

コウは楽しい事に首を突っ込みたいのか不敵に笑い、リヨクは姉がいくからついていくのか眠そうに目を擦り、ツバサは真剣な表情だ

った。

クロガネはそのまま寝かせてきたらしい。

「護身的な意味でならシロガネが要れば心配は無いと思うが」

「いやいや、俺みたいな防御特化がいるだろう。町食い退治とかには、な」

「アリア ばれてるし リヨク達 連れてこ 早く終わる」

「僕でも、こういう時は役に立つ、多分」

シロガネに抱きしめられたままいりヨク、シロガネが「さすが私の弟」といつもどおりブラコンを發揮して男性陣は苦笑を浮かべる。コウも相変わらずだなあと呟いてアリアに向き直った。

「アリア達は気づいてないと思うが今回の件もドラゴンが絡んできてるみたいだ。

夕方二人と合流する直前にユカリの力っぽい反応があった」

「ツバサ、多重契約してるから、ドラゴンの力、気づきやすい。僕達、あのドラゴン知り合い」

「待て待て待て、何でシロガネは気づいてないんだ」

「……そのブラコンが弟の前で他に気を配るとおもうのか？」

「僕も今日知り合ったばかりだけどそうは見えないからねえ」

「……………確かに」

呆れた調子で兄妹に視線だけやる虹コンビに、現代魔王は肩を落として肯定することしかできなかった。

夕方の騒動で残された痕跡から遠距離から力を使ったこと（路地裏なので上空から力を使ったと推測）

シロガネとリヨクが使わない魔法の跡だったこと等をコウとリヨクがアリアに説明する。

（二人は薙ぎ倒すような衝撃波を起こすことが多いのに男は重力のようにまっすぐ下に倒れていた）

シロガネにも聞こえるように言ったがリヨクの言葉ですら耳にはいつてないので放置しておいた。

「とまあそういうわけでユカリが絡んできてる可能性が高い」

「ユカリってことは紫龍？」

「そう、それとユカリ、重力操作に特化してる。ハンニバル、噂だと巨大。人間の術者じゃ隠しきれない」

「つまりそいつ自身の特殊能力で空高く舞い上げてるって事が」

アリアが納得したように頷きながら、リヨクを愛で続けるシロガネを引き剥がす。

名残惜しそうにしつつもクエストの為に渋々離れ、パンパンと手を鳴らして仕切りなおす。

「多分 まだ上にいる 寝静まった頃 今日の稼ぎ 奪つつもり」

「元々略奪なんてするような奴じゃないし、祭の途中に仕掛けてこなかったのも被害を減らすためだろうな」

「じゃあなんでこんなことをしてるんだだろうな」

「コウも、ツバサが人質に取られたら、同じ事するかと。僕も、そうする」

「脅迫なら、説得次第でどうにかなるかもしれないね」

とりあえずまずはハンニバルを探してみよう、という提案で満場一致。

搜索開始30秒後。

「いやいやいや、もう見つかるとかありえねえだろ、はやすぎだろ」

「いや、あれは見つからない方がおかしいだろ？」

「ユカリ あんなに広範囲 力使えた？」

「成長、したのかも？ 僕達も、少しづつだけど、強くなってるし」

「僕が言うのもあれだけど、君達落ち着きすぎじゃない？」

明るいつ満月が隠れたと思って空を見上げた5人が発見したものは……巨大な鯨型のゴーレムだった。外見は特に歪でもなく醜悪でもなく、寧ろ芸術的でした。ただし、規格外なのはそのサイズ。

「ジャイアントが1としたら5くらいはありそうだな、ツバサ」

「流石に雷龍障壁でもあれに対抗するのは無理だろうね」

ああ、確かにさっき上にいるだろうとは言った。でも、まさか町の何処か、ではなく町の上空を覆ってるなんて誰が思う。……黒いボデイが宵闇に紛れて気づかなかったただでハンニバルは既に町の上空に存在していたのだ。

### 三重奏 激変と共鳴とトリガーハッピー

「シロガネ、やるぞ」

「コウ ツバサ 障壁 用意して」

魔王ペアが真剣な表情になって告げ、お互いの手を取ると周囲が光に包まれる。光が収まるとそこには魔王だけが立っていた。その手に持つのはシンプルなつくりの銀銃、それがシロガネの本来の姿。  
アリア現代魔王の手助けをする遠距離特化の武器。  
チート

コウの取説曰く『人間がやりうる魔法のずれならシロガネが勝手に修正する』らしい。

「コウ、これほんとにコウの取説？」

「いや、前半は俺の取説んだけどな。後半が真っ白で必要な情報が浮かび上がる」

「なにそれ怖い」

「リヨク、取説、貰ってない、コウ、特別？」

「俺に聞かれてもわからねーよ。まあ、まずはあれどうにかするぞ」

コウが身を翻すと一瞬光を放ってマントが残り、ツバサに羽織られた。リヨクは様子見としてツバサの傍に寄りそつ。さあ、準備は完了した。あとはアレをなんとかするだけだ！！

……具体的な案が浮かばないのはでかすぎるからです、はい。

「……ふふ、ふふふふ」

「どうしたのアリア、気でも触れた？」

『あはははははははー！！』

『シロガネまで……って、皆伏せろー！！』

「え、何うわっ！？」

後ろからリョクがタツクルしてツバサに覆いかぶさる。いきなりの事に混乱して頭を上げようとした瞬間、カマイタチが眼前を通り過ぎた。

再び静まり返った町に、いまだ立っていた者の方向から声が響く。

「おいおいおい、誰の許可得て俺様の頭上飛んでんだコラ？ 領空侵犯で撃ち落すぞー!!」

『魔王の上を通った時点で諦めな、私の銃口は狙った獲物は逃がしやしないよ!!』

そのまま倒れてしまいたかった、今の光景をみなかったことにしてぐっすり寝たかった。無理なのはわかってるけど。なにあれ?……え、アリア? ああ悪魔みたいに笑いながら乱射してる奴が? さっきみたいにカタコトじゃなくて流暢に喋ってる武器がシロガネ? ハッハッハ、ご冗談を。

『忘れてたシロガネは銃の時は性格変わるんだった。まさかアリアまで影響があるとは』

「……完全に、フリーズ、してる。コウ、言うの、遅い」

「はっ、恐い夢見た。アリアとシロガネの性格が激変する夢見ちゃった」

「寝ぼけてんなら帰ってねてるツバサ!」

『それから後ろで頭抱えて伏せてな!!』

「ってやっぱ夢じゃなかったああああ!!!!」

ドタバタしてるうちにもアリアは銃を乱射し続ける。まさか魔王がトリガーハッピーだったとは、ツバサ達は誰も予測できなかった。撃ち続けられる銃弾はハンニバルに次々と着弾し……たがハンニバルからしてみれば爪楊枝で刺されたほどにも効いてない様だ。当然



か、あの巨体に銃弾一発二発、マガジン10個用意しようがまだまだ有効打には届かないだろう。

「アリア、銃だけじゃなくて魔法は使わないの？」

「おいおい、てめえの目は節穴か？もう終わってんぜ」

『C・黒の宝玉、MB・死に至る病。こいつの本当の怖さは敵を内側から食い破るところさ！！』

シロガネが叫ぶと同時に、着弾した所からハンニバルが虫食いのように削り取られていく。

何あの化物弾！？バラバラッとコウの取説を開くと『死に至る病：遅行系魔法で瞬間的にブラックホールを生み出す。ただし、効果範囲は限られる＋全て吸い込まれるので使いどころが難しい』とあった。ほんとにこの取説万能だ。

ゆっくりとだがハンニバルの残り（といってもまだ全体の4分の1しか削れていない）が下降を始める。質量が減ったなら支えるのに必要な力も減るだろうに……？

『あー拙いな。ユカリの奴勝てないと思って町ごと潰す気だ』

「町の蓄え、諦めて、魔王潰す。後顧の、憂い、断てる？」

「アリア、流石にあの質量じゃ僕達も無理だよ！」

「OKOK、黙ってみてろ。限界まで削ってやらあ！！」

『銃身が焼け付くまで撃ち尽くしな、銀の魔弾、無敵の射撃<sup>インビジブルシュート</sup>見せてやんよ！！』

両手拳銃に自らの魔力が続く限りありつたけの魔法弾を作り出し、ハンニバルに撃ち込み続けるアリア。

先ほどの『死に至る病』ではなく爆発、主に激しい爆風が起こる魔術を多用してハンニバルを削りながら降下の時間を延ばそうとしていた。

「でも、まだ、足りない」

『多少なりとも被害が出るのは確実だな』

「問題は僕とコウの障壁で何処まで防げるか、だね……」

『分の悪い賭けは嫌いじゃないが今回は流石に絶望だろ、まあやるだけやるか！』

二人は静かに集中し、ツバサが町を覆う半球状の強固な壁を、コウが吹き荒れる風の守護壁を強く思い描く。睨み付けるようにハンニバル、そしてそこにいるであろうもう一人のドラゴンを見上げて手をかざした。後ろで魔力を使い尽くしたアリアが倒れるがリヨクとシロガネが介抱に向かったので意識から排除し、叫ぶ。

「ショックプルーフ！！」

『ウィンド・ガーディアンズ！！』

周囲に集まった魔力がイメージという管を通り世界に干渉する。現れたのはドーム状に町を覆う壁とその表面に纏われた吹き荒れる暴風。

風がハンニバルの勢いを奪い、壁がハンニバルを受け止め軋みをあげた。

「やった！？」

「まだだよ！まだ重力操作が一度もきてない。障壁がなくて気が咎めてたのかもしれないけど」

『障壁を使った以上本気で落としにかかってくるぞ！！』

一度は止まったと思われたハンニバルが、結界を軋ませながら降下し始めた。重力を軽減ではなく増加させたのだろ。それでも、今逃げ始めれば逃げられないことはない。そこから伺えるのは自分の

為だと割り切れない、効率がいいからといって実行できないでしょうもない甘さ。本当なら、守りたい者の為に本気で戦えというべきだろう、でもその甘さがある故に……

「コウ、絶対とめるよ。あの子に引き返せないほどの罪を犯させちゃだめだ」

『ああ、もちろんだ、具体的な案がないのが心もとないがね？ 化け物でも助けにすれば話は違うが』

僕達だって十分甘い。ほんとには相手が根っからの悪かもしれない、でも強制されてる可能性が少しでもあるなら『不倶戴天』というのはまだ早い、なんて思ってるんだから。障壁を境に押し合いを続けるハンニバルと僕にコウは軽口で返してくれる。

不意に後ろに気配を感じて振り返ると、アリアを運んで戻ってきた二人が迷うような表情のまま問い掛けてきた。

「ツバサ 人間 止める覚悟 ある？」

「あるなら、僕達が、何とかする」

「体だけならコウと契約したときに覚悟完了してるよ、心だけは人間でいつづけるともね」

「わかった、じゃあ、僕たちと、契約して」

「リヨク ツバサに懐いてる。リヨク 信用する 私も 信用する。契約、可能」

『さて、そんなことしたら……！』

コウの心配を無視して契約の歌を歌い始める。呼応するように二人で張った障壁が明滅し、より強固なものとなっていた。ハンニバルの落下と障壁の押し返す力が均衡した時、契約の歌が終了、全身に力が漲るのがわかる。

「って僕自身が漲ってようとあんなの持ち上げられないけどね」

「だから、いったよ？僕達が、何とかするって」そういつてリヨクが六芒星の描かれた緑のモノクルに変化すれば「3つ 一緒 使う 難しい がんばって」とシロガネも肩に担ぐタイプのキャノン砲に変化する。

「前と形違うね、二人とも」

「核は割と曖昧だからな。ドラゴン形態と同じく結構融通が利くん  
だ」

「私は遠距離までぶっ放す形なら何でもかまわねえさ！」

「僕、何かの、補助、するもの、なんでもいい」

「そつか、でも能力は変わらないよね？」

「『もちろん』」

ならそれで十分だ。シロガネを担ぎ、リヨクを右目につけ、コウを  
翻す。ほんと、いつもどおりだ。僕だけじゃ防げない、ドラゴン達  
だけでも守れない、いや、彼らは守る必要がない。結局皆は僕の我  
俣に付き合ったために力を貸してくれて、それでようやく僕は願いを  
叶えられる。

さあ、ここからが僕達のターンだ

## 限定召喚 炸裂と風船と轟沈

”共鳴発動”それは相性のよいドラゴンと使い手がシンクロ率を上げ、本来よりも強力な効果を得るものである

コウの取説、白紙の部分に浮かび上がった文字より抜粋。

「さあ、あのでかぶつ、どうやって破壊しようか？」

『過激すぎ。調子乗ると、魔力切れ、起こすよ』

『アリアの魔法で内側から虫食いにされてるからな、リョクとシロガネが加わった以上ツバサのステータスもかなり上がってるはずだし、いけるんじゃないか？』

先ほどよりも障壁が軋む音が小さくなっている。だが押し合いの状況は変わっていないわけで、残り半分ほどになったハンニバルは依然として町の上空に存在していた。

このまま支えつづけるだけなら、少量の魔力のみで周囲に満ちる魔力を操るリョクリョクが有利。しかし、相手はハンニバルだけ置いていけば無事逃げおおせてしまುದらう、ツバサが町を見捨ててすぐに追うわけがない。逃がさず殺さず、捕まえる……言葉だけなら簡単だけれど実行は難しいものである。

『ツバサ、押し合つてるとき急に片方が力抜いたらどうなる？』

「そりゃ力を抜かなかった方はつんのめる……ああ、そういうことね」

『魔力の供給はリョクに任せな、制御は私がしてやんよ。後は今考えたことをあんたが実行に移せば終わることさ』

「じゃあ、皆、今回もよろしく！」

『『OK、マスター！！』』』

コウに合図し、ハンニバルと押し合いを続ける障壁の魔力を減らす。空を歪める風壁と白く輝く光の壁が涼やかな音を立て、あっけなく砕け散った。支えを失った巨体が勢い余って地上に迫る中、イメー  
ジする形は獲物に喰らいつく顎。雷龍障壁の応用編！！

「リヨク、ありったけ込めるから魔力をもっと集めて！」

『任せて、町中の、魔力、かき集める！！』

「コウ、風龍障壁！」

『制御みすんなよ、ぶっ飛ぶぞ』

「シロガネ、僕の補助を！」

『あいよ、きつちり狙いつけないと承知しないよ！』

アレは止めるなんてあまっちょろい考えではダメだ、押し返す……  
いや、吹き飛ばす！！

それぞれに指示を飛ばし、風龍の召喚に備えて集められた魔力を術式に込めて世界に解き放つ。

「『風龍障壁、限定召喚』」

呪文は世界に対する宣戦布告であり、魔力を代償に貴様を捻じ曲げ望んだものを産むという言葉霊である。吹き荒れる風が砂を巻き上げることで、ようやく世界を捻じ曲げて生まれた者の姿を視認させた。風で構築された巨大な龍の頭、牙を剥いて今にも喰らいつかんとするそれはまさに「風龍の顎」  
ドラゴンストライク

「……でかつ」

『当然！一々全身かたどって作るから効率が悪いんだよ、そんな事も分からないのかい虹色コンビー！！』

『頭部だけの限定召喚なんて芸当は制御特化のお前以外できねえよ！』

「まあいいじゃない、今ここで成功してる、それだけで」

言い合いをBGMに風龍が咆え、落下してくるハンニバルに牙をたてた。豊富な魔力で生み出されたその龍はハンニバルを支えるどころか押し返してゆく。

「さて、コレで相手は対抗する為に重力を更に強くするはず」

『こっちの作戦通りとも知らずに、な』

ツバサが悪戯を仕掛ける子供のように笑い、風龍の術式を解く為に魔力を操作する。

「さて問題です。あの吹き荒れる風で出来た龍ですが、コウ」

『部分的に消滅させるとどうなるでしょうか？次リヨクな』

『正解、は……。はい、お姉ちゃん』

『くらってからの楽しみだっ！！』

順番に言葉を引き継いで術式を書き換えていく、それは自分達なら絶対に負けないという仲間への信頼から来る余裕。

「『いくぜー……シールド・テンペスタ！！』」

コウがツバサの身体でニヤリと笑い、牙の部分を一気に解放。次の瞬間、喰らい付いた龍が炸裂しハンニバルを大きく吹き飛ばした。

「やっぱり無理矢理方向を変えて生み出した風だからね」

『部分的に解放するとそこから一気に逃げようとするんだよな』

多分色々言うよりもパンパンに膨らんだ風船を思い浮かべた方が早いと思う、と心の中で呟くりヨクだった。

龍を構築する暴風がハンニバルを町の上からずらした事により、再び星明りが町に降り注ぐ。

「そろそろかな？」

『3 / 2 / 1 …』

近くの山に激突したハンニバルが地響きと共に崩れていくのが見える、アリアの魔法でボロボロになった所を風で打ちのめされ、山に激突したのがとどめになったらしい。

再び瓦礫が浮かんでこないことを確認しドラゴン3人は人型に戻った。

「3人同時は流石に少し疲れるね」

「さて、クロガネ起こしてユカリ捕まえるぞ」

「もたもたしてる ユカリ 逃げる」

「黒幕、にも、逃げられちゃう」

リョクが疲労したツバサの手を引いて走り出す。コウが後に続き、立ち止まったシロガネは驚愕していた。それは誰にも聞こえないほど小さい呟きだったが、なんでツバサは動けるの？と言っていた。



## 挿話 忘れ形見と教育とドロップキック

「あいたたた、まさかあつしの能力を利用して落としに掛かるとは  
つす」

崩れた山とハンニバルだった瓦礫の一部を重力操作で吹き飛ばし、  
ユカリが姿を現す。落下と崩壊の衝撃からか、全身傷だらけではあ  
ったが戦闘には問題ないようだ。

「本当なら逃げた方が良いって分かるっすけど……彼等は絶対おっ  
てくるっすから、ここで迎え撃つしかないっすね」

その表情は決意に満ち、そして何処か悲壮なものだった。

「この命ある限りあの子は、あつしが守るって約束したっす……マ  
スター」

ユカリがマスターと契約したのはもう数十年前の事になる。出会っ  
た当時、人間界にいたユカリは魔術師として最強の名を欲しいまま  
にしていた。魔力切れを起こさない自らの能力で連射していたので  
当たり前といえば当たり前だが。

そんなユカリだが、ある時ジャイアントに襲われた村を訪れる。理  
由は特になく、生き残りはいるかな？程度の気持ちでふらりと村を  
見て回っていたのだ。

持ち前の重力操作で瓦礫をどけ、死体を確認しては一所に集めてい  
く。そうしてるうち、運良く（悪く？）瓦礫の隙間に重傷を負った  
生存者を見つけた。

しかし彼女はもはや虫の息、ここまで生きていたのもただ苦しみが伸びただけじゃないのかと言う有様であった。ユカリが「あんだ、どうして生きてるっすか……もう村人は皆死んだっすよ？」と尋ねると、か細い声で彼女は「死にたく、ないから……それ、だけ……」とこたえた。

「それが、苦しむ時間を延ばしてるだけだとしてもっすか？」

「少しでも、可能性があるなら……頑張るの」

「絶望した途端死ぬっすよ？そこまでの努力も水の泡になるんっすよ？」

「それでも……君が、笑ってくれるまでは……生きてるよ」

その言葉で知らず知らずのうちに自分が泣いていた事に気づく。理由なんてよく分からない、ただ、目の前の子が死ぬのが悲しくて涙が止まらなかった。でも、次の一言でその理由が分かった。

「私は、忌み子だから……誰かを、悲しませて、死ぬのは、やだ」

息も絶え絶えでようやく開いた眼、その瞳は紫色に変色していた。そうか、この子が、私のパートナーになれる人、初対面の相棒なんだ。ずっとジャイアントに襲われた村を探し続けたのは……ジャイアントに襲われる忌み子を探す為だったんだ。

「じゃあ……泣き終わるまで死んじゃ、ダメっすよ？」

「大丈夫……だから、もう泣かないで」

血塗れの少女を抱きしめてただ涙を流し続けるユカリ。ユカリがただの人間なら、ただの魔術師ならば間に合わなかっただろう。しかしユカリは龍だ、回復系列には『龍の涙』と呼ばれる回復魔法がある、龍にしか使えないため知名度は低いがその効果は眼を見張る者

がある。効果対象を広げるリヨクに『一滴あれば町ひとつの怪我人癒せると思う』と言わせるほどだ。

しばらくして、女性の全身から淡い光が放たれ魔法の発動を確認する。

「これで、大丈夫っすね」

「今のつて……」

「今後とも、よろしくお願いするっすよ、マスター。あっしはユカリっす」

「マスターつて……まあいいか、よろしくね、ユカリ」

そして時は流れ、あの子　ユリが生まれた。ユカリとマスターのように強いならともかく、ただの忌み子の娘が生きるには人間界だと不安が残り魔界に移住した。

魔界では強ければそれだけで娘に手を出す者がいなくなる、とマスターは笑っていた。ユカリもマスターが笑ってるのが嬉しかった。しかし、3人が魔界での生活にもなれた頃、マスターがクエストに出かけた先で流行り病により死んでしまう。

同じパーティの剣士から、マスターからの遺言だと一つの封筒を届けられた。先に逝く事への謝罪やこれからのことが書かれていたがユカリが記憶出来たのは次の一文だけだった。

『娘をお願いね』

この一言が、ハンニバルを生み出す事になるなんて誰が予測できただろう。あるいは、コウの取説なら書いてあるかもしれないが。

ユカリがハンニバルを動かしはじめたのには二つの理由がある。

一つはマスターの娘を人質に取られ、様々な村での強奪を強要されている事。

もう一つは単純にいくつもの物資を運ぶより巨大な入れ物にいれて纏めて重力操作するほうが楽だからだ。

要求を満たす限りユリの安全は確保すると言う約束、力量の差から見ても一人で相手の組織を壊滅させる事は可能だがその間にユリを傷つけられては意味が無い為、仕方なくしたがつている。

今回、襲撃は失敗したが魔王と危険因子を見つけることは出来た。だから追いついて来たツバサ達を睨んで構えを取る。

「ここであんた等くらいは倒しとかなないと、ユリが危ないんっすよ！！」

「んなもん俺達が知った事か（やっぱ黒幕いるみたいだな）」

コウは心底呆れたような顔で応え、後半はツバサ達にだけ聞こえるようにぼやいた。

「よし、いけ、リヨク！！」

「了解！！」

ツバサの指示でユカリに特攻するリヨク。しかし指示してからのタイムラグで簡単にユカリの重力網に捕らわれてしまった。

さてどうする、とユカリがツバサを見るとコウと揃って苦笑している、ふざけてるのか？

自分の指示で仲間を捕らえられたというのに笑っているなんて。

「ごめんねリヨク、すぐ終わるから」

「大丈夫、痛くない、から」

「余裕があるみたいっすけど、なんかしたら容赦なくこの子を潰すっすよ。ユリの命には代えられないっす」

「……余裕あるな、そんな状況でまだしゃべってるなんてよ」

コウが苦笑しながら後ろを指差す、しかし、振り返れない。いきなり背中に氷柱を突っ込まれたような悪寒が走り、溢れ出るような殺気に身動きを封じられたのだ。

深い深い……いや、底の無いような暗い目をしたシロガネとクロガネに刃を突きつけられているのだ。少しでも動けば躊躇なく切り裂かれるだろう。

「リヨクは罔だよ、補助は得意だけど肉弾戦は不得手なんだし」

「よし、リヨクの拘束を解け、ゆっくりで良い。但し変な動きしたら二人が容赦なくお前を殺すぞユカリ」

「久しぶりに会ったのにコレはあんまりじゃないっすかね？ 兄さん」

「主が悪いのじゃぞ。ツバサがおったところを襲ったのが運の尽きなのじゃ。というかわしとコウの事忘れておったじゃろ」

「リヨク 手 出す お姉ちゃん 許さない」

冷や汗を流しながらリヨクの拘束を解いたユカリ。そこでようやくシロガネとクロガネも刃をしまう。ユカリは膝から崩れ落ちるように座り込んでしまいコウがその頭を軽くなでていた。

「い、生きた心地がしなかったっす」

「まあコレから死ぬしな、仕方ないだろう」

「え？」

さくっ、とコウが隠し持ったナイフを妹の首に突き立てた。ユカリは信じられない物を見るような目で兄を見上げ……事切れる。

「これでハンニバル、討伐完了か。まあ黒幕も探さなきゃな」

「さっさと片付けて帰るのじゃ……流石にまだ寝たりん」

クロガネが欠伸をしながら元来た道へ引き返そうと振り返る。ガサツと視界の隅の茂みが動いたと思った瞬間、ツバサの額に銃が突きつけられていた。

「全員、止まるである」

「相手からきてくれたみたいだね。ハンニバルの黒幕か」

「いかにも、アイツが余計なことを喋らなければここで出る必要もなかったであるが、聞かれた以上はもとも死んでもらうのである」

中肉中背、特徴があるわけでもなし、強いて言うなら語尾がであるといったくらい、黒髪に黒の瞳、ドラゴンの使い手でもない、銃をつきつけてきてるから魔法が使えないか発動が遅いタイプである、とツバサは冷静に観察する。黒幕は慌てず命乞いもしないツバサを不気味そうに睨んで引き金に指をかける。

ツバサは薄く笑って黒幕をまっすぐに見返し、口を開いた。

「クロガネ、僕が撃たれたら振り向いて左に三歩、その茂みに全力で蹴り」

「了解じゃ……主が撃たれたら我慢する必要も無いしの」

「ユカリ、殺される瞬間、見て、笑ってた、”ユリ”と黒幕の、今どんな気分？」

ツバサが連れの隠れてる場所を言い当て、リヨクが先ほどまでのこちらの行動を言い当てたことに寒気がはしる黒幕。種を明かせばツバサは気配で分かっただけ、リヨクは小さな本、言うまでもなくコウの取説に書いてることを読んだだけである。

「いやーまさか僕もユリと黒幕がグルでユカリを騙」

「今すぐお前を始末したい気分、であるな。未恐ろしいがきである」

黒幕はツバサが最後まで喋る前に引き金を引いていた、弾丸が額に直撃し仰け反るように倒れるツバサ。

即座にクロガネが指定された茂みに蹴りを放つがそこには何もいなかった。さっきの話が聞こえた時点で逃げるだろうから当たり前といえは当たり前だが。

「動いた奴から死んでもらうのである！」

「クロガネ、伏せろ！！」

黒幕の銃が次に狙ったのは、クロガネが狙われて動揺したコウ。再び響いた銃声とともにコウが倒れる。その場の全員があまりにあっけない仲間の死に呆然としたのを黒幕は見逃すわけもなく、瞬く間に全員が大地に血を流しながら倒れ伏すことになった。

「……存外あつけないであるな。攻撃力ばかりで防御する頭も無い連中であるか」

「あの五月蠅いトカゲも死んだしこれでよーやく自由だね」

「せつかくであるからして、景気付けにこのまま魔王も殺すのである」

「ほんと、いつもユリーユリーってウザいんだよあの紫のトカゲ」

「もういなくなった相手に愚痴愚痴言っても始まらないのである、忘れるであーる」

アリアが眠る町へ向かおうとした二人。しかし背後で枝を踏み折るような音がして振り返る。

……何もいない。銀髪の少女、赤髪の青年、黒髪の少女、緑髪の少年が倒れ付しているだけ……いや、最初に撃ち殺したはずのガキは何処に行った！？不意に後ろからの衝撃。倒れこんだ所で更に何かが乗っかって潰される二人。ドロップキックで潰された、と気づいた

のは乗ってきたものから声が発せられた時だった。

「もう皆起きていいよ」

二人の首を掴む手、今でこそ軽く弄るように動かしているだけだが少しでも力を入れれば人の首なんて簡単に圧し折れるであろう指、そしてその声は額を銃で撃たれたはずのツバサのものだった。

「ば、化物である！至近距離で額に銃弾を喰らって生きていたであるか！」

「嘘、嘘！！こんなの夢よね、そうでしょ！？」

「おーおー慌ててる慌ててる。今の気分は、恐怖ってどこか」

ツバサの言葉を合図にコウ、シロガネ、クロガネ、リョクも立ち上がる。

そして最後に立ち上がったのは怒りに震える、首をナイフで裂かれたはずのユカリだった。

全員、先ほどまで血を流していたのに今はかすり傷一つ無い

「な、何であんた生きてるの？！確かに死んでたのに」

「先代の子だからと甘やかしたあつしが悪かったっすね……して良いことと悪い事の区別もついてないとはっす。こんな子の為にいくつも村を潰してきたと思うと情けなくなるっすね」

「ドラゴンが武器・人・龍の3形態を同時に滅ぼさないと生き返ることも知らなかったなんて、馬鹿だなあ」

ユリが慌てて逃げようとすればユカリが重力で身動きを封じる。ツバサはけらけらと笑ってユリを解放し黒幕を掴みなおした。

「さて、ツバサ。今回ようやく言う相手がきたぞ」



「じゃあ全力でいこうか。リヨク、シロガネお願い」

二人に微笑みかければ二人も力強く頷き返す。

「不倶戴天……ってことで!!」

ツバサが”全力をもって”黒幕の体を大空に蹴り上げる。

そしてシロガネとリヨクが何かしたのか、夜空で花火のように投げ上げた男が爆発した。

「「たーまやー」じゃな」

「打ち上げ、成功」

「リヨク 手伝う お姉ちゃん 制御する 完璧!」

「あとは君に任せるよ。色々思うところがあるだろうし」

「分かったつす…では教育してやろう、つす!!」

「いやああああああああああああああああああ!!」

ユリの悲鳴が響き渡ったが町の人達はハンニバルの騒ぎでざわつき、ツバサ達は全力で聞かなかった事にしたので誰の耳にも入る事はなかった。

「しかし、ツバサも頑丈になったよなあ銃弾が負けるとか」

「ツバサ、どんどん怪力、なってる、普通、体が先、壊れる」

「それでも 平気 頑丈になってる 当たり前」

「単純に今までの倍の契約じゃからの。さっきも加減しておらんかったから相当上まで飛んでいったのじゃ」

「あ、因みにさっきの男の組織は既にアリアの差し金で潰されてたらしいよ。ハンニバル退治と共に裏で進めてたって……あの魔王結構有能だね」

## そして雪山へ 魔王の判決と呪詛と緊急クエスト

そして日が昇り、アリアも目を覚ましたので宿屋で朝食にする。周囲は昨夜の騒ぎでんやわんやだが割れ閑せずと食事をすすめる一行。ツバサが食べ終わる頃に躑、もとい教育を済ませたユカリが姿を現した。

「おはよう、ユリは？」

「おはようっす。出すとこに出してきたっすよ、罪には罰っす」

「ユカリの教育の時点で十分罰な気もするじゃが」

「私刑じゃたりないっすよ。今まで奪ってきた村も許さないとおもっす。だからあっしも、あんたらに挨拶と、いくつか聞きたい事済ませたら牢に入るつもりっすよ」

「……そうか」

やれやれと肩をすくめ、何か吹っ切れたように微笑むユカリ。対照的に兄であるコウは俯いてしまう。と、そこにまだ本調子ではないのかようやく食べ終わったアリアが口を挟んできた。なんだろう、あの悪戯小僧のようなニヤニヤ笑い。

「じゃあ魔王様から実刑判決。罰としてツバサ達の手助けを命じる」

「……はい？」

「アリア 魔王。魔王 決めた事 魔界で文句 言わせない」

ニヤニヤ笑ったままアリアが告げ、呆然とする一同にシロガネが付け加える。そんな二人に明らかにうるたえた反論しようとしたユカリを、机を叩いて笑い出したコウが止めた。

「いや、あっしは……！」

「ユカリ、諦める。自分の意にそわないからこそその罰なんだろ、アリア」

「そういうこと。まあ多分牢にいるより過酷だとおもうぞ？なんせこいつらだし」

「だね。まだ、少ししか、一緒、いない、けど、牢屋より、よっぽど過酷、でも、凄く楽しい」

「わしがクエストを選んでも一番張り切るのはツバサじゃからのう」ひとしきり皆が笑った後、ツバサがユカリに向き直る。その顔はにこやかなままだが、まとった空気は真面目なもので全員が口を閉じた。

「アリアはああ言ったけど、結局最後は君に決めて欲しい。僕達と共に行くか、ユリと共に牢で償うか」

「まあ牢に入ったところでぬしは騙されておっただけじゃ。すぐに出てこられるじゃろ」

「あ、あっしは……」

「ユカリ、可愛い子には旅をさせるとか獅子は我が子を千尋の谷へ突き落とすとか言うだろ。俺達と行こうぜ？」

しばらくあうあうと迷った末、ユカリは差し出されたツバサの手を取った。

「それじゃあ、よろしくね」

「あれ、そう言えば聞きたい事ってなんだったんだ？」

「それは……ツバサはなんでドラゴン3人を同時に使って走れたんっすか？あの時は状況が状況だったから流しちやっただけっすけど。あとなんであっしのとどめを刺さなかったんっす？」

「解除した時は疲れてたけど普通に走れたよ？」

何を言ってるんだというような顔で告げるツバサにアリア、シロガネ、ユカリがありえないと驚愕する。

「普通一つでも疲れるんだぞ、俺だって昨日シロガネ使って倒れたる！？」

「確かに ツバサ 身体 強くなってる でも 普通 無茶！」

「人間じゃなくなるとか散々脅しといて今更だろ。ツバサだってジャイアントを倒した時はしばらく目を覚まさなかったぞ？今回はステータスの上昇が半端なくて既に人間越えてるから平気なだけだ、ほら」

苦笑しながらコウが取説をめくる。そこには事細かにツバサのステータスが書いてあった。握力、体力、攻撃力、防御力などが一般的な人間のデータからはかけ離れている。

「数値にすると改めて人間やめておるの、ツバサ」

「僕もまさかここまでとは思わなかった」

「まあそういうことだ。多分虹の忌み子はドラゴンとの相性が良いんだろう。今まで多色の忌み子が一人もいなかったから断定は無理だが、何色にも変わるって事は赤と青と緑の忌み子みたいな考え方も出来るしな？」

「そう言われればそうなのか……で、ユカリのとどめを刺さなかったのは？」

アリアが先を促すと今度はリョクがにぱっと笑って答える。

「ユカリ、主犯じゃない、黒幕、絶対いる、コウがそうだった。だから、迂闊な事、喋ったら、消しに来るはず、それにユリ、共犯の可能性、あった」

「だから、死んだ振りして本音を出させた訳じゃ。死体の前では口

が緩むのが奴らじゃからな」

「そして失敗したとしてもハンニバルは退治してるから僕達に損は無いしね」

良い笑顔で言う彼らは何処か悪魔のようだった、と後にユカリは語る。

一方その頃、とある雪山の村にて

「おい、武器屋のおやつさんが倒れたぞ!!」

「ちくしょうまた一人追加だ、一体何が原因で俺達の村が!!」

広場の方が騒がしい、また誰か倒れたようだ。くそ、頭がくらくらする。天然種ドラゴン（この付近の主）の呪詛<sup>フレス</sup>で抵抗の無い者から倒れているようだ。同じドラゴンと言っても九十九神として一点特化な自分達とは違い、天然種ドラゴンは野生を生き残ってきた強さがあり、ブレスの汎用性も高い。防御特化<sup>コウ</sup>のブレスなら対抗できたかもしれないが空気を固める程度の能力ではいくら特化しても呪詛までは止められなかった。一体何を怒り狂っていたのか、山の主が直々に村まで来るなんて普通なら考えられない。ちょうど村長がこちらに相談しに駆けつけてきたようだ。

「緊急クエストを頼むべきですよ村長」

「ハクオウさんが言うなら頼むべきなんじゃろうが……」

「報酬なら私が用意します、ついでに山の主からいろいろ剥ぎ取らせれば良いでしょう。サファイアドラゴン自体がそれなりの報酬になるはずですから」

「そうか……わかった。じゃがギルドが来るまで村が持つかどうか」

「だからこそ、一刻も早く緊急クエストが必要なんです」

村長から通信用の水晶を借り、付近にある水晶全てに連絡を送る。

「緊急クエストをお願いします、内容は村の救済、サファイアドラゴンを倒すかその呪詛を解く方法を持つてくことでクエスト完了とします。繰り返します……………」

ギルドからのクエスト手配の知らせとすぐさま受注された知らせを受け、安心から気が緩んだハクオウの意識は闇に落ちた。最後に見えた色とりどりの集団はきつと疲労から来る錯覚に違いない。先ほどまでここには自分と村長しかいなかったのだから。

## 雪山の主 結界と留守番と魔王の鈴

ユカリの仲間入りが決まり、アリアの魔法で元の村に帰ってきたツバサ一行。ユカリのギルド登録を済ませ、ツバサ達もクエストの報酬を受け取る。……最短記録でポイントを稼ぐ彼らは周囲の傭兵からは恐怖の目で見られていた。別にとって食うわけじゃないのにねえ、とはツバサの感想である。

そんな中受付嬢は初クエスト時から面識があるからか普通に業務をこなしている、初対面でコウが殺気を放ったり、次に来たときはギルドの一部を破壊したりしたのだが平然としてるあたり彼女らの精神は意外と図太いのもかもしれない。まあそうでなくては荒くれ共や傭兵の受付なんてできないか。

ふと、ギルドのカウンター奥が慌ただしくなった。

「どうしたんだろ？ 変なクエストでも出たのかな？」

「SSランクでも来たのかもよ」

「それでも慌て方が異常なのじゃ」

何事かと首をかしげる一行にアリアから回答が出された。

「たった今水晶通信機から緊急クエストの要請が入った。依頼者はこの付近、サファイアドラゴンがいる雪山の村だな。ドラゴンの呪詛で壊滅の危機なんだとさ」

「ドラゴン 倒す それか 呪詛 解く方法 渡す クエスト完了」  
「ドラゴンって……コウ達みたいなの？」

「や、多分サファイアドラゴンなら天然種っすね」

「わしらも人型をとるのじゃが、人が全てドラゴンではないじゃろ？ 人にオリジナルがあるようにドラゴンにも天然物のオリジナルがあるということじゃ」

「まあ知能もあるし強すぎて人間に嫌われてるから俺達と見分けるのは相当難しいけどな」

年長組3人に説明されて納得するツバサとリョク。そして二人してにっこり笑う。

「じゃあ話も通じるかもしれないし助けにいいっか」「いいー」

「言うと思った。絶対言うと思った。魔界に来て片っ端から首突っ込んでるツバサなら絶対に言うと思った」

「耳に入った時点で休憩は諦めるしかないのじゃ、さっさと旅の支度じゃ。受付嬢、クエストの受注処理を頼むのじゃ」

「でもサファイアドラゴンだと厄介っすね。魔法攻撃無効、とまでは言わないっすけど直接打撃の方が効くタイプっすから」

「じゃあ俺とシロガネはパスだな、魔法しか役に立たんし……あと寒いとこ駄目なんだよ」

「同じく それに そろそろお城 戻る時間」

魔王組はあくまで息抜きということとでてきたのだ、ここでの離脱は当然と言えば当然か。というか後半が本音っぽい。あ、そうだとってアリアがコウに小さな鈴を渡して門を開く。

「お前らがぐぐったの確認したらそのまま魔王城に帰るからそれやるわ」

「魔王の鈴 効能は ただのアリア用 呼び鈴」

「まあ役に立ちそうなら呼んでくれ。急ぎの旅なら門を開くくらいはしてやるよ」

「わりいな」

「気にすんな、お前らが気に入ったからすることだ」

アリアが送るなら防寒具は村で買った方がいいだろうと全員たいし



た用意もせずに門をくぐる。アリアのまたな、という言葉がどこか遠くに聞こえ景色が一変した。

一面が白銀で覆われた村、空を雲が覆ってさらに視界を白く染めていた。

「ここが件の村だな、つか雪激しすぎじゃねーか？」

「サファイアドラゴンのプレスは吹雪の効果も含まれとったかの」

「ついでの呪詛と氷を含んだ竜巻っす。あっしらよりも使い勝手がいいっすよ」

「あそこ、誰か、倒れてる」

ここは広場のようで大通りのほうに誰かが倒れていた。連れの男が抱えあげようとするが力及ばずふらついている。見ているこっちがひやひやするありさまだった。たまらずリョクが駆け出す。

「僕、手伝って、くる。僕、魔法、強化しか、できない、から」

「僕達は龍を倒してくるよ。話だけで解いてくれたらそれでいいけどね」

「龍つてのは人間嫌いだからどーなるかわかんねーぞ？」

「話がわかってても力比べで勝ったら、とか言い出すかもしれんしの」  
「その時はその時っすよ！」

村 side

「大丈夫、ですか？」

「ん？あんたは……村の人じゃないな。どちらさんじゃね？わしはこの村の長じゃが」

「緊急クエスト、受けた、パーティ、僕、相性悪いから、お留守番、お手伝い」

「そうか、すまんがこの人を持つのを手伝つとくれ、村を結界で守

つてくれたんじやが呪詛にやられたらしい」

「わかり、ました」

リヨクが軽々と倒れていた者を担ぎ上げ、村長は驚いたがすぐに自分の家へ案内した。ベッドに寝かせたところで詳しい事情を訊ねる。聞くところによると原因はわかっていないがこの山の主とも呼べるサファイアドラゴンが暴れだし、村に呪詛を含んだブレスを浴びせていたらしい。物理的なブレスは倒れた人が障壁で防いだが呪詛は防げなかったとのこと。

「つまり、ハクオウ、近距離から、まともに、呪詛、浴びた？」

「自分は人より抗魔力が高いからと……わしらの為に」

「勇気、ある」

呪詛で苦しいのか魔される声が聞こえてきた。それをやさしく撫でて微笑むリヨク。その感触に気がついたのかハクオウが目を見ました。

「君は、さっきの色とりどりの集団の」

「……突込みどころ、たくさん、ある、けど、まずは、ゆっくり、休んで」

「私は早く山の主を倒さない！」

「呪詛に体、やられてる、休んで。主のところ、僕のパーティ、いった」

「いや、そんじよそこのパーティじゃ危ないんです……！」

「ねてる、いった」

起き上がろうとするハクオウをリヨクが無理矢理ベッドに押し戻す。ついでにコウ譲りの威圧感を放って動きを封じた。ハクオウが大人しくベッドに戻ったのを見て満足そうに笑い、その薄い私服を指差

す。

「そんな、格好、外出る、凍え死ぬ」

「これでも寒さには強いんですけど……」

「何か、文句、ある？」

「いえ、ありません。サー！！」

ほんわかと笑う彼の掌に集められた少量の魔力、それに連動するように強大な魔力が集まり、とてもじゃないが文句を言える状況ではなかった。物分りがいいとはなしが早くて助かる、と言う彼の、カルトに覚えなくていいことを吹き込まれた断片が見えた一幕である。もちろん「呪詛を直接くらって平気でいられるわけがないから大人しく寝てなさい」と本来の優しい部分も顔を見せるが、インパクトの強さで前者に軍配が上がってしまうのは仕方ないことであつた。

「おねーさん、相当、無理してる、魔力、乱れまくり」

「人の魔力の流れが見えるなんて、魔眼でも持つてるんですか君は」  
「誰でも、わかるよ、僕の仲間、5人、皆見れる」

「……相当レベルの高いパーティですね。なら、任せても良いんでしょうか」

「ん、多分、一日、掛からない」

ぱらりとお気に入りの本を開いたリョクの言葉に村長とハクオウは固まるのであつた。通常、龍は国軍ですら何度も繰り返し繰り返し攻撃し、バッドステータスを浴びせ、弱らせ、ようやく倒せるような化物である。それを数人で、しかも一日も掛からないとはどれだけの力を持っているのか。普通ならありえないと言っただろうが、微塵も疑わずに読書に没頭する少年を見ると疑う方が馬鹿らしくなってくる。

「信じてみるべきですかね」

「しんじるしかない、ともいえますのう」

二人に出来るのはただ祈ることだけだった。

## 蒼龍討伐前編 吹雪とプレスとツバサの本気

### 雪山 side

一方その頃雪山に向かったツバサ達4人は障壁を風除け代わりに猛吹雪の中を突き進んでいた。

「しかし、あの種族にも困ったもんだよなー。多分自分の住処に入った人間を探して回ってるだけだろ今回」

「まあ滅多に人間が入れるものではないじゃ、偶然迷ってついたら考えるのが妥当じゃろ……ふああ……」

「めんどくさい奴っすねえ……人間嫌いで有名なのも分かるっすよ」

「まあとりあえず話してみても説得不能だったら力づくで呪詛を解いて貰おうか」

拳を打ち合わせてコレが漫画なら、『うおっしやあ!』とでもつきそうな程気合のこもったツバサ、俺の背中で寝かけているクロガネ、そのクロガネを羨ましそうに見ながらついてくるユカリ。

……緊張感無いなー。これから国軍ですら大量の犠牲を払いようやく倒す龍、しかもここらの主を倒すって言うのに。ま、がっちがちに緊張してるよりは良いか。ところでクロガネ、俺の背中で寝るのは良いが耳元で囁くな、くすぐったい。

「この吹雪で眠れるクロガネに脱帽するよ」

「まったくっすね……と、いたっすよ!」

能力の特性上、遠視に優れたユカリが吹雪の中に今回の標的を発見する。コウもいつでも防御魔法が放てるように構え、ツバサは寝けているクロガネをハリセンで叩き起こす。(今回使用したのはき

つちり折り目を付けていない威力重視タイプ)

「ちょっと待つんじゃないツバサ、今何処から取り出したんじゃ！そして何処に閉まったのじゃ!？」

「コウのマント、クロガネのガントレット、ユカリのツバサ、人型で隠してるときと同じだよ」

「つまりは上手く説明できないってことか」

「お喋りはそこまでっすよ、相手もこっちに気づいたみたいっす」

ユカリと同じ方向を見ると大地を震わせながら龍が近づいてくるのが見えた。蒼い鱗を持つ龍はその色に似合わないほど真っ赤な怒気を放っており、その眼にはメラメラと火が燃えている。……ああ、話し合う気皆無だなあれは。

「なんだろう、話が早いって言うより……相手からして長引かせる気は無いみたい」

「大方、話し合いを設けるくらいなら村をさっさと滅ぼした方が早いと思つとるんじゃないやろ、人嫌いも過ぎると愚かじゃな」

「手っ取り早くぶつたおすぞ。今なら龍に戻つても誰も見る奴はいねえしな!！」

そう叫んだ直後にはもう虹龍がサファイアドラゴンに突進していた。今回は蛇のような長い身体に手足をつけた龍。って、いくらなんでも気が早すぎじゃないかなコウ?!慌てて追いかけようとするツバサをクロガネが止めた。

「おそらくコウは呪詛<sup>ブレス</sup>が効かん自分を盾にしにいったのじゃ」

「兄さんのブレスは物理的なもの以外ならほぼ防げるっすからね。神様の奇跡だつて無効化するさ、っていつも言ってたっすよ」

怪獣大決戦が始まる中、ツバサも戦闘に加わる為にクロガネを装備する。黒いガントレットを嵌めてユカリは下がらせた。彼女の力は強力だがツバサが戦闘に加わると、お互いがお互いの動きを制限するからだ。

「ユカリにはここぞという時の足止めをしてもらおうと思うから、準備しといてね」

「わかったっす、兄さんに怪我させないように気を付けて欲しいっすよ」

『ツバサ、龍との戦いじゃぞ。気を緩めたら死ぬと思うのじゃ』

「OK OK、何とかするよ」

深呼吸してキツと激突した龍達に眼を向けると

「姿だけは立派な龍だが、人間共の味方をするとは、もはやトカゲだな」

「古臭い誇りに凝り固まって滅ぼされるのを待つよりはいいだろ？坊や」

「トカゲ如きが坊やとは舐めてるのか？」

「お前が生きたその3倍の時を俺達は過ごしてきたんだぞ？坊やを坊やと言って何が悪い」

睨みあう様に距離をとり罵りあい始めていた。ツバサは呆れるように溜息をついて走り、サファイアドラゴンに向けて跳躍する。そして右足を天に向けて振り上げ……

「話し合う気が無いならぐだぐだ喋るな！！」

その頭蓋を砕かんと振り下ろした。ジャイアントの時から格段にレベルの上がった一撃が直撃し、ドラゴンの頭を揺らす。だがツバサ

の怪力でもってしてもドラゴンへの決定打には程遠く、ドラゴンは2、3度頭を振って、着地したツバサを睨んで咆えた。

「人間にしてはやる……だが邪魔をするなら容赦はせんぞ小僧！！」

今まで周囲を覆っていた吹雪すら吹き飛ばすような物理的な破壊力と呪詛を含んだ咆哮。大地に積もった雪まで撒き散らしながらツバサ達に迫るブレス。だがツバサがやれやれと首を振り、拳を振うとブレスが唐突に消滅した。

「……面白い技を使うな小僧」

「馬鹿やろう！！何かしたのはこっち、俺だっつの！！」

忌々しそうに睨み続けるサファイアドラゴンに尻尾を叩きつけることでツツコミとし、コウがツバサを守るように壁となる。……先ほどのサファイアドラゴンのブレスが掻き消えた原因は言葉にすればとても簡単だ。『コウがツバサに祝福<sup>ブレス</sup>をかけただけ』だから。相手に種を明かししてやるほど自慢癖も甘さも無いが。

「ふん、気に入らんが防御は一人前か。だが守ってばかりで倒れるほどわしは甘く無いぞ！！」

「じゃあ本気でいこうか、長引かせて死人が出ると僕も困る」

『ちよつと待つのがツバサあ！？』

拳を鳴らして構えようとした所でクロガネの邪魔が入り、よろけたツバサは不機嫌さ全開のじと目でクロガネをみやった。

「クロガネ、流石に慣れてきたけどここからって時に止めるのは皆の悪い癖だよ」

「それはしょうがないと思うっすよ、ツバサの発言ツツコミどころ



満載っすから」

「さっきのでも本気じゃなかったのかよ!!」

「本気出したら石榴みたいにはじけそうだし、さっきので3割かな」  
「手加減していた？はったりを……そんな怪力な人間、とつくに死んでおるわ!」

「じゃあ試してみる？いつとくけど人間にドラゴンが殺せないなんて勘違いしちゃダメだよ?」

その言葉がサファイアドラゴンの耳に入った時には既にツバサが眼前で拳を振り被っていた。振り下ろすようなハンマーパンチがクリンヒットし、ドラゴンの頭が地面に打ちつけられた。インパクトの瞬間に風の障壁を崩壊させ、生じた暴風でダメージを抑えたようだがさっきのように無傷とはいかないようだ。少し鱗が剥がれ、ふらついている。得意になつて笑うでもなく、驚愕するでもなく、ただ淡々と当然のことが起きた、そんな無表情でツバサは言葉を続けた。

「体を守る硬い鱗を砕き、その身にダメージを溜めれば……龍は殺せるんだよ」

## 蒼龍討伐中編 翼と重力と逃走

「そうか、風の噂に聞いた化物とは……小僧の事か」

「どんな噂を聞いたかしら無いっすけど、ツバサがあんたを殺すだけの怪力と、それに耐えうる頑丈さをもってる事は揺らがないっすよ」

「ふん、突然魔界に落ちてきてトカゲもどきを集めている化物とだけ解れば十分じゃろ」

瞬間、周囲の気温が一気に下がった。唐突な気温変動の原因であるツバサからあとずさるうとするドラゴン、ツバサは追いかけるように軽く踏み出して拳を振う。狙いは巨体を支える強靱な脚、しかしツバサはそれを物ともせず拳を振りぬき、バランスを崩されたドラゴンが轟音を立てて大地に伏した。

「訂正してほしいな」

「ふん、化物を化物と言つて何が悪い！！人の形をした、わしを越える化物が！！」

「そっちじゃない。コウ達はトカゲもどきなんかじゃない」

「それがわし等のような誇り高きドラゴンと同類だといいたいのか！！」

「天然種と九十九種つて差はあるだろうけどドラゴンはドラゴン……でしょ」

ツバサは小さく首を振った後、自分の胸に左手をあてて歌い始める。コウは何度も聞いた曲、クロガネも聞いたことのあるメロディ、ユカリもマスターから聞かせてもらった大好きな歌。

「ツバサ、また契約を増やす気か！！ここまで死んでないだけでも

不思議なんだぞ!!」

『いくらステータスが上がっておつても無茶は禁物なのじゃ?!』

「あつしらの為に怒ってくれるのは嬉しいっすよ、でも死ぬような無茶をする必要は無いっす!」

3人が必死に止めようとするがまだ息のあるドラゴンの前で隙を見せてしまうのは危険な為、物理的に止めるわけにもいかない。悲鳴のように叫んでも固い意志を持って歌い始めたツバサの心には届かず最後まで歌い終えてしまった。もしこの時、ユカリが本気で拒めば契約はなされなかっただろう。

……だが自分が化物だといわれたことより先に、ユカリ達をトカゲもどきと呼んだことに腹を立てたツバサが、自分との契約を必要とすることがユカリは嬉しかった。

『契約、完了っす……』

「ウアアアアアアアアアアアアアア!!」

故に契約は成され、ツバサの絶叫と共にその背に紫翼が広げられた。絶叫が終わると気が抜けたように膝をつくツバサ、息は荒いがドラゴンを睨む瞳にはしっかりとした意志が感じられる。無事に、完了したようだ。コウに視線をやって、来い、というように右腕を伸ばす。それだけでコウには伝わり、光を放ちながら赤いマントに変化しツバサに纏わりついた。

『……無茶だけはしないでくれ』

「了解、あいつにトカゲもどきって言った事を後悔させてあげる」

「トカゲもどきにおんぶに抱っこされて偉そうにっ!」

「僕のことならなんでも言っつて、どう言い繕っても結局皆がいるから僕は強くなれたんだ」

『わし等道具は使われてこそ、使いもせん主にどうこう言われる筋

合いは無いのじゃ」

戦闘が再開され、その体を両断せんとドラゴンがその鋭い爪を振り回す。ツバサも紙一重で避けていくが突然掬い上げるような引つ掻き、と見せかけた大量の雪の投擲には反応できず白い津波と共に雪原を転がされる。追撃を警戒してすぐさま立ち上がるが一面雪に覆われた大地が広がっているだけだった。

「逃げられた？」

『アレだけ誇り誇り言ってた奴が早々逃げる事は無いだろ』

『恐らくアヤツの能力が何かで雪に紛れたのじゃ』

『多重結界で奴を止めるにしても、あの巨体を抑えるほどの枚数なんてイメージしてる間にやられるっす！』

「この前の共鳴発動だっけ……今いる3人でも大丈夫だね？」

『ああ、問題ない』

じゃあそれで、そう軽く笑ってツバサは両手を合わせた。編み上げるイメージは自分を中心とした巨大な球体、一枚一枚イメージして展開するのが間に合わないなら障壁内部の領域に細工してやればいい。

「いくよ皆」

『いつでもいいぜ』『まかされたっす！』『さっさと決めるのじゃ！』

「合言葉は？」

『『『不倶戴天！！』』』

綺麗に揃った3人の声が絶対に成功する、いや、させる、そういつてるように思えた。この瞬間にも死角からドラゴンが迫っているかもしれない、でも何故か笑いが止まらなかった、勝つにしろ負けて

死ぬにしろ、皆と力を合わせる今この瞬間が楽しすぎるんだ。

「虹・鉄・紫の共鳴。『障壁破りの重力結界』……！」

イメージの隅々まで魔力を通し思い描いた魔法、結界に区切られた内部の重力に干渉する無茶を世界に発現させる。この魔法に防壁は無意味、クロガネとの共鳴によりこの領域内全ての障壁は僕以上の腕力を持たない限り強制排除されるのだ。

「……といつても長時間は僕も少し厳しいけど」

そう、今回のような場合相手がそれなりに近づいてきた時点で重力に絡め取られてゲームセットとなるのだが”自分を中心にした領域内の”重力を増加させている為、自分もその影響に巻き込まれる事になる。

『……おかしいな』

『なにがっすか？』

「結界をどんどん広げてるのに何も引つかからない……潜ったか、飛んだかな」

『あの坊やにとべるとはおもえんかったのじゃが、球状の結界に引つかからぬ以上空と見るべきである』

「共鳴解除、ユカリ、続けていくよ……！」

思い描いていたイメージを一気に書き換え、大地から強力な反重力、空を覆うように超重力の網を発生させた。……上空で何か引つかかった、ほんとに上空に逃げてた（本人（？））がきいたら一旦距離をとっただけだといひ張りそうだが）とは。

「ちっ、自滅すれば儲け物とは思っておったがもう気づきおったか」

「シロガネの契約効果である程度の距離なら音波で位置がわかるんだよ」

『そんなに便利な能力なんっすか？（ぼそぼそ）』

『音の扱いが上手くなる程度だったと思うぞ（ぼそぼそ）』

『何かがあるのは解るが何かまではわからないんだろ（ぼそぼそ）』  
「そもそも今回使ってないからハタリ（ぼそぼそ）」

重力に捕まって上手く飛べないこととツバサが仕掛けてこない事に痺れを切らしたのか、ドラゴンが大きく息を吸い呪詛を溜め、広範囲にプレスをぶつけてきた。だが無論ツバサが鬱陶しそうにマントを翻し呪詛払いで無効化してしまう。空を睨みあげたツバサはユカリの契約効果でドラゴンの正確な位置を捉え、反重力の手を借りて一気に飛び上がる。脚を真っ直ぐに伸ばし全力の跳躍と反重力の後押しで突撃する姿は、まさに一本の矢の様だった。

「撃震脚！！」

その矢は叫びと共に重力の網に捕らわれた山の主を射抜き、威力と込められた魔力が山の主の体を突き抜けた。がつくりと力の抜けたドラゴンの上に着地して更に重力を書き換えていくツバサ。

「君みたいに空で自在に踊れないけど、ジャンプくらいは出来るんだよ」

『『普通あそこまで飛べる人間は（いねえよ・いないっす・おらんじゃろ）』』』

「前例が無いなら作れば良いー　なんて、おちゃらけてないで落としに掛かるよ！！」

『重力増加っす！！』

軽くステップを踏むようにその巨体から脚を浮かし、次の瞬間”ツ

バサの全身”に重力をかける。ドラゴンにとどめを刺す為に放つ、先程とは逆の地上に向けた追撃。  
空に舞う雪を蹴散らし銀色の大地に山の主の巨体が突き刺さった。

「……蒼龍落とし」

「今回は後で言うのか」

「寧ろ何処の月面キックつか今の」

「好きなんじゃない、言うてやるでない」

もうもうと立ち込める雪の中から姿を現した4人。それぞれ自分の体についた雪をはらっている。

「それにしても、やっぱり後で言うのはダメだね。手応えがなかった」

「「そういう大事な事は装備外す前に言え!!」」「」

「もう飛べもしないから大丈夫と思うけど……」

「それは暗に走れるって言いたいんじゃないっすか?」

「大丈夫だよ、僕達なら追いつけるって」

「つまりもう逃げてるっていいじゃないっすか?」

「大丈夫、リヨクがくい止めてくれるって!!」

「……つまり町ではもう戦闘に入ってるだな」

「ってリヨクは相性悪いから置いてきたんっすよ」

九十九種ドラゴン3人が淡々とツツコミをいれ、ユカリがリヨクの身を心配して慌てた。

「こりやまずい事になったな」

「そうじゃの……あのドラゴンと町が心配じゃな、急いで戻るのじや!!」

「まず心配するのはそっちなんっすか!?!冷たすぎるっすよ!」

喚くユカリをツバサが宥め、足が速いクロガネが（ユカリの反重力で重みは消して）3人を引っつかみ町へ駆け出すのであった。



## 蒼龍討伐後編 リヨクと祝福と防衛線

村side

村長宅のハクオウが療養している部屋、リヨクが何かに気づいたのか読んでいた本を閉じて雪山を見やる。

「どうかしましたか？」

「前言撤回、一日も掛からず、こっち向かってきた」

「向かってきたって……何がです？」

「サファイアドラゴン。走って、きてる、かな。コウ達とも、違う、感じ」

「じゃあ君の仲間はやら」

「あいつが逃げただけ……！」

顔を青くするハクオウの言葉を遮り机を叩いた。震える腕を上げてモノクルを掛け直し、彼女を睨む。何処か鬼気迫るリヨクの迫力に気圧されて思わず退きベッドから落ちそうになった。

「え？」

「ツバサ達、負ける、ない。きっと、眼眩ましで、逃げた」

怒気を振りまきつつ扉を蹴破って外へ飛び出したリヨクをハクオウは見送るしか出来なかった。

そして対峙する九十九と天然<sup>リヨク</sup>。ボロボロといえ一片たりとも気迫の衰えないドラゴンと、それに負けず劣らずの怒気を放つ小さな少年。

吹雪すら止んだ静寂の中、先に口を開いたのはリヨクだった。

「ツバサ達、どうした？」

「わしがここにいるのが答えになるであろう？」

「逃げたのか、ドラゴンの癖に」

「そう現実逃避をするのは小僧の勝手だがな、村の前にわしがいてあやつらがおらんのは事実」

「確かに、ツバサ達、いない。でも、僕がいる。……お前の好きにはさせない」

「やれるものなら、なあ！！」

ドラゴンの撃ち出した氷のブレスが高速で飛来する中、リヨクはつまらなそうに溜息をつくばかりだった。

## 雪山 side

クロガネに手を引かれつつ村を目指して疾走中の4人。

「急がねば、村が危ないのじゃ」

「村より先にリヨクが心配すよ！！」

「ああ……悪いがあいつにそんな心配は必要ないぞ」

「さつきも村とドラゴンが心配だって言ってたけどどういうことなの？」

喚くユカリを一瞥してコウに視線をやる、九十九種ドラゴンに関しては呆れるほど心配性な彼が平然としているのだから問題は無さそうだがその理由がわからないとツバサ達も安心できない。

「まずはブレスの説明からじゃな、コウ」

「天然種のブレスは呪詛をこめて撃つ直接的な攻撃だが、俺達のブ

レスは破壊力はもたず何かを祝福して強化するんだ」

「あつしらを作ったのはもどきとはいえ神っすから、祝福効果も一応”あるんっすよね”」

コウが何処から紙とペンを取り出し、箇条書きで九十九種のブレスを書き出した。

コウ『全ての害を打ち払う剣』武器に3時間あらゆる魔法と呪詛を被う祝福をかける、一日一度のみ。

クロガネ『障壁を叩き割る拳』祝福した次の一撃だけあらゆる障壁を無条件で破壊する、一日一度のみ。

ユカリ『重力の帯』祝福された物体をぶつけることで対象の両手両足を重力で拘束する。

シロガネ『魔法服従弾』対象の魔法に祝福された銃弾を撃ち込む事で魔法の制御を奪い取る。

ブレスは魔法の使えない一般人にもかけられる。

「十分過ぎるくらい反則なのはわかったけど、肝心のリョクのブレスは？」

ツバサの問いにクロガネは眼を細め、弟分のブレスが使われた光景を思い出す。ブレスだけで言うなら恐らく最強といえる彼のブレスはできるなら使うべきではないものであった。

「自分と相手がいる空間に魔力が満ち溢れていること前提じゃが……」

「『篡奪者の光刃』周囲の魔力を根こそぎ奪って放つレーザーみたいなもんだな。集中力によっては魔法耐性持っても瞬間的に消滅させられる出鱈目な一撃だ」

「つまり食らえばジュッってことだね、というか魔砲？」

「表現はあれじゃが間違っではおらんの」

「魔力増幅に目がいきがちっすけどそんな隠し玉までもってたんっすね、リヨク」

「当然、そんなもん村で使ったらとんでもないことになる」

「無茶して無いといいけど……」

4人が村のほうへ向き直って見たのは、光の柱が暗雲を貫いて地上に降る光景だった。

「……ああ、やつちゃった」「」「」

村side

舞台は戻って村の入り口、時はリヨクが主のブレスを弾いた時まで撒き戻る。

「貴様もあのトカゲもどきと同じ技を使うか、忌々しい」

「馬鹿、言わないで、コウみたいな、呪詛払い、出来るわけ、ない」「事実弾いたでは無いか!!」

つまらなそうに言う彼にイラついた声で叫び、今度は焰のブレスを浴びせかける。爆発的に膨れ上がる炎は吹き荒れる竜巻のようにリヨクを取り囲み天高くまで巻き上がった。だが竜巻の中心にいる少年は眉一つ動かさずに平然としている。

「小賢しいマネをする、直撃はしておらんのだろ？」

「当然、この手の攻撃、効くわけが無い」

普通の防壁では最初の呪詛のブレスで叩き割られていただろう、喻えソレを耐えても続く焰のブレスでやけ死んでいただろう。しかし、リヨクに言わせて見ればブレスなんて結局魔力で生み出された暴風

に呪詛や炎などの付加魔法を足しただけの『魔力の流れ』でしかない。魔力の流れであるなら自らの能力で捕まえてしまえば後は意のままに操れる。」

「僕、倒したいなら、もっと、強いプレス、じゃないと」

「今日はドラゴンを舐めた奴が多い日だ……それ相応の代価は覚悟するがいい」

「そっちこそ、少年に負けた、初めての、ドラゴンに、なる覚悟、しといて」

「このたわけものが!!」

「そっち、こそ!!」

異なる種類のプレスを乱射するドラゴンに対し、リヨクは一步も動かずにことごとく制御を奪い上空へと弾き出す。戦況は膠着したかに見えたがあまりの連射にゆっくりとリヨクが押されだす、プレスを逸らす見えない壁がじわじわとリヨクに迫ってきたのだ。

「ほらどうした、もっとしっかり受けねば碎け散るぞ」

「もう、準備も、終わる。そろそろ、反撃タイム、僕のターン」

「この状況で強がるとは面白い、気に入ったぞ小僧」

リヨクが両手を上げ3重になった強固な結界を展開する、もって30秒程度。だが準備が終わったリヨクにはソレだけあれば十二分。自らの両手に軽く息を吹きかけ、いつものように切って話すのではなく滑らかに詠唱を開始した。

「もう魔力も残っておらんその体でどう足掻くというのだ」

「我が呼び声に応え来たれ天空の星、光刃となりて立ち塞がる者を撃ち滅ぼせ」

「……自棄にでもなったか」

「僕の力は、周囲の、魔力操作、少しの魔力を、元に、魔力、かき集める、役目。……でも、僕自身、応用くらい、できる」

太陽が顔を出したように上空から光が降り注ぐ、光源はリョクが上空に逸らしたブレスの魔力だった。乱射したドラゴンブレスが纏められ、一つの魔力塊として解き放たれるのを待っている。

「まさか、アレを制御しながらブレスを弾いていたのか……」

「同時に、操れる対象、一つじゃない、から、当然。相手の魔力、周辺の魔力、根こそぎ、奪うところから、この魔法は、篡奪者の光刃、呼ぶ。いくら、耐性ある、鱗でも、きついよ」

言って両手を振り下ろし、少しでも気を抜けば荒れ狂う魔力を制御から解き放った、魔力塊に呆然としてしまったドラゴンに、次の瞬間降った閃光の柱を避ける術などなかった。

「緑は自然、自然は力……これが僕の無敵の息吹だよ」

インビシブルブレス

## 白龍の笛 龍玉と報酬と宿屋にて

蒸気が立ち上る中、篡奪者の光刃の直撃を受けて倒れ伏したドラゴンは生きていた。いや、正確に言うなら術者の少年が直撃する寸前に誘爆させて威力を殺していたようだ。手加減されたのか？制御をミスしたのか？近づいてくる足音の方に薄く瞼をあけて視線をやる

「……なぜとどめを刺さん」

「殺したら、からかえない。今回は、僕の勝ち。君は、少年に、負けた、誇りスタボロ、ドラゴン」

「嫌味な奴……いや、甘すぎる小僧だな」

「自覚は、あるよ。でもまた、向かってきても、倒せるから」

そういつて少年が指差した空をみると先程以上の魔力塊が渦を巻いていた。少し気を失っている間に再び魔力を集めていたらしい、尻尾と翼を伏せたげんなりとした様子でドラゴンが少年を睨む。

「分かった分かった、今あんなものくらったら塵も残らん。わしの負けじゃ」

「じゃあ、呪詛、という？」

「ふん、わしの縄張りに入った人間を見つけるまでは……」

「……我が呼び声に応え」

「だああああ！！わかった、わかったからやめい！！」

いい笑顔で脅しをかける少年と焦った様に叫んで呪詛を解くドラゴン、端から見るととても間抜けな光景に違いない。国軍ですら恐れるドラゴンが少年の一言で黙るなんて民間に伝わる勇者の話でもそうはないだろう。村から解呪された魔力の残滓を確認し、リヨクは懐から透明な液体の入った小瓶を取り出した。蓋を外して一滴だけ

ドラゴンの焼け焦げた鱗に落とし上空の魔力塊の魔力で魔法を発動させる。一瞬ドラゴンの全身が淡く光り瞬きする間に全ての傷が時間を巻き戻したかのように無くなっていた。

「……治してもらっていうのはなんだが、なぜだ」

「別に、僕は、君を、殺したい、わけじゃない。誰だって、間違いはある、だから、今回はこれで手打ち」

「縄張りに入っただのは人間の間違いと？あの吹雪を抜けてくるようなやつらが」

「その、吹雪のせいで、迷い込んだんでしょ」

「……………なるほど」

まさか気づいてなかったのかコイツ、と思っただがりヨクは口を噤む。世の中黙ってたほうがスムーズに話が進む事が多いのだ。

ハクオウがりヨクを見つけたのは納得したドラゴンが謝罪を済ませ住処に帰ってからだった。

「無事だったんですね！村の呪詛も解けたみたいで皆快方に向かっています」

「ね、僕達の、パーティ、なら、大丈夫だった、でしょ？」

「疑ってごめんなさい、ところで報酬の件なんです」

「もう、もらった、サファイアドラゴン、龍玉、お詫びって、おいてった」

「……えらく気に入られたみたいですね、あ、それとこれは私個人からです」

そういつてハクオウが差し出したのは金貨の詰まった袋と龍が描か



れた白い笛。金貨は最近荒稼ぎ（カルトの盗賊団の時の報酬）したので返しておいた、笛の方はなんだか気になってこれは？というように彼女の顔を見ると彼女は微笑んでこう告げた。

「私はこの村をとても気に入ってるんです。だから村を救った貴方達の力になれるなら、いつでも呼んでください。風が吹く場所ならどこでも行きますから」

「そう、期待しとく、ありがとう」

お互いに微笑んで、二人の間を一陣の風が通り抜ける。風を見送ったりヨクの前にはもう誰もいなかった。

「風属性特化のチート<sup>ドラゴン</sup>、か。あのブレス、受け止めたなら、まともな、人間じゃないとは思ってたけど」

ツバサ達の魔力もだいたい近づいてきたしそろそろ戻ってくるみたい、お腹すいたし皆で何か食べにいきたいな。ここでドラゴンと会ったって知ったら驚くかな？でもツバサは優しいからハクオウを無理矢理連れて行くなんて事はしないよね。……あーあ、早く帰ってこないかなー。

「今回は美味しいとこ全部持つてかれた気がするよー……」

「まあまあ、雪山であれだけ暴れたんだから満足しとけて」

「わしなんてほとんど出番が無かったのじゃぞ？ただのボケ役だったのじゃ」

「あつしは相性の関係でそれなりに出番あつたつすからね」

「雪山の、ほうだと、僕、微塵も、出れなかった、から、お相子」

今回の報酬の龍玉を転がしながらの座談会。リヨクはハクオウのことを話したがツバサは予想通り「ここが気に入ってるならそっとしておいてあげよう。呼ぶのはどうしても必要なときだけね？」と笑ってた。必要とあらばまよわず呼ぶが、なるべく相手の日常を大事にさせる彼が僕達のマスターで本当によかった。いつか、僕達の命をかけるような時がきても彼を守る為なら躊躇しないとドラゴン4人は頷きあう。アイコンタクトだけの意思疎通だったからツバサが首を傾げたのが少し可笑しかった。

そして夜になり、今夜は村で一泊してから帰る事になった。というか村人達に礼を言いたいからと引き止められて夕方になったので泊まるしかなかったという落ちなのだが。今日は2部屋とって男女に分かれて泊まる、たまには皆一緒だとできない話でもしてみるか、とはコウの談。

## 挿話 虹と鉄と記録

男組

「やつぱこういうときは聞くことはひとつだね」

「そう、だね」

「なにかあんのか？二人とも」

「「ずばり、コウはクロガネのどこが好きなのか」」

二人で声を揃えて言ったのと共にベッドの上で林檎をかじってたコウがむせた、気管にでも入ったのかな。流石にそうくるとは予想できなかった、と呟いてコウが語り始める。

確か両方九十九種になって初めて出会ったんだが印象最悪だったんだよ、お互いになんだこいつって。プロトタイプだったらしい俺達を使える神種族も、気があう適合者もいなかった。得意なことがまったく逆方向で俺は障壁を作る防御型、あいつは敵の障壁を割って滅ぼしにいく攻撃型、当時の俺にはただの野蛮な奴にしか見えなかったんだ。気が合う点がほぼ無いわな？

「……それが、今は良く、ラブラブに、なった」

「まあ今はコウ自身好戦的な性格になってるしね」

改めてラブラブとか言われると恥ずかしいからやめてくれ。あの時は犬猿の仲って言うか冷戦状態だな、お互いの存在を無視してたしま、俺がクロガネを意識ししたのはある日の事だ。俺達を作った組織を危険視して研究所兼孤児院、とでもいうべき施設が襲撃され何人も罪も無い子供が殺された、俺に出来た事なんて同じ部屋にいた子供を結界で守るくらいだった。恐怖に怯えて、ただ守るだけの

俺には子供達を安心させる術がなくて……。あいつ等が絶望して泣き叫ぶ声を、身を寄せ合って震える姿を、今でも忘れねえ。

「コウの力なら大抵のものがきても大丈夫だとおもうけど？」

今でこそ風龍障壁やら雷流障壁やら反転の壁やら使ってるけどな、当時は不可侵結界、敵対する全てを通さない守るだけの壁だったんだよ。だから守られた壁の外には怖い怖い鬼がいる、子供達が出てくるのを待ち続けてる怖い鬼が。怯えて、泣いて、もう子供達が壊れるんじゃないかって思ったときに……。突然結界内で開くはずの無い扉が開いた。警戒して子供達の前に俺が立っただけどさ、そいつは子供を見た途端いきなり泣き出して、よくみたら全身傷だらけのクロガネだったんだ。生き残りを探して施設に入り込んだ敵を殺して回ってたらしい。

その時からかな、クロガネが気になりだしたのは。ただの野蛮な奴だと思っただけと俺みたいに直接的な守る術を持ってないから、襲い来る敵を排除する事でしか誰か守る方法がなかっただけなんだ。それに俺も、ただ防御するだけじゃ敵は消えてくれないって思い知った。だから、攻撃のクロガネと防御の俺のコンビで行動するようになって俺も攻撃的な防御魔法を覚えだしたんだ。

「つまりただの野蛮な奴だと思っただけクロガネが実はそうするしかなかっただけで、子供達をみつけ安心して泣き出すのを見て恋をしたと」

「……凄い、纏め方」

「まあ間違っただけ……かな？」

「「ご馳走様です」」

「声を揃えて言うな!!」」

## 女組

「姉さん姉さん」

「なんじゃ？」

「兄さんとの馴れ初めが聞きたいっす！！」

「お主いきなりソレか！！」

眼をキラキラさせて爆弾を落としたユカリに顔を真っ赤にしたクロガネが咆える。

「……コウから聞いておらんのか？」

「兄さんはなんだかんだで照れ屋っすからね。恥ずかしいからって教えてくれないんっすよ」

なら仕方あるまい……コウ、怨むのじゃ、といってクロガネが語り始める。まさか向こうも同じような事を聞かれてるとは夢にも思うまい。

両方九十九種ドラゴンになった後、つまり人型を得てから初めて出会ったのじゃ。じゃが馬が合わずお互いに相手を見捨てておつての、当時のわしから見れば『守ってばかりの臆病者』としかみえなかったのじゃ。プロトタイプだったらしいわし等を使える神種族も、気があう適合者もおらず。得意なことが正反対の障壁を作る防御型のコウと、障壁を割って叩き潰す攻撃型のわし、気が合う点が無いじやろ？

「でも今はラブラブっすよね？一体何があつたんっすか」

……改めてラブラブとか言われると恥ずかしいのじゃ、確かに同じ

リンゴ飴を食べたりはするが…（ごによごによ）。はっ、気を取り直して続きじゃな、当時はまさに冷戦状態じゃったが、わしがコウを意識しだしたのはある日の事なのじゃ。わし等を作った組織を危険視して研究所兼孤児院とでもいうべき施設が襲撃され何人も罪も無き子達が殺されたのじゃ。

わしに出来た事は、襲つてきた馬鹿共を殺してまわり、生存者を探すことだけじゃった。

「姉さんは防御には向いてないっすからしょうがないといえばそれまでなんっすけどね……」

今でこそ色々な武術を習得してそれなりに戦えるがの、当時は心得もなくただただ見つけたものをドラゴンとしての腕力で屠るしかなかったのじゃ。……わしには忘れられんよ、恐怖や絶望、想像を絶するような痛みの表情で死んでいた子等の顔が。もう少し早ければ助けられたかもしれん、いつも一緒に遊んだちびの声が……心が壊れてしまうかと思う中でようやく侵入者を全滅させ生存者を探し彷徨うわしは、偶然結界が張られた部屋を見つけたのじゃ。その結界は施設内の誰かが張った物で抵抗なくわしを通し、扉を開いた。中にいたのは警戒するように子供達の前に立ったコウだったのじゃ、わしは部屋にいた皆を見て限界がきて、生存者がいたことに安心して気が緩んだといえるかの？いきなり泣いてしもうた、慌てたように涙と傷口から流れる血を拭くコウがなんとも可笑しかったのじゃ。子供等を放っておけばすぐに逃げられたというのに、当然のように守っておつたらしい。なんとも、あやつらしいじゃろ？

その時からじゃな、コウが気になりだしたのは。ただの臆病者と思つてたがわしのように外敵を排除する術を持たぬ身故、自分が危険の中にいようともし守り続ける勇気のある奴じゃと。わしもただ敵を潰すだけでは誰も守れぬを思い知らされた。じゃが不向きな物は不

向き、コンビで行動するようになったわしはコウに守りを任せてより攻撃に特化していったのじゃ。

「臆病者と思つてた兄さんが子供達を守ろうと入ってきた姉さんに威嚇してるのを見て恋に落ちたんっすね」

「もう少し言い方はどうにかならんのか？微妙に間違つた表現に聞こえるのじゃ……」

「まあとりあえずこういうっすね？……ご馳走様っす」

「~~~~っ!!」

ユカリの言葉に真っ赤になつて暴れるクロガネは騒ぎを聞きつけたコウ達が来るまで止まらなかった。宿屋の店長から『若いねえ』と言われたが、怒られるよりコウとクロガネには効果があつたかもしれないのはここだけの秘密である。

馬車に揺られる馴染みの村への帰り道。今回はユカリ達が気を効かせてコウとクロガネが同じ馬車に、ドラゴン化したリヨクの背中に残りの二人が乗っていた。リヨクの上ではしゃぐ二人を眺めてクロガネは微笑む、ここにはあの時のような血の匂いはなく、暖かい太陽のような香りがする。ふと、取説をめくるコウが手を止め、首を傾げた。

「どうかしたのかえ？」

「いや、ちよつときになることがな」

「……何を見たのじゃ？」

コウが取説の後半、普段はまっさらなページの部分を開いてクロガネにさしだす。

「これが事実じゃったら、ツバサは……なんなのじゃ？」

「この部分に嘘が書かれることは無い。コレは、そういうものなんだが……」

「確かに吸血鬼やスプリガンの血が混じってるとはいえ頑丈すぎると思っておったが、虹の忌み子ではなかったのじゃな」

広げられたページに書かれていた言葉は立った一言、『虹の忌み子は十年前に死亡し現在は存在を確認されていない。』。

「じゃあ、ツバサは一体なんなんだ？あの自分が人間だっていつて『本当の化物』にならない様に耐える優しいあいつは……」

「何百年も前に同じような力を持った忌み子はいたはずじゃが……流石に直接契約した相手でないと詳しくはわからんのじゃ。他に一

つだけ心当たりはある、神種族が同族の犠牲を恐れて作っておつた「ちがう、あれは計画が上手くいかずに全て廃棄処分されたはずだ」

「……コウ、ツバサは人間だったのじゃろ？初めて会った時崖から落ちて死にかけておつたのをお主が『龍の涙』で治したからツバサは生きておるのじゃろ？」

「ああ、骨もぐしゃぐしゃでなんで生きてるんだって状態だったが、確かに人間だった」

それを聞いてクロガネが安堵したように息をつく。なら、虹の忌み子ではないだけじゃ、きっと別色の忌み子なのじゃろう、と微笑んでコウを撫でた。コウも笑い返すが内心穏やかではなかった。たしかに出会った当時のツバサは人間並の力、生命力、体力だった。しかし、コウが龍の涙を使う時には全身の傷がほとんど癒えており、後は大きな傷跡が治るのを待つだけというほどの再生力を見せたのだ。

答えを知らうにもこの取説は今の時点で知っていい情報しか寄越し



てくれない、下らないことは答えてくれるが、知るべきでない情報はがんとして教えてくれない。それは、俺達が知ったらツバサから離れてしまうようなことだからか？ずっと人間だと思ってた仲間が人間じゃなかったからって掌返すような奴だと思われてるってことか？

ふつつと込み上げる怒りに馬が怯え出したところでクロガネに抱き寄せられた。

「ゆつくりでいい落ち着くのじゃコウ、ツバサが言ってたのじゃ。

種族なんて関係なく自分自身を受け入れてくれたのが嬉しかったと恥ずかしいから口止めされてたがそれは覚えてほしいのじゃ」

「ああ……そうだったな。俺が受け入れたようにあいつも人間界の嫌われ者を受け入れてくれたんだよな」

馬車の窓からはしゃぐツバサを見上げた、何も知らないのか、知っててなお秘密にしたかったのか。ユカリと共に笑うその顔からは何も伺いしれない、しかし出会った時のツバサの言葉を思い出してどちらでもいいかと改めて思う。ドラゴンだと名乗ったあの時、ツバサは『相手が人間じゃなくてよかった』といったのだ。それは同じ人間ですら信用できない状況だったにも関わらず、自分を受け入れてくれたという事実。

たとえこれが問題を先延ばしにする逃げだったとしても、ツバサがツバサである限り俺はあいつと共にいよう。忌み子とドラゴンではなく心を通わせた相棒だから。

開いた窓から入った風がページをめくり、新しい文字が浮かび上がるが、コウ達の目に付く前に消えてしまう。それは、教えようとして躊躇って消す光景を連想させるものだった。

## ドラゴン会議 天使と人形と忌み子の生まれ

黒月村にて

ユカリの契約時に身体に負荷が掛かったのか絶叫し膝を付いたツバサ。心配性なコウがゆっくり帰ろうと馬車を使う事を提案し、一行が黒月村（初めの村）に帰りついたのはサファイアドラゴンを倒してから5日後のことだった。

そして夜、ツバサはリヨクの背に乗って帰る道中はしゃぎすぎたのか既に自分の部屋に戻り、ドラゴン達が残された。

「それにしてもツバサの頑丈さには呆れるしかないっすね、ホントならあつし達の契約は2つでも厳しいんっすよ？」

「人ならって注釈がつくけどな。ツバサの頑丈さは人間の枠を飛び越えてるから」

「コウの、契約者、皆、頑丈に、なる？」

「怪力になることはあつたのじゃがあくまで人間の枠内……ここまですべて顕著な怪力と強度の変化は見たこと無いのじゃ」

「ツバサ、混じってる血、問題なのかも？ヴァンパイア、スプリガン……」

「かもしれない、本来頑丈さは金龍の領域なんだが魔物の血が代わりを担ってるのかもな」

そう応えながらもコウは考えていた。いくつもの契約に耐えうるだけの素質、頑丈さ、ドラゴンとの相性のよさ、まるでドラゴンを集めて『恐ろしい力を持つ何か』を作る為に生み出された様なツバサ。昔神種族<sup>てんし</sup>の研究員達が神種族の犠牲を恐れ、量産計画の練られた『天使の血から生まれるホムンクルス（にんぎょう）』に酷似した特性を持っている彼。だが天使達の実験は一度も成功せず、『人形』

は人にすらなることなく死んでしまふ儚い存在で全て廃棄処分されたはずなのだ。

「そういえば昔、天使、人間に、ドラゴン、使わせようとして、『人形』の核、移植したって」

「あつしもそれは聞いたことあるっすけど……拒絶反応が酷くて使い物にならなかったらしいっすよ？」

「たえ使いものになったとしても人間の脆さから3度ドラゴンを使うだけで身体が耐えられん者ばかりじゃった」

クロガネはその光景を思い出したのか、陰鬱な表情で膝を抱えて蹲ってしまふ。慰めるように撫でながらコウはふと、取説の白紙部分を開く。神種族は人間を実験動物のように扱っていた、なら何故神種族の血が混じる人間、忌み子が生まれたのかと言う疑問が湧いたのだ。ツバサに関しての情報は出なかったが忌み子の発端についてなら……何処かに無いかとページをまくり続け、最後のページに目的のものを見つける。

「3度しか使えない人間が子をなすことで神種族の遺伝子を内包した血管が生まれ、ゆつくりと順応していった、だがやはり人間の血が濃く10回以上ドラゴンを振るえた者はいない。そんな中で先祖返りの様に神種族の血が色濃く出た者、契約に完全な耐性を持つ人間が現れた。それが神人……今の忌み子と呼ばれる存在である、か」

「つまり忌み子は意図せずして生まれた実験の副産物、と言う事かえ？」

「そう言う事だ。金龍ひーちやんがいないのが痛いな、あいつに直接聞けばツバサの頑丈さも解ると思うんだが」

「ツバサ、聞いて、みたら？九十九種、ドラゴン、武装か装飾品、でしょ？」

「あーひーちゃんだけは特別なんだ、あいつが元の姿でいたら一発

でわかるし」

「金龍だけいつも特別ってきくっすけどどういう事なんっす？それに、取説に金龍の居場所は出ないんっすか？」

手を上げて質問するユカリにあるページを開いて見せる。そこには簡潔に『灯台下暗し』の文字。

コレではさすがにわからないだろ？と苦笑して取説を閉じた。

「俺達が武器や装飾品、加工された人工物が核であるのに対し、ひーちゃんは天然種ドラゴンの「九十九種じゃ（ないのかえ・ないんすか・ないの）！？」……言葉の途中で突っ込むな。金龍の屍骸を核に生まれた九十九種だ」

「あつしらのように武装は出来ないって事っすか？」

「いや、ひーちゃんは義肢の形態をとって使われるんだ。ツバサの体を見たときは特にそれらしき跡はなかったからツバサが持つてるわけでもなさそうだし……ひーちゃんが化けてるって可能性もない、ドラゴンはドラゴンを使っても契約効果は現れないからな」

「接合部が滑らか過ぎて、ということはないのじゃろうな？」

「無いな、傷跡は龍の涙で消えちまったから何処にも傷跡すらない、それにあいつが今まで喋らないわけがない」

「ひーちゃんも、気になる、けど、あとの2人も、早めに、見つけないと」

リョクが言う二人、セイロウとアカトラの行方は現状魔界にいらとしか手がかりがない。ドラゴン達の本当のオリジナル、ある意味俺達の親ともいえるひーちゃんは人間界に「心配性な息子に顔を見せに行った」とシロガネから聞かされた。

そうこうしてるうちに考えるより行動派なクロガネがこれ以上は無理だと諦め、不貞腐れたように頬杖をつく。

「呆れるほどにわからんことだらけじゃな。ひーちゃんの行方、赤と青のドラゴンの行方、ツバサの謎、肝心なときに取説も役立たずなのじゃ」

「もしかして金龍の息子ってツバサじゃ、ないっすかね」

「ツバサ、金龍の関係者、なら、頑丈でも、おかしくない。人間でもあるから、ドラゴンの契約効果、でる」

「まあ正解だったらいつも諦めて記述してくれるだろうが……」

開いたページには「二人に血縁関係はない」という簡単な回答が書かれているだけだった。……いや、うつすらと続きがある。

「あたらずとも遠からず。ツバサはたしかに金龍の関係者である」

「…今はこれだけ分かれば上出来か。アカトラとセイロウはアリアにでも聞いてみればいいだろ」

「なら今日のところはもう寝ておくがいい、リョクとユカリはツバサの部屋じゃ」

「「それじゃ、おやすみ（っす）」」

コウとクロガネは微笑んで年少組を見送り、自分達もベッドに入った。明日はまた少し忙しいことになりそうだ、と笑って部屋の電気を消す。

「そっいえばツバサと出会って10年たつが、あんまり成長してねえな」というコウの呟きは夜の空に吸い込まれていった。

## メモ帳2 未だ見ぬ龍と仲間入りした龍とその他

### 天然種と九十九種

ドラゴンは大きく分けて2種類あり、コウ達のように物から変化したものを九十九種、自然に進化してきたものを天然種と呼ぶ。天然種は大抵人嫌いであり九十九種は人間に恐れられる事を嫌う為、どちら人も人間からは離れて暮らす事が多い。九十九種は人型や武装型になって人里に紛れている事もある。

天然種は血の繋がりで兄弟となるが九十九種はカテゴリーごとに兄弟に分類される。シロガネ・リヨクは魔法の補佐、ユカリとコウは領域指定タイプである。

### 共鳴発動

『相性のよいドラゴンと使い手がシンクロ率を上げ、本来よりも強力な効果を得るものである』が、ドラゴンとドラゴンを共鳴させて使う時にもこう呼ばれる。今のところリヨク・シロガネ・コウの限定召喚とクロガネ・ユカリ・コウの重力結界が確認されている。

ドラゴンによっては高いシンクロ率の時のみ使える力があると言うが今のところ出番は無い。

### ブレス

天然種の魔力を変換した直接的な攻撃の息吹とは違い、九十九種は対象本人またはその得物にかけて特殊な効果を付加する祝福である。あくまで祝福なので全ての九十九種が、期待できるようなブレスを持つわけで無い事に注意。

ユカリ（あつし／あんた）

種族：ドラゴン（紫龍）

形状：翼

能力：重力の変動

前マスターの娘（ユリ）を人質に取られ、魔界を荒らし回る街食いハンニバルとして良いように使われていたがツバサ達によりユリと黒幕による狂言だったと発覚。「教育的指導」を済ませた後牢屋に入るつもりだったがアリアの独断的な判決とツバサ達の誘いにより仲間入り。紫髪・紫眼に紫のマントと翼があるのが特徴。翼は自前だがマントは兄であるコウの真似をしたもの。

契約効果は「遠視・平行感覚の強化」

ハクオウ（私ノ君）

種族：ドラゴン（白龍）

形状：脚防具

能力：空気を固定する

サファイアドラゴンに襲われた村でリヨクが介抱していた人というかドラゴン、この作品では珍しく丁寧に喋る仲間。雪のような白髪に病的に白い肌が特徴。薄着一枚で吹雪の中に出ようとするくらいには寒さに強い。現在はリヨクに自分を呼び出す為の笛を渡し、村の復興作業に勤しんでいる。なおツバサ・ユカリとは未だ面識なし。契約効果は「魔力を使わずに風を操る」

アカトラ（アカトラ様／おみゃー）

種族：ドラゴン（赤龍）

形状：腕輪

能力：手に持ったものに魔法を纏わせる  
魔界のどこかにいることしかわかってないドラゴン。赤髪・赤眼・猫のような耳と尻尾をもち語尾に「〜にゃ」が特徴。綺麗な物やお宝が大好きで盗賊のように忍び込んだり、豪快にセキュリティをぶち破って進んだりと目的の為なら躊躇わない所がある。ただしあくまで見るのが目的であって一度じっくり見たら飽きたように別の物を探しに行く。最近盗賊の都市で赤い獣人を見るようになったとい

う噂があるが……？

なお、大抵のセキユリティが彼女の前では無効化される。コウの虹の鱗がお気に入り。

契約効果は「聴力強化」

ひーちゃん（僕／君）

種族：ドラゴン（金龍）

形状：金龍の骸・義肢・世界に存在するあらゆる物

能力：光を操る

九十九種の親、自然発生した本当の意味でのオリジナル九十九種ドラゴン。ひーちゃんをもとに天使達がコウやクロガネのような人工物からできた九十九種が生まれた。魔界にいたらしいが「心配性な息子に会いに行く」といって人間界に出た以降の消息はつかめていない。

17歳ほどの少年の姿で金髪に金の瞳、ローブを好んで着ていたらしい。得意武器はハリセンだったとか。

契約効果は「生物の枠を超えて頑丈になる」

セイロウ（私／貴方）

種族：ドラゴン（青龍）

形状：ナイフ

能力：暗視

人型をとっていたがらないドラゴン、変身はできるが自身の能力の特性上ナイフのままでいたほうが都合がいいのだとか。人型時は青髪・青眼、青いドレス姿、語尾は「ですわ」。現在魔界のどこかにいることは判明しているが詳しくはわかっていない、とある国のトーナメントの優勝賞品が青い刀身のナイフという噂があるが……？

魔界編最後の味方ドラゴンであり、アリアとツバサが予想していた人の体をのつとる能力を持つ……のだが本人はあまり使いたがらない為緊急回避に手を貸す時に使われるくらいである。



契約効果は「気配遮断を会得」

## 予告1 赤と塔と盗賊の町

そこは魔界のある所、治安が良いとはお世辞にすら言えない都市。ここにいるのは盗賊だけで盗みや殺しなんて日常茶飯事、相手のものを盗んでうつぱらう事すら当たり前。そんな都市の中央部に、この町が出来た原因とも言われる宝が眠る塔が聳え立っていた。塔の前に立つのは赤髪の少女。猫の様なつけ耳と尻尾をつけ、いや、尻尾が機嫌よさそうに揺れているから自前のような。少女は塔を見上げて不敵に笑う。

「にやつはっは、このアカトラ様を相手にどこまで梃子搦らせてくれるかにゃー？」

少女も盗賊なのだろうか？ソレにしては堂々と塔の正門に向かっていく……数秒後、「お邪魔しますにゃー」という言葉と共に正門が”消えてなくなった”。塔内の警備が非常事態を受け慌しく活動を始める、至る階の至る所でセキユリテイのトラップが起動し盗賊を逃がしまいと待ち構えているようだ。

だが無駄だった、少女が進む順路をなぞるかのようになり、爆発やカマイタチが塔を突き破って空へと舞っていくのだ。あの様子ではセキユリテイを破壊しながら進んでいると見て間違いない。

正門が消失してから30分後、アカトラは最後の階段を上っていた。

「まったく、無駄に高いところにあるにゃ。トラップはへちよくせににゃー……」

この階段を上がれば目的の物が見えると自分を鼓舞してようやく最後の一段を上りきる。……目の前に巨大な扉が聳え立っていた、ご丁寧にも巨大な鍵付の。

「ここまで来させてとどめがコレとはにやー……」

とりあえずこじ開けようとドライバーを取り出し扉に触れた瞬間、アカトラが扉を蹴って背後に下がった。一瞬前まで彼女の頭があった所を火炎弾が通り過ぎる。どうやら不用意に扉に触れたものへの洗礼らしい。階段の踊り場に着地したアカトラが不機嫌にドライバーをしまいながら再び扉の前に戻る。

「出来る事なら壊さずに潜り抜けてやるーかと思っただけにやー……  
そっちがそういつつもりならアカトラ様も手加減しないにやー」

今度はナイフを取り出し、扉に向けて構える。扉をナイフで破壊できとも思えないが彼女には奥の手があるようだ。揺れる尻尾と同調するように全身から魔力が溢れだしナイフに流れ込んでいく。

「赤龍のアカトラ様、舐めてもらっちゃ困るにやー」

赤い瞳を爛々と輝かせ、閉ざされた扉に魔力の込められたナイフを振るった。

ナイフが扉に触れたと思った途端に扉が”消し飛んだ”。何をしたのかわからなかったが、これが彼女の九十九種としての力なのだろう。自分が起こした結果に満足そうな顔でお宝の在処へと入っていくのだった。

もし、アリアがこの場にいたならば今のが『マジックバレット』  
MB死に至る病』だと  
気づいただろうが。生憎この場にそれがわかる者はいなかった。

## 予告2 青と賞品とトーナメント

ここは魔界のとある国、ある意味で特別な都市だ。と言うのも魔界に点在する都市は魔物と人間の交流が少なく、どうしても種族間の壁が目立つ部分がある。だがこの都市では人間と魔物はもちろん混血の子供でも受け入れられているという極めて稀な場所なのだ。

この都市には暫定的に国王と言われる長がいる。ざっくり言うと纏め役と魔王への繋ぎ程度の仕事だが。そして場面は国王の宝物庫へと移る。宝物庫をうろつく二人の男、別に彼らは怪しいものではない。今度開かれるトーナメントの優勝賞品を取りに来るよう命じられた、宝物庫担当の警備兵なのである。

「しかし、今度のトーナメントは誰が優勝するんだろうな？」

「さてな、俺はここから今回の賞品を引きずり出せば帰って良いって言われてるし興味ない。家族が待ってるしな」

「はいはい、マイホームパパな事で」

「それよりも気になるのはこの賞品の方じゃないか？こんな刀身が蒼いだけのナイフ、何の意味があるんだよ」

「国王が選んだんだから仕方ないだろ、なんでも魔王様が『こんな所にあつたのかよ、譲ってもらうわけにはいかないよな』っていつて今回の賞品としてだす事になったから」

「魔王が最強なんだから参加して堂々と持っていつて欲しいってことか」

警備兵は首を傾げながら優勝賞品を宝物庫から運び出す。このあと、このナイフを巡ってトーナメントに旋風が巻き起こるのだがこの時は誰も予想できなかった。

そのナイフが九十九種ドラゴンであることはおろか、持った者を操る力があることすら知らないこの国では当然と言えば当然である。

しかしアリアの耳に入った以上、ツバサ達の耳に届く日もそう遠くは無いだろう。

……あの魔王が素直にこの都市にあった、なんて教えるとは思いがたいが。

誰も知らないあの日のこと（前） 人間界と金龍と封印の谷

魔界からはるばる人間界にやってきてみたのは良いものの、心配性な息子はこの谷に封印されたと聞いた。あの子のことだ、人の近くで人に嫌われる事を怖がって自分から封印されたんだろう。あの子の力なら本来封印なんて『魔法』が効くわけが無いのだ。人間が好きだから、嫌われるくらいなら恐怖の象徴である自分を封じて安心させたい、か。

「気持ちには解らなくも無いけど人に紛れる事を恐れてたらいつまでたっても嫌われたまんまなのに」

封印された場所を探してフラフラと谷底を歩いていると不意に岩が崩れるような音がした。どうせ崖の上が崩れた程度だろうとたかを括って探索を続けようとしたがその動きを止めざるを得なくなる。どしゃっ……と水っぱい音を立ててボロボロの袋のようなものが降って来たのだ、いや、所々赤黒く染まっているからコレはマントに身を包んだ人間かも？

確かめるように袋を剥ぎ取ると、転がり落ちてくる途中で尖った岩に引っ掛けたのか全身が傷だらけであり、その2割が致命傷と言える域に到達していた。

「これはひどい……僕でも流石に助けられないかな」

一応の止血をしながら応急処置として包帯を巻いていくが、既に流れ出た地が多すぎて手の施しようが無い。諦めて楽にしてやるべきか、それともいっそのこと……。

はっと周囲を取り囲むような気配に気づいて顔を上げる。血の匂いに誘われたのか唸り声を上げながら包囲の輪を狭める影狼達がいた。

焦っていたとはいえ『死にかけた者あらば即食いに来る』と言われるこいつ等が近づいてくるのに気づかなかったとは情けない、イラついて軽く舌打ちし何処からかハリセンを取り出した。

「人が死ぬかどうかの瀬戸際なのに……そんな邪魔したいなら仕方ない、少しかだけ相手をしてあげる。ただし僕のハリセンは死ぬほど痛いよ？」

最早殺気と言えそうなほどの怒りを込め、リーダー格だろう影狼にハリセンを投げつける。紙で出来ただけのハリセン何を恐れることがある、とでも言うように避ける素振りすらしなかった影狼、だがソレが命取りとなった。次の瞬間、ハリセンがありえないほどの硬度をもって影狼を粉碎したのだ。

「金龍プレスの祝福はどんなものでも望んだように硬さを変えられる。岩を綿のように崩したり、紙を金属のようにしたり、ね。とりあえず威力はわかってもらえたとおもうけど、まだ掛かってくる気はある？」

新しく取り出したハリセンを振りかざして影狼達を威嚇すると怯えたように包囲の輪を崩して逃げていつてしまった。根性が無いのか、野性の本能で解ったのか……違う。

「なんでひーちゃんがここにいるんだよ？」

「はるばる魔界から心配性な息子を見にきたんだよ」

いつの間に現れたのか虹色の鱗を持った龍が頭上にいたのだ、この虹龍に怯えて影狼達も尻尾を巻いて逃げ出したのだろう。人型に変化して僕の隣に着地する息子コウ。人型の時は僕よりもずっと背が高い彼は、虹の鱗を残した頬を曲げて懐かしそうに笑った。

「こんなところに封印されてるって言うんだから驚いたんだよ？」

「そりゃ悪かったな、といっても誰かが崖を転がり落ちてく時に封印の札を剥がしておっこちたみたいだが」

「多分このこじやないかな？さつき転がり落ちてきたんだけど……  
ってそんないきなり号泣しなくても良いじゃない」

転がり落ちてきた少年を見た途端号泣しはじめた息子に狼狽する。  
こんな涙もろい子だったっけ、と首を傾げているとコウが頭を振って少年を抱き上げる。

「こいつが俺のパートナー……虹の、忌み子みたいだな」

「え、ほんとにいたんだ？『全ての武器に適合しうる』虹の忌み子なんて」

「失敗作ばかりで廃棄されたらしいが、人形の核を埋め込まれた人間の血が長い年月をかけてこんな出鱈目な適合性を持ったんだろ」  
「ジャイアントが忌み子狩りしてるのはこの子を探してるんだろ  
うね」

「……こいつはここで死なせてやった方が良いんだろうか」

それは解らないけどと前置きして、少年についたコウの涙を見て続ける。

「龍の涙を使うにしても半端に使ったら苦しみを長引かせるよ。包帯巻くときにわかったけど全身いかれてるし、血液が足りなすぎる」

その子は諦めた方がはやくも、と言いかけた所で三人目の声に阻まれた。

「ねえ……そんなに泣かれると……死ねないんだけど」



誰も知らないあの日の事（後）      ツバサと涙と血の契約

「まだ喋れたか、生きてても辛い目にあってるのか？」

「憎まれて、殺されるなら……よかった、でも僕が死ぬから……泣かれるのは、嫌なんだ。死ぬ時は……孤独で、誰にも関わらずに……悲しみが無いまま死にたかったのに」

少年は血を吐くように、と言うより実際に血を吐きながらそう言った。誰も信用出来ず、命を狙われ追い掛け回され、誰もいない崖に落ちて死にかけてなお、コウが泣く事を嘆いている。

……この子になら、コウを任せてもいいかな。それに息子のパートナーを殺すわけにもいかないね。

「コウ、僕の血を使おう。天然種の龍の血を浴びれば不死身になるとか言う噂は知ってるよね？」

「血の契約だっけか、龍が相手を強いと認めて自分の不死性の一部を分け与える、とか」

「今の僕だと九十九種としての契約効果も出ちゃうだろうけど、頑丈になるくらいなら日常生活に問題は無いしね」

「……なんだろう、僕のあずかり知らない所で化物になってく予感がするんだけど」

「君はコウが泣くのが嫌なんですよ？君が死んだらもつと泣くから諦めて生存しなさい」

「まあそういう事だ、化物になっても生きてて欲しいから、諦めてくれ」

コウの涙に触れた部分からゆっくりと傷が消えていく中、少年はきよとした顔で生きてて欲しいなんて初めて言われた、と涙を流す。僕はそんな二人をせかし『龍の涙』を発動させる。それを確認

してナイフを出した。コウの魔法が終わったら僕の血を少しだけ分ける、やることとしてはそれだけ。でも僕達にとってはそれ以上の意味を持つ。

もともと金龍を元に作られた九十九種は、金龍の血に惹かれやすい子供が親を求めて彷徨うように九十九種ドラゴンは金龍に關係したものを好むのだ。つまり金龍との血を介した契約は、他のドラゴンと強制的に関わることを決定付ける事に等しい。

ある意味呪いをかけるようなものだね、と呟いて少年の傷口とナイフでつけた自分の傷口を触れさせる。あとはお互いの血が交じり合えばソレで終わり。血をぬぐってコウに向き直る。

「これで大丈夫、あとはしばらく安静にさせておけば大丈夫」

「そうか……よかった」

「簡単に言っと、僕はどうなったの？」

まだ目立つ傷が治りきっておらず顔をしかめながらこちらに聞いてくる少年。

「ヒトとしての君は死んだことになるかな、金龍もどきになったよ  
うなもんだしね」

「じゃあ、龍になった……ってこと？」

「ソレも厳密には違うかな、龍のような特性を得た人の様なもの、  
って言うのが正しくなると思う」

「よくわからんがひーちゃんの祝福と頑丈さが少しだけ移ったって  
事か？」

「それでも人間から見たら大幅に頑丈になってるけどね」

二人とも苦笑してる。まあそれも当然、少年にとっては死に欠けた

ら人間やめさせられましたと言っ事だし、コウにとっては親が少年を助ける為だけに一度もした事の無い血の契約をしたのだから。

「まだ傷が塞がりきってないからしばらく動いちゃダメだよ……えーと虹の忌み子君」

「ツバサ、だよ」

「じゃあツバサって呼ぶよ。僕はひーちゃんって呼んでね、そっちのでっかいのはコウ。」

で、話を戻すけど今コウの魔法は身体の内側を優先的に治してるから外傷が治るのはもう少し先になる、治るまでに動いたら傷口が開くから気を付けてね？」

「わかった、ところでひーちゃん」

「何かな？ツバサ」

必要な魔法の術式を編んでいると、いまだコウに抱えられたままのツバサがこちらを射抜くような目で見てくる。そんな敵意を向けられる事したっけ？してないよね？

「その手に持つてる禍々しいの、何」

「……なんで魔法の術式の時点で見えるの君は。契約の副作用で魔眼の回路でも開いたのかな」

「ひーちゃん、禍々しいって一体何の魔法編んでるんだよ……」

コウも呆れたように半目でこちらを見てくる。いや、だって……ねえ？軽く二人の額に触れて編み上げた術式に魔力を流し込む。

「ちょっと二人の記憶を書き換えようかとね。僕と契約してるなんて知られたらジャイアントから真っ先に狙われるし、忘れといった方がいい」

「俺まで巻き添えかよ」

「君はツバサの傍にいる事になるんだから二人の間で齟齬が起きたらばれちゃうじゃない。だからコウも記憶操作するの、レジスト禁止」

「はいはい、あんまり過剰に書き換えないでくれよ」

「それぐらいは心得てるよ」

触れた指先から魔力が漏れでて淡い光を放つ。3人はそれを眺め、もし記憶が変わってコウを警戒したらどうするのさとツバサが笑い出す。君たちならきつと問題ない、そう笑い返して再び真剣な表情で二人を見た。

「……覚えてられないだろうけど僕から伝えられる事は二つ。

まず僕との契約がある限り、他のドラゴンと契約したら君と言う概念がどんどん頑丈になる。ただしあんまり増えると『ツバサ』の概念が固定されて傷つく事は愚か歳を取る事すらとまるから気をつけて。

二つ目はコウと契約した場合、コウの契約効果で『身体が耐えられる限りの怪力』になる。それだけなら問題ないんだけど僕の効果と合わせたら、頑丈さに比例してどんどん怪力になるからね。

……コウ、この子をよろしく。ツバサ、コウを頼んだよ。僕はいつでも君達の傍にいるけど、滅多に出てこないからね」

二人が頷いて、同時に意識を失う……魔法が完成したみたいだ。きつと魔法に耐性があるコウの方が先に目を覚ますだろうけど、ツバサの傷を見てまた泣き出すかもなあ。ほんとに、心配性で泣き虫な子を持つと大変だ。

金龍はくすくすと笑って姿を消す。後に残されたのは倒れた二人と

コウ、そして……風に揺れる取扱説明書だった。

## 忘れちゃいけない事 門と魔王とやつあたり

……ずっと、大事な事を忘れてた気がする。忘れちゃいけないことなのに忘れてた。初めはすぐに人間界に帰ろうとしてたのに、気づいたら魔界でクエストをこなしてドラゴンを集める旅になっていた。ナツも待つてるだろうな、早く人間界に帰らなきゃ。

「……と考えていた時期が僕にもありました」

「いや、そんなじと目で俺を見られても困るんだが。俺が壊したわけじゃないし」

善は急げとアリアに人間界への界門へ連れていってもらおうとしたツバサ、しかし待っていたのは界門が破壊されて復旧にはしばらくかかると言う衝撃の事実だった。恨みがましくじと目でアリアを見るもソレで解決するわけもなく

「ツバサ達、魔界、ドラゴン集め、来た、思ってた」

「そうっすよねえ、集めようとしてもこんなハイペースでドラゴンを見つかる人なんて今まで一人もいなかったっすよ？」

「わしは単純にクエストにいつてるうちに忘れておったのじゃ」

本来ドラゴンは気のあつた者しか仲間にならず生涯に2人仲間にするだけでも多いらしいのだが、魔界に来て半年も経たないうちに黒・緑・銀・紫・白の九十九種を仲間にいるツバサ達のペースは異常と言えた。……コウが所在を知ろうとしただけで仲間を増やそうとしたわけではないから全て偶然の産物なのだが。

「仕方ないさ、ツバサ。しばらくクエストで稼いで帰るか？稼ぎがあつて悪い事はないだろ」

「そうだね、あーあ、せっかく想いだしたのに……とりあえず今度は何処に行こうか」

「ああ、そう言えばこの間青龍見つけたぞ」

「……それを早く（言え・言ってよ・言うのじゃ・言えっす）」

「……」

「唐突に呼び出されて界門まで来たから忘れてたんだよ」

うつと言葉に詰まるツバサ。確かに宿屋で目が覚めた途端に焦ってアリアを呼び出したから言ってたとしても聞く耳持たずにいただろうからあまり強く言えないのだった。

アリアはそんな様子を見て苦笑し地図を取り出す。

「すぐ近くの都市なんだが、そこで一カ月後に都市内最強トーナメントが開かれるんだ」

「まさかその賞品っていうんじゃないよね？」

「ビンゴ、そのまさかだ。一応譲ってくれないか頼んだんだが国庫からそうほいほい物をあげるわけにはいかないらしくてな。トーナメントの商品にするよう説得するのが精一杯だった。お前なら楽勝だろ？」

「楽勝かはわからねえけど何とかなるだろ」

「寧ろなんとかする、が正しいとおもうつすよ？」

「青じやつたら自分から正体を見せるとは思えんのじゃ。勝ち取るしかあるまいな」

アリアが現在地と目指すべき都市を指し示し、移動にかかる大体の日数を教えてくれた。まっすぐにいけば空を飛んで一日、街道沿いなら馬で数日、徒歩なら1週間。俺が連れていっても良いけど毎度一瞬じゃ旅の楽しみがなくなるしな、と笑ってついでのように修行が出来そうな森の情報もくれた。

「ワイバーンとかが群れてたはずだが今のところクエストは無いはずだ。暴れん坊だからお仕置きに痛めつけてもいいし修行にはもってこいだろっ」

「そうと決まれば早速いくか。あ、アリア、門が直ったら連絡くれ。あと修行で遅くなりすぎたら送ってもらうかもしれないから、そこんとこよろしく」

また一カ月後、そういつて僕達の新しい旅が始まった。

何気なく開いたコウの取説には『必ず呼び出すことになるから呼び鈴の紛失に注意』と書いてあった。また何か起きるんだろうね、まあ僕達らしいといえはそこまでけど。……ところでこの取説最近やけに人間臭くない？

「サキを返せええええええ！！」

「返して欲しかったらここまで来て俺を倒してみろよ、ほらどうした、お猿さんには地べたをずるずる這う事しかできまちなかー？ヒャッハッハッハ！」

魔法も使えぬ身で兵士でもなければ剣士でもない、しかも武器はただの棒切れ。少年のそれは自殺行為に等しかった。いや、ただの犬死としかいえない愚かな行為だった。気紛れに相手が降りてきても



ブレスの一発も喰らえば消し飛んでしまっただろう。  
ワイバーンが地を這うだけのサルと嘲笑う声が響き、少年が悔しさに唇を噛んだその時。

……それは現れた。

唐突に聞こえた無数の風切り音に反応しワイバーンが高度を下げる。少年からは意味の分からない行動だったが次の瞬間、前の一瞬までワイバーンがいたところを掠めるように岩石が通り抜けたのだ。ワイバーンと同じくらいの大きさの岩石だった、つまりアレを投げたのは相当な怪力を持った化物という事になる。……空にそれらしき影は無い、なら、その化物がいたのは

『ツバサ、外れたみたいですよ』

「やっぱり遠距離じゃだめみたいだね、直接殴った方が早そうだ」

『ワイバーンが可哀想じゃ……』

『でも、さっきの、やりとり、あいつ、倒しても、問題ない』

『まあ肩ならしにはちょうど良いんじゃないかねーか？』

岩石が飛んできた方の茂みから飛びだしてきたカラフルな装備をしたツバサと呼ばれた少年。

赤いマント、黒いガントレット、緑のモノクル、紫の翼、その全てから別人の声が聞こえた。

少年が腰を抜かして後ろに下がろうとするとツバサがこちらを向く、こ、殺される？！

わたわたと逃げ出そうとした少年を見てツバサは頬を掻いて声をかけた。

「あーそんなに怯えないでくれると嬉しいんだけど。大丈夫、僕はあいつを殴りにきたただけだから」

「な、殴りにつて……あんな高いところにいるのにどうやって!!」  
「こうやって」

軽く膝を曲げたと思った次の瞬間、少年の視界からツバサが消える。別に魔法を使ったわけじゃない。ちよつと勢いよくジャンプしただけのこと、ただのジャンプとは勢いが桁違いだが。

「必殺、ただの踵落とし!!」

弾丸のようにワイバーンに接近します。膝を打ち込む、相手の翼を掴み体を回転させてそのままギロチンのような……踵落とし!

何かが割れたような鈍い音をさせてワイバーンが飛行を止め、一人と一匹は地面へと落下していった。落下した所でぐしゃつと音がした気がするが少年は聞かなかった事にして落下地点を目指して走る。

「いやーまさか二撃程度で落ちるとは思わなかったよ」

「強くなりすぎて加減が出来ないのも考え物だな」

「まったく、心臓に悪いのじゃ」

「ぎりぎりまで重力操作が間に合ってたつす」

「ツバサ、やつあたり、あった、おもう。界門、壊れてたの、怒ってない」

少年はワイバーンと共に落ちたはずの人間が五体満足でぴんぴんしてる、よりも先に

「増えてるー!?!」

一人しかいなかったはずなのに落ちた後に5人になってた事に驚くのだった。

## 飛龍の山 誘拐と地図と毒

薄暗い密室、硝子の向こうには薄暗く、湿った大地が見えた。

降り注ぐ雨の音が響き渡る部屋で、少年と差し向かいに座るツバサが少年の顔にライトを当てて尋ねる。

「君にも、故郷にお母さんがいるんでしょ、なんであんな事をしたのさ」

「それは……男には無茶をしないとイケないときがあるんです」

「そう、じゃあカツ丼でも食べる？落ち着いて無茶なことだったと理解して欲しいんだ」

「……はい」

「御主等、遊ぶのは構わんのじゃが時間は良いのかえ、大方友達でも持つてかれたのじゃろ？」

唐突に部屋の壁が傾き隙間から顔を覗かせたクロガネが呆れたような顔で張りぼての壁を投げ捨てた。

クロガネに隠れるようにして少年の様子を伺っていたリョクが、ツバサに視線をやって小さな本を投げ渡す。小さな本、魔界の生物辞典に付けられた付箋のページはワイバーンについての項目だった

「ワイバーン、人間、不味い、言つて、中々食べない」

「じゃが腹を減らした馬鹿者が食う可能性もあるのじゃぞ、急に越した事は無いのじゃ」

「ワイバーンは俺あんまり好きじゃねえんだよな、ドラゴンの時は一々ちよっかい出してくるし人型だと舐めて掛かるし……何より鬱陶しいんだよな」

ワイバーンの項目を読み進めるツバサの後ろからコウが現れ、イラ

ついた顔で呟く。過去に何か一悶着あったんだろうか？

「焦らなくても取説に書いてるから大丈夫だよ、サキが攫われたからワイバーンに挑んだんでしょ？」

「え、ああそうだけど」

「じゃあなんでわざわざ取り調べたつすか！？」

「最近ユカリがリアクション要員になってる気がしてお兄ちゃん悲しいよ」

「事件が起こったからもう教えても良い情報になったってこともね、しっかり場所とボスが書いてたよ」

取り調べたのは少年を落着かせるためだよ、と笑いツバサは不機嫌なコウを宥める。これからワイバーンの巣に向かうというのに緊張感も欠片もない。いつも通り散歩に行くような軽い気持ちで終わったら何しようかとリヨクと笑っている。

「……ツバサ、普通の人間はこういう時我先に逃げるか見なかったことにすると思うんだが」

「誰かを助けるために人間じゃなくなってるならいいよ、見捨てるほうが僕らしくないでしょ？」

「確かにそうじゃな、普通の人間であり続けようとして自分を殺しては意味がないからの」

あきれるように笑っていたコウもそりや道理だ、とにかくと笑いコタロウを村に送り届ける班とワイバーンの巣に直接乗り込む班に分かれることを提案した。最大のアタッカーであるツバサが乗り込むのは当然として、さて、今回はどの組み合わせで行こうか……。

くじ引きの結果コウとクロガネがコタロウと一緒に村に帰り事情の説明へ、残りの3人がワイバーンの巣へ乗り込んでサキの救出に行くことになった。人数比はツバサが前回コウ、クロガネ、ユカリの同時使用で膝をついたため3人以上の使用は避けようとした結果であり、空を飛ぶ為のユカリと範囲殲滅に適したりヨクがお供をするのは偶然とはいえ適任だった。

もつとも、取説に言わせてみれば（書かせてみれば？）偶然ではなく必然だった、らしいけども。

「それじゃコウとクロガネに任せるからしっかりその子を送り届けてね？」

「うむ、任されたのじゃ。安心して倒してくるのじゃぞ」

「そうそう、ワイバーンには噛まれるなよ？この地方には毒性を持った奴がいるらしいからな」

クロガネが胸をたたいて任せろと言えば、コウがいつもの心配性を発揮する。そんなに心配ならついていけばいいのだが、くじを引く前に自分で今回は二人までと言い出した手前そうもできない。

送り届けてすぐに向かうにしても、ピンチならツバサが我が身を省みず全員装備でワイバーンに立ち向かう可能性があるため、大人しく留守番するしかないのである。

「了解、まあ僕達毒程度じゃ早々死なないと思うけどね」

「それでも、気を付ける、越したこと、ないよ？」

「死なないほうが厄介なこともあるっすからね、九十九種の場合はっすけど」

この時のユカリの言葉が意味することを、深く考えなかったツバサは後悔することになる。とはいえ、この時点では誰も知りようがないのだけだ。

今回の舞台となるのは火龍山脈。魔界の中でも凶暴な飛龍・火龍が多く住むといわれ、活火山や毒性のガスがうようよしているため、腕に自信がある者でもチームを組まねば通ろうともしない危険な土地、らしい。らしい、とは情報源がコウから預かった取説のみだからである。

「大抵の毒には耐性があるけどこのワイバーン達がどんな毒を持つてるかがわからないのが問題だね」

「あつしらにここの毒性ガスが効果薄いのはともかく、ツバサにも効いてないのは今さら突っ込まないっすよ」

「突っ込んだら、負け。ツバサ、体、頑丈。そう思っとく」

ツバサが取説に浮かんだ地図を頼りに先導に立ち、漂う毒性のガスを気に掛けることもなく一行は飛龍の巣を目指して進んでいくのであった。

## 龍をも倒す毒 ピンチと王と白き風

飛龍の巢にたどり着くまでは順調だった。……攫われた少女を探してるうちに先に飛龍達に見つかっただけで。蜂の巢でも突いたかのように大騒ぎになる飛龍の巢の一角、ツバサ達がとった行動は「逃げながら各個撃破して攫われた子を探す」だった。

結果から言ふなれば作戦は概ね成功したといえる。ただ一点、攫われた少女がいた場所に飛龍の王がいたことを除けば、だが。

「このようなところに客人か…皆まで言うな、主らの狙いは分かっておる、我らが元から大切な宝を奪おうというのだらう」

何かの魔法の残滓を感じて部屋に飛び込むと、そこにいたのは苦笑するように目を細めてこちらを見る飛龍王、そしてその足元でぐったりしてる少女。何があったのかはわからないが無傷ということには分かったので、改めて飛龍王に向き直る。目の前に侵入者がいるのに飛龍王はそれがどうしたといわんばかりの余裕でもってこちらを出迎えた。立ち上がって向かってくるわけでもなく、誰かを呼ぶわけでもなかった。ただ小さく「そうか、主らがきおったか」と呟いていた。

お互いすでに戦闘態勢だが、こちらは飛龍王の足元に少女がいるので動けない。助けてすぐに逃げるにも飛龍王が少女を庇うように尾を伸ばしている。

膠着状態、しかしただでさえ他の飛龍が僕らを探している、無駄な時間をとるのは致命的だ。

そんな時、口を開いたのはユカリだった。

「あんたは話が通じそうっすから一応聞くっす……素直に返してもらうわけにはいかないんっすか？」

「いかな、宝を奪う輩を退治するのがボスの役目だ」

「じゃあ、取引、しよう？他の、飛龍、下がらせて、僕達と、奪い合い」

「一番奥の部屋まで来たんだからボスを倒せばそれで終わり、それでいいでしょ？」

「ふむ、久方ぶりの客はなかなか面白い、唐突に入ってきたうえ物怖じせずに取り引とは……よかろう、ただし主ら3人も龍の端くれ、わしらも3人でならばその勝負を受けようぞ」

飛龍王が目を細めて小さく笑った気がした、そうなるのを待っていたかのように。でも何か企んでいるという気がしないのはやはり王としての威厳なのだろうか。

「勝負は簡単だ、全員がギブアップするか死亡で負け。それでよいな？」

「もちろん、ほんとに話が分かる相手でよかったよ」

「無駄な、戦いは、避けられた」

「問題は最強と戦うことっすけど、あつしらなら何とかなるっすよね」

ふん、そう簡単にやられはせんぞ、と飛龍王が笑って二匹のワイバーンフレアを呼んだ。

どちらも他のワイバーンと比べて少し小柄（といっても人間と比べたら相当でかい）だが、フレア直々の指名なのだ、何か隠し玉があるとみていいだろう。

「それじゃあ、始めようか！！」



「えと、コウさん、クロガネさん……？」

「どうしたコタロウ？流石に村までくるほど飛龍も馬鹿じゃないから心配ないぞ？」

「それに突っ込んできたとしてもわし等がある、案ずるでない」

「あの、それよりもあの3人は……」

村はずれの一軒家、コタロウ少年宅に通された二人。ツバサ達が心配でソワソワしてる二人よりも、輪をかけて落ち着かないコタロウに苦笑するクロガネ。

だが、コタロウ少年は救助に向かった3人が飛龍に挑むことを危惧していたようで遠慮がちに大丈夫なのかと聞いてくる。

「確かに見た目はただの子供だが、今いる中で空中戦になるならあの組み合わせが一番いい」

「飛龍は障壁を使わんのじゃ、わしの出番はないじやろう。それに、コウの魔法障壁も同じじゃな」

「火炎程度ならあいつら蹴り飛ばすしな。ただ問題があるとすれば」

「あるとすれば……？」

首をかしげてコウを見つめるコタロウ少年に、無性にこみ上げる笑いを無視してコウは続ける。

まず、と言つて人差し指を立て真剣な表情で告げた。

「今回の面子は素直な奴らだから、絡め手が来ると弱い」

「ほう、例えばどういった事態じゃ？」

「単純な強さで言うならツバサ達の方が強い。だから今頃飛龍王は倒されてるだろう」

「ええ！？まだ3時間たつてないのにもう！？」

「それだけ桁違いの強さなんだよ俺達ドラゴンってのは……言い方を悪くすればパワーバカだが。」

で、続きだ。多分飛龍王は自分が毒性を持ってないから毒性の強い奴をお供として連れてきてるはずだ。…そいつ等は多分始めにツバサの蹴りでやられたふりしてツバサが飛龍王を倒した後、気が緩んだところで」

「後ろからガブリ…か。しかしツバサならきかんのではないかえ？」

「ツバサの頑丈さでもまったく通らないわけじゃない、それにツバサよりも狙いやすいのがあるだろ」

「あの、紫のお姉さん？」

「そのとおり、多分リヨクならシロガネから鍛えられてるし直前で気づく。だがユカリは鍛えるやつがいなかったからな」

人間界に行かないで鍛えといたらよかったか…とたればを語っても今更だ。

「まあ、あくまで起きそうなこと。だから起きるとは思わないが、というか起きてほしくない」

「うまくやってくれると信じるしかないのじゃな」

その頃の3人は悲しいかな、コウの予想通りの展開に陥っていた。ものの見事に絶壁に叩きつけた2匹のうちの1匹の飛龍が、フレアの気絶を狙って奇襲をかけたのだ。

飛龍の王が負けたという話は恥、あつてはならぬことならば、勝利した者を王が知らぬところで消し去ればいいのだと、毒の滴る牙で無防備なユカリに襲いかかった。

ぎりぎりで気付いたのか避けようとするも牙が肌をかすめ、その小さな傷から毒が回って全身が焼付くような激痛が走る。あまりの痛みに倒れこむユカリ、それを庇うように立つリヨク、そして飛龍と一人対峙するツバサ。

「リヨク、急いで解毒を！見損なった…いや、思った通りっていいのかな？翼あるトカゲ君」

「強ければいい、それが魔界の掟だぜ？それに俺達は降参なんて言っていないしな」

「そう、自分達の王が負けを認めても自分は勝てると…こんな卑怯な手を使ってでも勝てばいいっていうんだね？」

「正々堂々に拘るやつほど……魔界じゃあ早死にするぜ？」

飛龍が軽く息を吸って火炎弾を打ち出せば、ツバサは踊るように蹴りや拳で打ち砕き、リヨクは流れ弾からユカリを守るように火炎弾の流れを操ってそらす。ツバサが隙を見て反撃しようにもサイズの差がそのままリーチの差となる上、有効打を与えられそうな頭部にはユカリの力がなくてはまともに到達すらできないだろう…じり貧だ。

「あつしが、不甲斐無いばかりに……」

「気が、散る、黙ってて。ツバサも、頑張ってる」

手出できないことにイラついた声で言うリヨクと激痛をこらえつつ血を吐くような声で呟くユカリが涙を流していた。

死なない方が逆に厄介なこと…それは痛みや眠りで行動を封じられることである。強力な毒なら人として死に武装の状態に戻る、だが、生半可なものでは強烈な痛みや眠り、麻痺となり行動を封じられてしまう。この状態では武装に戻っても万全の能力が使えない。龍の強靱な生命力が今回は仇となっている。

一心不乱に飛龍と戦うツバサ、毒による激痛で苦しむユカリ、二人に比べ冷静に事態を眺められるリヨクも葛藤していた。短時間で解毒ができるのか、例えばそれができてもツバサがそれまで持つのか、

消耗しすぎて僕等を使う余裕があるのか、そんなことがぐるぐると頭を巡り、焦りだけが加速していく。

一つだけ、この状況を打破できる可能性があった。でも、ツバサがそれを許すとは思えない。

「ユカリ」

小さく、聞こえるかもわからないほど小さく呟いた一言に、リヨクを見上げるユカリ。その眼は決意に満ち溢れていた。

「わかってるっす…あつしを殺せ。あつしの紫翼さえあればツバサも対抗できるっす」

「ツバサに、嫌われるかも、知れないよ？」

「あつしがやれって言ったんっすよ言われるがまま仕方なくっす、だから大丈夫…」

激痛をこらえて無理やり立とうとするユカリへ、ツバサの罵倒が降る。

「そんな相談してる暇があつたらさっさと解毒！僕だって生身でいつまでも持たないんだから！！」

それに、僕は皆を道具じゃなくて家族だっと思ってるんだ。復活できるからって進んで殺したいなんて思わないの！！」

「で、でも…」

「余裕あるな！隙だらけだ！！」

二人に気を取られたツバサに、絶好のチャンスと見たのか空中から巨体を利用したボディプレスをぶちかます飛龍。

大地に叩きつけられ、その巨体に押しつぶされたツバサを啞然と見ることしかできないリヨク。

信じられないというように首を振ってツバサの名を叫ぶユカリ。

…戦況は絶望的だった。

「という感じでピンチになってる可能性もあるが…」

「……それはわしらがいかんでいいのじゃろうか？」

「つ、ツバサさん死んじゃうんじゃない？」

コメカミを押し揉むようにしつつため息をつくクロガネと慌てふためくコタロウを見て

苦笑しながらコウは続けた。

「大丈夫だ、今はいい風が吹いてる……」

「風ぐらいいつだって吹くじゃないですか！！心配じゃないんですか！」

「…ああ、確かにこのいい風なら飛龍の巣にも届くじゃろう」

クロガネも気付いたのか微笑んで空を見上げる。自分達ではいけなくとも遠い遠い地にいるもう一人の仲間がいる。

「それに、あの堅物とツバサのことだ。仮定した不意打ちなんぞしようにもんなら待ってる結末は一つ」

「不倶戴天（ってな・じゃな）」

「つつ~~~~~おおおおおおおおお！！」

最初は唸り声、続いて気合のこもった叫び声とともに飛龍の巨体がぐらりと揺れる。ゆつくりと地面と飛龍の間に隙間ができ、飛龍を持ち上げるツバサが姿を見せた。ところどころ砂埃や滲んだ血で汚れてはいるが、まだ力強い瞳から見てその心は折れていない。

「流石にこのセリフ言わずに倒れてらんないでしょ。フレアは堂々と真つ向勝負してくれたから言わずに済んだけど…君には遠慮はないね、不倶戴天だ」

そういつて飛龍を投げ捨てるがすでに足がふらつき始めている。出来る限り早くけりをつけないと…。

ユカリの解毒を後回しにして加勢しようとしたリョク。しかし、一陣の風が吹き抜けたことから、ある一言が思い出された。『風が吹く場所ならどこでも行きますから』そう言ってくれた白いあの人。

白い笛を探す 飛龍が頭を振って立ち上がる。

ポケットを探り…あつた！ 飛龍が怒りに燃えた目でツバサに狙いを付けた。

大慌てで取り出す。 飛龍がツバサを食い殺さんと毒牙を剥いて突進する。

ツバサを助けて、そう祈りながら世界中に響けとでもいう様に笛を吹き鳴らすリョク。

……何も起きない。飛龍の牙がツバサに襲い掛かり……

一瞬何が起きたかわからなかった。突然ぎしつと軋むような音を立てて飛龍がその場に縫いとめられたのだ。

「これは…ウィンド・ガーディアンズ？」

「ぎりぎりせーふ、間に合ったみたいですね」

ツバサが飛龍の突進が止まった原因を見抜いたところで不意に後ろから声をかけられた。

振り返った先にいたのは眼鏡をかけた真面目そうな、雪よりも真っ白い女性、ツバサにとっては初対面となる白龍<sup>ハクオウ</sup>だった。

ハクオウは周囲を見渡し、耳を澄ますように目を瞑る。目を開いたとき、その瞳の奥は怒りで燃えていた。

「最近では飛龍もましになってきたとは思いましたが…認識を改める必要があるようです。やられたふりして後から勝者を消しにかかるなんて狡い真似をするとは」

「ここは魔界だぜ？勝てばいいんだよ勝てば。それともいてえ目みねえとわからねえのか？」

「いまこの瞬間にもあなたの命綱は私が握ってるってことが分かってないようですねえ」

「ふん、強がり。ならその小僧と一緒に戦って俺達に勝つてからホザケー!!」

ふむ、と顎に手を当てて悩み、リヨク達に問いかける。任せてもらってもかまわないか、と

ツバサが頷くのを見て、二人も頷き返し、リヨクがユカリを抱えて下がった。

「それじゃ、私も久々に契約と行きましょう。…この間倒れたらしいですが大丈夫ですか？」

「大丈夫、あれから時間がたってるから問題ないよ。でも契約の歌を歌う時間は……」

「大丈夫です、私は歌無しで使えるようなタイプですから。ただし契約のキャパシティはもらいますけどね。じゃあうまく使ってください、私がいれば空中戦なんてハンデになりませんから」

そう笑ってハクオウが光を放ち、溶けるように形を変えてツバサの足に絡みついた。

光が消えて姿を現したのは純白の脚防具。使い方は契約のステータスアップとともに直接頭に伝わってくる。

『あの卑怯者にドラゴンの誇りってものをきっちり叩き込んでやりますよ!!』

「了解、負けを負けと認めることも必要だったこと、思い知らせてやる!!」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1910p/>

---

虹と翼と

2011年8月7日16時12分発行